大正六年九月十四日　第三種郵便物認可　・　昭和七年四月二十七日　印刷納本　・　昭和七年五月一日發行　（毎月一回一日發行）

建築と社會

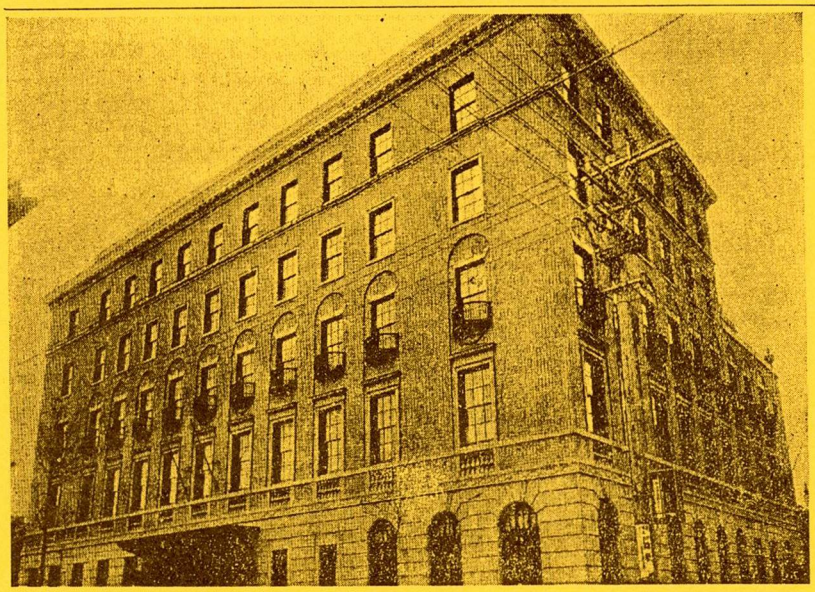
昭和七年五月一日　第十五輯　第五號

建築法規

5

日本建築協會

三建式鋼製建具



日本綿業倶樂部會館

設計—渡邊節建築事務所殿

施工—合資會社清水組殿

三建式S200エヤータイト式

上下ゲ**サツシ**186箇所御採用

製品優秀
納期正確
價格低廉

- **スチール・サツシ**
- **スチール・ドアー**
- **スチール・シヤツター**
- **スチール・フアイヤーカーテン**
- **スチール・パーチション**
- **ブローンズ・ドアー**

一手販賣總代理店

三機工業株式會社

支店 大阪市東區備後町——野村ビル内
電話本町(24)・1166(2)・1525

本店 東京市麹町區有樂町——三信ビル内
電話銀座(57)代表5141(9)・長5140

出張員 名古屋市中區笹島町——三井物産株式會社内
電話西2500(5)

取扱店 三井物産株式會社——各地支店・出張所

(型錄贈呈)

會　　告

當協會事務所は來る五月七日より下記個所へ移轉の豫定でありまず。

大阪市北區中之島3丁目3番地 朝日ビル4階第404號

電話代表番號本局(23) 4500番・5470番・5540番

追て電話機壹個（土佐堀 4265）什器、書棚、戸棚、机、椅子、スクリーン等拾數點賣却致しますから御希望の方は至急御申出を願ます。

昭和七年五月

社團法人 日本建築協會

會　　告

『メートル』法に依る實用安價小住宅設計圖案懸賞募集

最近改正發令されたる市街地建築物法施行令及同施行規則は全べて『**メートル**』法に依るべきことを指示す、我國住宅設計に於て『**メートル**』法に依れるものゝ甚だ尠き現狀は同法の主意よりしても緊急事なりとす、本會は茲に見る所ありて今回下記規程に依りて『**メートル**法に依る實用安價小住宅設計圖案』を募集す　この企圖に因つて日本住宅設計に『**メートル**』法適用の一新機軸の現るゝを翹望し又この方面に一つの基準となりてこれが普及促進に成効するを得ば幸ひなり尚建築費は貳千五百圓限度なるが設計圖案は現代に最も適應したる實用と安價とを兼ねたる案なることを特に强調附記す

『メートル』法ニ依ル實用安價小住宅設計圖案懸賞募集規程

1, 應募設計要件

1 位　　置　大阪ノ近郊
2 敷　　地　三百平方メートル內外（一面或ハ二面道路ニ沿フ）
3 建坪及所要ノ室　延一百平方メートル以內。室數、室ノ大サ等任意
4 構造、樣式　木造二階建、樣式ハ任意
5 建 築 費　貳千五百圓以內（延一平方メートル約貳拾五圓內外ノ見當門塀及庭園費ヲ除ク）建築費ノ著シク超過スルト認メラルヽモノハ採用セズ

2, 應 募 圖 面

1 平 面 圖　（配置圖ヲ兼ネタル）100分ノ1
2 立 面 圖　（二面以上）　100分ノ1
3 透 視 圖　（外　　部）
4 設備ニツキテ特ニ考慮シタル點ハ圖示スベシ
5 設計概要ハ簡明ニ圖面ノ餘白ヘ記入スベシ

3, 記入寸法ハ總ベテ「メートル」法ニ依リ且ツ疊寸法其他モ亦從來ノ大サニ拘泥スルヲ要セズ

4, 圖面ハ「ケント」半截又ハ之ニ相當スル原圖紙ヘ墨仕上トシ、陰影着色等任意トス
但平面圖ハ着色スベカラズ

5, 各圖面ニハ暗號ヲ附シ別ニ暗號並ニ住所氏名ヲ記シタル紙片ヲ封筒ニ入レ添附スベシ

6, 賞　　金

1 等　1 名　五 拾 圓
2 等　2 名　貳拾圓宛
3 等　3 名　拾 圓 宛
佳 作　若干名　五 圓 宛

7, 締切期日　昭和七年五月十日

8, 審査及當選發表

1 審査ノ結果ハ雜誌「建築と社會」ニ發表ス
2 審査員ノ氏名ハ次ノ如シ　（五十音順）

日本建築協會副會長　工學士　池田　寶氏
三越住宅部建築技師　工學士　岡田　孝男氏
日本建築協會住宅委員長工學士　葛野壯一郎氏
住友合資會社建築技師　工學士　高橋　榮治氏
神戸高等工業學校講師早大工學士　古塚　正治氏
京都帝大教授　工學博士　藤井　厚二氏
日本建築協會住宅委員　工學士　南　信氏

9, 審査ノ結果ニ對シテハ說明ヲ求メ又ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

10, 應募圖案ニ關スル一切ノ權利ハ本協會ニ歸屬スルモノトス

11, 應募圖案ハ一切之ヲ還附セズ

12, 應募圖案發送先

大阪市西區土佐堀通一丁目大同ビル內
日本建築協會宛

昭和七年五月

日本建築協會

登録 OHNO SHUTTER PATENTE 商標

日米特許一二個・實用新案登錄四六個併用

大野式防火捲上ヶ戸

〔特許大野式シヤッター〕

主要製品

大野式シヤッター

大野式ルーブルシヤッター

大野式工場用軸承

大野式轉子入軸筐

大野式轉子入戸車

大野式廻轉軸抵抗測定機

各種防火扉

日英米佛特許三一個・實用新案五九個併用

特許不二サッシ

受托營業

合資會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地・電話三田(45)三七三七番三七三八

取付出張員詰所・大阪市此花區上福島中二・電話福島(45)五八八

建築と社會

第十五輯第五號　　昭和七年五月發行

建　築　法　規

目　　次

市街地建築物法施行令改正に就いて …… 玉置豐次郎（1）

市街地建築物法施行規則改正に就いて …… 松井清之助（18）

市街地建築物法施行規則の內構造强度に關する改正條文に就いて …… 落藤藤吉（28）

改正市街地建築物法施行細則(兵庫縣)に就いて …… 山崎英二（42）

市街地建築物法施行細則(京都府)の改正に就いて …… 和田甲一（45）

市街地建築物法施行令並に同規則改正に就いて …… 津田敏雄（48）

窓 …… ローレンス・コーチヤ／アルバート・フレエ（56）

岐阜愛知兩縣下に於ける古建築解說(上) …… 天沼俊一（特附1）

談話室 …… （62）

本號執筆者紹介 …… （55）

新刊紹介 …… （55）

編輯後記 …… （64）

國際新建築集 …… （13）

會報 …… （會報1）

廣告索引 …… （廣告6）

市街地建築物法施行令改正に就いて

大阪府建築監督官　玉置豊次郎

法令改正の經過

兩三年前より內務省に於て、市街地建築物法令全般に渉つて大改正を施すことが計畫された。その計畫には復興局、社會局、警視廳及帝國大學等が之れに參與した。そして十數名の委員が選ばれて、改正を要する條項並に如何に改正すべきかに就いて愼重審議した。由來市街地建築物法令と稱せられて居るものゝ中には、一般に熟知されて居る如く

市街地建築物法（法律）
市街地建築物法施行令（勅令）
市街地建築物法施行規則（內務省令）その他二三の省令
市街地建築物法施行細則（各府縣令）

がある。そしてその協議會では色々研究を重ねられた結果、法律には手をつけないで勅令と內務省令を改正することに決定した。改正案が出來上ること數回、それがその度に練り治されること更に各々數回、數十回の會合の末漸く昨年の始めにその成案を見たのである。そこで內務省では更にその改正案に就いて全國の法令施行責任者と協議をなすために、都市計畫課長から當該主務課長に召集狀が發せられた。それが昭和六年四月一日二日の市街地建築物法主任官會議である。その成案を初めて見た者は中々思ひ切つた改正であるのに驚いた。果然その席上質問或は意見が山積した。會議後當局はその席上の模樣を見て更に熟慮を重ねた。斯くして案は終に法制局に廻され、茲に市街地建築物法施行令は昭和六年十二月二十四日に公布され、施行規則及市街地建築物法第十四條の規定に依る特種建築物耐火構造規則は共に昭和七年一月十二日に公布され、いづれも二月一日より施行されることになつたのである。自然各地方令である施行細則も改正されねばならないことになり、大阪府の細則は既に脫稿を見て目下內務當局と協議中であり近く發令されることになつて居る。

法令改正の要旨

市街地建築物法令の中法律は未だ一度も改正されて居ないのであるが、施行令は從來四回に渉つて既に一部づゝの改正があり、今度が第五回目の改正であり、施行規則は今迄に六回に渉つて一部づゝ改正され今回は第七回目である。大阪府の施行細則も今迄に三回に渉つて一部改正されて居るから今回は第四回目の改正に當る。

以上の如く觀じてくれば、これ等法令の改正は既に度々なされて來て居るのであるから、改正と云ふことは敢て珍らしくもないのであるが、今度のは從前のに比して改正の精神、改正された條項の數に於て全く異彩を放つものである。大正十二年九月一日の關東の大震災は全く吾々の豫想もしない大災害を惹起せしめた。そしてこれによつて當時吾々の持つて居た建築法規の制限ではこの種の大天災に應じるには眞に遺憾の點の尠からざることを有態に敎へられた。そこで爾後の變災に應ずることが出來る樣にする爲めに施行令、施行規則に大々的改正が施されなければならないことになつた。即ち大正十三年六月の改正がそれである。これが今日迄の法規の改正の中で最も重大なものであつた。而してその他の改正に至つては一問題のための一條、一項の些少の追加、削除若は變更に過ぎなかつたのである。然るに今回の施

行令、施行規則、施行細則の改正は大正十三年六月の改正にも比して更に重大である。

市街地建築物法が大正九年十二月一日に六大都市に施行されてから今日では既に滿十一年である。その間この法規の施行に關しては施行者、被施行者共に色々の經驗を得ることが出來た。良い經驗に就いてはこの際問題は別だが、不都合な經驗も尠くなかつた。その中特に著しい缺陷のあるものに關しては前記の如くその都度改正されて來たのであるが、缺陷は認められてもその影響が量に於て左程大したものでなかつたり、或は逆に餘り大き過ぎて俄に手のつけられないと云つたものが今日迄殘されて來たことになつて居る。今回の改正はこうした性質の條項全般に涉つて大清算を施されたことになり、滿十一ケ年間の經驗の大店卸と云ふ形である。

通常法令の缺陷と考へられて來て居るものには

1、元來嚴に規定され過ぎて居ることが判然してきたもの
2、時代の變遷に伴ひ緩和若くは追加を必要としてきたもの
3、學術の進歩に伴ひ規定の內容を變更せしむる必要の起つてきたもの
4、元來取締る必要があるにも拘はらず見落されて居たもの
5、都市生活を完全ならしむるため今少し理想的條項の必要を認むるもの
6、施行上の必要により統一又は單一を要するもの
7、法文の解釋を明確ならしむるため字句の修正を要するもの

等が擧げられるのであるが今回の改正に當つてはこれ等の諸點は大いに考慮され、出來るだけその是正に勉められたのである。

これ等の中で第一眼目に擧げられたものは元來嚴に規定され過ぎて居るものゝため或は時代の趨勢に伴はしめる必要あるものゝために大々的緩和を施すことであつて、改正の第一精神がこの點に置かれて居たのであるから、今回の改正は適用を受ける者にとつては眞に大福音と申すべきである。即ち用途地域制限を可なり寬大にし、特に過渡期の取扱を規定する施行令第三條の二所謂緩和規定に就ては從前の解釋を極度に解放し得る樣に書き換へられることになり、次に建築の認可申請及屆出を要するもの〻種類を思ひ切り減少して、手續の簡易化が實現されることになつたのである。前者によつて工業主は大いに解放され、後者によつて一般建築主は著しく自由になり得た譯である。尙今回緩和されたもの〻中で重要な點は道路を占用する建築物を相當に認めることになつた點であつて、從來の法規の精神では路面の交通保全と云ふ問題を非常に重要視しすぎたために、建築物若は工作物によつて路面の交通に支障を來す如き虞あるものは絕對にその設置を禁止されることになつて居たのであるが、その爲に却つて不都合を來す場合も出來、又立法當時豫想もされなかつた建築計畫が追々に出現してくることになり、茲に時代の趨勢に順應せしめたるに、路面交通上支障の無い程度に於て道路面上及道路面下を占用する建築物の種類を相當擴大に認めることになつた。これによつて大規模の建築を計畫する人々が從前屢々經驗した設計上の困難が可なり著しく樂になつた譯である。

次に今回の改正に際して構造强度に關する條項が可なり訂正されることになつた。曩に關東大震火災の經驗に鑑みて、この部門に關しては當時前述の如く著しい斧鉞が加へられたのであつたが、其の後建築材料及建築構造學並に施工の進歩は更に顯著なものがあつて、特に構造學に於ては最も長足な進歩を見たのである。依てこれ等の進歩に順應せしむるため、この方面の規定はこの際是非共改正されねばならないことになつた。

以上は緩和を計り或は必然的改正を要するものであつて、今度の改正の大部分をなすものであるが、元來取締を要するにも拘はらず見落されて居たものを新に追加すること及び都市生活を完全ならしむるため今少し理想的の條項を追加することに關しては今回の改正では勉めてこれを避けられたのである。前者に於ては僅かに擁壁の手續が追加され、後者に於ては衛生住宅地造成若は確保の爲め特別區域內の建築

物の高の最高限度及敷地内に存せしむべき空地の最小限度を規定し得る途が新たに講ぜられたのみである。尤も後者に關しては施行宜敷きを得ば眞に妙味ある條項であるが、果して施行者の側に於て如何程迄に施行し得るかは可なり疑問であり、從來の例によれば場合によつては全く死文に歸せないとも保し難い種類に屬するものである。

尙今回の改正中で重要な問題は施行上の必要より勉めて法規の統一若は單一を計られたことである。度量衡法が改正されたために早晩總ての單位がC、G、S單位に書き換へられねばならないことは必然であつて、取敢へず施行令のみは全部メートル法に換算されることになつた。然し法律が改正されないために換算し難いもの、規格統一との關係によるもの又はその他俄にメートル法に統一することが出來ない事情のあるもの等があつて、施行規則、施行細則中には從前の單位の儘で殘されたものもある。尙單一化の問題で重要なのは、從前より地方廳によつては市街地建築物法令以外の一般的建築取締に關する命令を持つて居たものが相當にある。それをこの際全部破棄することを本省より命ぜられたことである。即市街地建築物法令では必要なだけの規定は出來て居るのだからそれで充分である故に、それ以外の地方令は蛇足だから撤廢すべしと云ふ趣意である。今この撤廢の運命を見たもの丶二三の例を擧げると

1、明治十九年十二月　滋賀縣令第五十二號　家屋建築規則
2、明治三十二年九月　富山縣令第五十一號　建築制限規則
3、明治四十一年十月　山口縣令第六十一號　建造物制限規則
4、明治四十五年十二月二十二日　岡山縣令第百二十號　宇野港家屋建築規則
5、明治四十二年八月十八日　大阪府令第七十四號　建築取締規則
6、明治四十三年五月十七日　青森縣令第二十九號　青森市建築取締規則

等がある。これ等の中で大阪府の建築取締規則は最も完備したものであつて、施行上既に多年の經驗あるの故を以て、市街地建築物法令制定に當つては相當參考に供せられ、その持つ條項が多數市街地建築物法令の中に採用されて居る。それに漏れたもの丶中にも眞に優秀な條項が多く、大阪の建築物向上のため中々役立つて來たのであるが、この際市街地建築物法適用區域内に限り適用されないことになつた。然し乍ら特に必要を認めるものに限つて施行細則に繰り入れることにして施行に支障なからしめることにされた。

その他工業の進歩に伴ひ用途地域制の制限内容に多少の變更、削除若くは追加を要するものはそれ〴〵補正され、或は法文の解釋を明確にならしめる必要あるものに就ては各々字句の修正がなされた。

以上が大體今回の改正の精神の骨子であるが、之を更に再言するならば、今回の改正の要旨は法令の制限を今日の都市生活狀態に於て許し得る最大限度に迄緩和を計り、それによつて適用を受ける者の從來被つて居た迷惑を思ひ切り除去することに勉めたと云ふ點であつて、爾餘の點に至つては全く隨伴的のものであつた、今日我國の市街地建築物法の内容を諸外國の該法規の内容と比較研究するならば、最も重要な點で我國の規定が如何にも幼稚であり貧弱であることを知るであらう。然るにこの度の改正に當つてはこの點に關しては甚しく關心を持たれていない。然し乍らこの問題は決して永久に無視されるべきではない。そして今回の緩和とは全く別の精神で我々の都市の建築をより完全になし得る樣再度の大改正を俟つて都市生活の向上を他日に期せねばならない。

市街地建築物法施行令改正說明

元來施行令は主として用途地域制、高及空地、損害補償及法律の準用並に適用除外に關する規程である。而して今回の改正は損害補償を

除いて他の全部に及んで居る。就中用途地域制と準用並に適用除外に關する分は最も重要である。

改正には新たに追加されたものと曾て有つたが今回削除されたものと從前のものが變形されたものとの三種が考へられる。順次記載する改正條文に於ては新たに追加されたものを、及從前條文に於て削除されたものを共に……で示し、兩條文に於て互に變更されたものを——で示すことにする。

一、用途地域制に關する分

用途地域制に關しては第一條、第二條、第三條に於て次の如く改正された。

別表第一

改正條文

第一條　建築物左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ住居地域内ニ之ヲ建築スルコトヲ得ズ但シ第一號乃至第四號ニ該當スル建築物ニシテ行政官廳住居ノ安寧ヲ害スル虞ナシト認ムルモノ又ハ公益上已ムヲ得ズト認ムルモノハ此限ニ在ラズ

一、常時使用スル原動機馬力數ノ合計三ヲ超過スル工場

二、左ニ揭グル事業ヲ營ム工場

イ、玩具用普通火工品ノ製造

ロ、「アセチレンガス」ヲ用フル金屬ノ工作（單ニ修繕スルモノヲ除ク）

ハ、「ドライクリーニング」（單ニ拂拭スルモノヲ除ク）又ハ「ドライイダイング」

ニ、「セルロイド」ノ加熱加工又ハ鍛機ヲ用フル加工

ホ、塗料ノ吹付

ヘ、亞硫酸「ガス」ヲ用フル物品ノ漂白

ト、骨炭其ノ他動物質炭ノ製造

チ、羽又ハ毛ノ洗滌、染色又ハ漂白

リ、襤褸、屑綿、屑紙、屑絲、屑毛ノ類ノ消毒、撰別、洗滌又ハ漂白

ヌ、製綿、古綿ノ再製、起毛、反毛又ハ「フエルト」ノ製造ニシテ

從前條文

第一條　建築物左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ住居地域内ニ之ヲ建築スルコトヲ得ズ

一、常時十五人以上ノ職工ヲ使用スル工場、常時使用スル原動機馬力數ノ合計二ヲ超過スル工場、又ハ汽罐ヲ使用スル工場但シ行政官廳住居ノ安寧ヲ害スル虞ナシト認ムルモノ又ハ公益上已ムヲ得ズト認ムルモノハ此限ニ在ラズ

二、五臺以上ノ自動車ヲ常時收容スル車庫

三、劇場、活動寫眞館、寄席又ハ觀物場

四、待合又ハ貸座敷

五、倉庫業ヲ營ム倉庫

六、火葬場

七、屠場

八、塵芥燒却場

九、前各號ニ揭グルモノヲ除クノ外行政官廳住居ノ安寧ヲ害スル虞アリト認メ命令ヲ以テ指定スルモノ

原動機ヲ用フルモノ
ル、骨、角、牙、蹄、貝殻ノ挽割若ハ乾燥研磨又ハ金屬ノ乾燥研磨ニシテ原動機ヲ用フルモノ
ヲ、鑛物、岩石、土砂、硫黄、金屬、硝子、煉瓦、陶磁器、骨又ハ貝殻ノ粉碎ニシテ原動機ヲ用フルモノ
ワ、墨、懐爐灰又ハ煉炭ノ製造
カ、煉瓦、土器類、陶磁器、人造砥石又ハ坩堝ノ製造
ヨ、硝子ノ製造又ハ砂吹
タ、動力槌ヲ用フル鍛冶
三、室面積ノ合計五十平方メートルヲ超過スル自動車ノ車庫
四、劇場、活動寫眞館、演藝場又ハ觀物場
五、待合又ハ貸座敷
六、倉庫業ヲ營ム倉庫
七、火葬場又ハ產穢物處理場
八、屠場又ハ死畜處理場
九、塵芥又ハ汚物ノ處理場
十、前各號ニ揭グルモノヲ除クノ外行政官廳住居ノ安寧ヲ害スル虞アリト認メ命令ヲ以テ指定スルモノ

第二條　建築物左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ商業地域內ニ之ヲ建築スルコトヲ得ス但シ第一號又ハ第二號ニ該當スル建築物ニシテ行政官廳商業ノ利便ヲ害スル虞ナシト認ムルモノ又ハ公益上已ムヲ得ス ト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラス

一、常時使用スル原動機馬力數ノ合計十五ヲ超過スル工場但シ日刊新聞印刷所ヲ除ク
二、前條第二號ニ該當スルモノ
三、前條第七號乃至第九號ニ該當スルモノ
四、前各號ニ揭クルモノヲ除クノ外行政官廳商業ノ利便ヲ害スル虞アリト認メ命令ヲ以テ指定スルモノ

第三條　建築物左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ工業地域內ニ非サレハ

第二條　建築物左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ商業地域內ニ之ヲ建築スルコトヲ得ス

一、常時五十人以上ノ職工ヲ使用スル工場又ハ常時使用スル原動機馬力數ノ合計十ヲ超過スル工場但シ日刊新聞印刷所及行政官廳商業ノ利便ヲ害スル虞ナシト認ムルモノ又ハ公益上已ムヲ得スト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラス
二、前條第六號乃至第八號ニ該當スルモノ
三、前各號ニ揭クルモノヲ除クノ外行政官廳商業ノ利便ヲ害スル虞アリト認メ命令ヲ以テ指定スルモノ

第三條　建築物左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ工業地域內ニ非サレハ

之ヲ建築スルコトヲ得ス但シ第一號、第二號又ハ第四號ニ該當スル建築物ニシテ行政官廳衛生上有害ノ著ハ保安上危險ノ虞ナシト認ムルモノ又ハ公益上已ムヲ得スト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラズ

一、常時使用スル原動機馬力數ノ合計五十ヲ超過スル工場但シ日刊新聞印刷所ヲ除ク

二、左ニ揭ク事業ヲ營ム工場

イ、銃砲火藥類取締法ノ火藥類ノ製造

ロ、鹽素酸鹽類、過鹽素酸鹽類、硝酸鹽類、黃燐、赤燐、硫化燐金屬「カリウム」、金屬ナトリウム」、「マグネシウム」、過酸化水素水、過酸化「カリ」、過酸化「ソーダ」、過酸化「バリウム」、二硫化炭素、「メタノール」、「アルコール」、「エーテル」、「アセトン」、醋酸「エステル」類、「ニトロセルロース」、「ベンゾール」、「トルオール」、「キシロール」、「ピクリン」酸、「ピクリン」酸鹽類、「テレピン」油又ハ石油類ノ製造

ハ、燐寸ノ製造

ニ、「セルロイド」ノ製造

ホ、「ニトロセルロース」製品ノ製造

ヘ、「ビスコース」製品ノ製造

ト、合成染料若ハ其ノ中間物、顏料、塗料(漆ヲ除ク)、印刷用「インク」又ハ繪具ノ製造

チ、溶劑ヲ用フル「ゴム」製品又ハ芳香油ノ製造

リ、乾燥油又ハ溶劑ヲ用フル擬革紙布又ハ防水紙布ノ製造

ヌ、溶劑ヲ用フル塗料ノ加熱乾燥又ハ燒付

ル、石炭「ガス」類又ハ「コークス」ノ製造

ヲ、壓縮「ガス」又ハ液體「ガス」ノ製造

ワ、鹽素、「ブロム」、「ヨード」、硫黃、鹽化硫黃、弗化水素酸鹽酸、硝酸、硫酸、燐酸、苛性「カリ」、苛性「ソーダ」、「アンモニア」水、炭酸「カリ」、洗濯「ソーダ」、「ソーダ」灰、晒粉、次硝酸蒼鉛、亞硫酸鹽類、「チオ」硫酸鹽類、砒素化合物、「バリウ

之ヲ建築スルヨトヲ得ス

一、常時百人以上ノ職工ヲ使用スル工場又ハ常時使用スル原動機馬力數ノ合計三十ヲ超過スル工場但シ第一條第一號但書ニ該當スルモノハ此ノ限リニ在ラス

二、左ニ揭ク事業ヲ營ム工場但シ行政官廳衛生上有害ノ又ハ保安上危險ノ虞ナシト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラス

イ、銃砲火藥類取締法ノ火藥類ノ製造

ロ、鹽素酸鹽類、過鹽素酸鹽類、「ピクリン」酸、「ピクリン」酸鹽類、黃燐、赤燐、硫化燐、「カリウム」、「ナトリウム」、「マグネシウム」、過酸化水素、過酸化「カリウム」、過酸化「ナトリウム」、過酸化「バリウム」、硫化炭素、「エーテル」、「コロヂウム」「アルコホール」、木精、「アセトン」、ベンゾール」、「キシロール」、「トルオール」、「テレピン」油、硝化纖維素、「セルロイド」、石油類其ノ他之ニ類スル引火性又ハ發火性物品ノ製造

ハ、硫黃、沃度、ブローム、四鹽化炭素、鹽化硫黃、鹽酸、硫酸硝酸、燐酸、弗化水素、醋酸、無水醋酸、石炭酸、安息香酸、苛性加里、苛性曹達、「アンモニア」水、炭酸加里、炭酸曹達、「クロール」石灰、次硝酸蒼鉛、「チアン」化合物、砒素化合物、「バリウム」化合物、水銀化合物、鉛化合物、銅化合物、亞硫酸鹽類、「フオルマリン」、「クロロホルム」、「イヒチオール」、「ズルフオナール」、「グリセリン」、「アンチフエブリン」、「アスピリン」、「クレオソート」、「グアヤコール」等其ノ製造ニ際シ有臭又ハ有害ノ瓦斯又ハ廢液ヲ生スル物品ノ製造

ニ、水銀ヲ用ヰル計器ノ製造

ホ、燐寸ノ製造

ヘ、金屬ノ熔融又ハ精煉

ト、乾燥油又ハ熔劑ヲ用ヰル擬革紙布又ハ防水紙布ノ製造

チ、肥料ノ製造

ム」化合物、鉛化合物、銅化合物、水銀化合物、「シアン」化合物、「クロロホルム」、四鹽化炭素、「ホルマリン」、「ズルホナール」、「グリセリン」、「イヒチオールスルホン」酸「アンモン」醋酸、石炭酸、安息香酸、「タンニン」酸、「アセトアニリド」、「アスピリン」又ハ「グアヤコール」ノ製造

カ、蛋白質ノ加水分解ニ依ル製品ノ製造

ヨ、油脂ノ採取又ハ加熱加工

タ、石鹸、「フアクチス」又ハ「ペークライト」ノ製造

レ、肥料ノ製造

ソ、製紙

ツ、製革、製膠又ハ毛皮若ハ骨ノ精製

ネ、「アスファルト」ノ精製

ナ、「アスファルト」、「コールタール」、木「タール」、石油蒸溜産物又ハ其ノ殘渣ヲ原料トスル製造

ラ、「セメント」、石膏、消石灰、生石灰又ハ「カーバイト」ノ製造

ム、金屬ノ熔融又ハ精煉

ウ、電氣用「カーボン」ノ製造

キ、金屬厚板又ハ形鋼ノ工作ニシテ鉄打又ハ塡隙作業ヲ伴フモノノ、鐵釘類又ハ鋼球ノ製造

オ、伸線、伸管又ハ「ロール」ヲ用フル金屬ノ壓延

三、前號ニ掲クルモノヲ除クノ外行政官廳衛生上有害ノ又ハ保安上危險ノ虞アリト認メ命令ヲ以テ指定スル事業ヲ營ム工場

四、第二號イ、ロ、ハ、ニ、及ヌノ物品、可燃性「ガス」又ハ「カーバイド」ノ貯藏又ハ處理ニ供スルモノ

五、前號ニ掲クルモノヲ除クノ外行政官廳衛生上有害ノ又ハ保安上危險ノ虞アリト認メ命令ヲ以テ指定スル物品ノ貯藏又ハ處理ニ供スルモノ

リ、動物質原料ノ化製

ヌ、製革又ハ毛皮ノ精製

ル、骨、角又ハ貝殻ノ乾燥研磨

ヲ、製油又ハ製蠟

ワ、染料、顔料又ハ塗料ノ製造

カ、煉瓦又ハ坩堝ノ製造

ヨ、「アスファルト」ノ製造

タ、「セメント」、石膏、石灰、焼製石灰、炭化石灰又ハ石灰窒素ノ製造

レ、古綿又ハ襤褸類ノ精製

ソ、礦石類、黒鉛、硝子、煉瓦、陶磁器等ノ粉砕

ツ、石炭瓦斯又ハ壓縮瓦斯ノ製造

ネ、「コークス」ノ製造

ナ、石炭「タール」、木「タール」、石油蒸溜産物又ハ其ノ殘渣ヲ原料トスル製造

ラ、石鹸ノ製造

ム、製紙

ウ、熔劑ヲ用ヰル護謨製品ノ製造

キ、鋼釘又ハ鋼球ノ製造

ノ、汽罐ノ製造

オ、金屬ノ壓延又ハ伸線

ク、炭素製品ノ製造

三、前號ニ掲クルモノヲ除クノ外行政官廳衛生上有害ノ又ハ保安上危險ノ虞アリト認メ命令ヲ以テ指定スル事業ヲ營ム工場

四、第二號イ、ロ、ホ、リ、及レノ物品ノ貯藏又ハ處理ニ供スルモノ但シ行政官廳衛生上有害ノ又ハ保安上危險ノ虞ナシト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラス

五、前號ニ掲クルモノヲ除クノ外行政官廳衛生上有害ノ又ハ保安上危險ノ虞アリト認メ命令ヲ以テ指定スル物品ノ貯藏又ハ處理ニ供スルモノ

以上三箇條に於て改正された主要な事項は

1、職工數による制限を撤廢されたこと

2、汽罐による制限を撤廢されたこと

3、馬力數による制限が緩和されたこと

4、業態に關する規定が改正されたこと

5、但書による制限除外が擴大されたこと

の五項であつてこれを順次考察する。

1、職工數による制限を撤廢されたこと

從前住居地域に於ては常時十五人以上の職工を使用する工場、商業地域に於ては常時五十人以上を使用する工場は禁じられ、常時百人以上の職工を使用する工場は工業地域でないと建築する事が出來なかつた。然るに今度の改正によつて職工數による制限が全然撤廢されることになつたため百人以上の職工を使用する工場と雖も市內の隨所に建てられることになつたのである。

實際施行に當つてこの職工なるものに就て考へて見るに、現に就業するものが職工なるや否やの鑑識が頗る困難であること、常時使用するものなるや否やは一層監査の困難なこと、職工が多數なることが近隣に對して迷惑を及ぼすものなるや否や、一步讓つて迷惑を及ぼすものとしてもその數が增すと如何程の迷惑を增すものなるか推定困難なること等の疑義多く、寧ろ削除して施行を適切ならしめ併せて緩和を計るに如かずと考へられるのである。又一方この職工數の制限を撤廢しても從前の不適合工場の大部分は別に馬力數或は業態によつて制限を受けることになり、これ等の制限をも受けないで今回の緩和により新たに住居地域、商業地域を亂す虞あることになる工場の種類及その數は頗る僅少である。故に實際上の問題として職工數の制限を撤廢しても大した支障を來たさないからである。

2、汽罐による制限を撤廢されたこと

從前住居地域內に於ては汽罐を使用する工場は建築を禁じられて居たのであるが、今回の改正によつて汽罐を使用する工場と雖も住居地域內に建築することが出來る樣になつた。

今日では汽罐を使用するものは工場に限らずして、浴場、病院、ビルディング等に多くして而もこれ等に於ては漸增の傾向著しく獨り工場のみ制限される理由追々と薄弱となり、此の際この規定を撤廢するに如らざるによる。而して從來汽罐の制限を受けた工場の大部分は同時に業態上の制限を受けるもの多くして事實上矢張住居地域には禁ぜられることになり、從て汽罐による制限を撤廢されたために起る不都合は結局僅少である。

3、馬力數による制限が緩和されたこと

從來は常時使用する原動機馬力數の合計が住居地域では二であつたのが三に、商業地域では十であつたのが十五に、工業地域內では三十であつたのが五十に擴大され、いづれも五割或はそれ以上の大緩和である。

この馬力數の緩和は地域制改正中最も重要なものである。

由來原動機馬力數の制限は原動機そのものに弊害があるのでなくて、馬力數合計の大なるものは小なるものより業態が大なる故に自然弊害も大なるべしと云ふ推定のもとに、弊害の大小を計るバロメーターに使用されて居るに過ぎない。

地域制度制定のため制限を受けた工場の大部分は業態によるものと、この馬力數によるものとである。而して馬力數の制限に接觸し建築の自由を失つたものは可なり多數に上つて居る。そこでこの制限の抵抗度合ひに就いて考慮されることになり、終に內務省では意を決して緩和することにされたのである。然しこの程度の緩和によつて救濟されるものが不適合工場中の尙一小部分に過ぎないこと、而もこの爲めに相當の惡影響が有ることを思ふとき、この改正が將して適切であつたか否かに就ては再考の餘地は充分殘されて居たものと思はれる。それにしても產業合理化其の他の事情により原動機の馬力數が漸次增加せんとしつゝある折柄この

改正は適用を及けるものにとつては大福音であるに相違ない。

4　業態に關する規定が改正されたこと

從來工業地域外の業態による制限が地方によつて勅令によるもの以外に施行細則に相當規定されて居つた。今回はそれについて出來るだけ全國の統一を計ることにされた。その爲各地方令に出て居たものが勅令に纏められることになり、一見著しく制限對象が增加したかの如くであるが、各府縣の施行細則を併せ考ふるならば實質は必ずしも左程でもないことが分明する。

又曾て工業地域に非ざれば建築することの出來なかつた工場の中で作業の工程上支障少ないものに就ては未指定地域内にでも建築することが出來る樣にされたものもある。改正條項第一條第二號中の——の附してあるものが即ちそれであつて、これは明に緩和された譯である。

化學製品の名稱に就て同一物質であつて、今回の改正に際して呼稱の變つたものが可なりある。それは内閣資源局の標準用語によらしめるためであつた。又從來の用語が不充分或は不適格なため今回補正されたものがある。勿論その中に多少追加された意味のものもあつたり、或は範圍の狹くなつた意味のものも出來たのである。

又當然取締らるべくして落ちて居たもので新に追加になつたもの及工業の發達に伴ひ新製品が出來る樣になりそれを新に規定する必要の起つて來たものがある。

尚曾て制限されて居たものであつて實際には制限する程の弊害がないため削除になつたものもある。

以上の諸改正に關しては第三條第二號の規定に限り特に複雜なために前記諸項に分類して示すと次の樣である。

單に呼稱の變つたもの

改正呼稱	從前呼稱
ロ、金屬カリウム	ロ、カリウム
ロ、金屬ナトリウム	ロ、ナトリウム
ロ、過酸化水素水	ロ、過酸化水素
ロ、過酸化カリ	ロ、過酸化カリウム
ロ、過酸化ソーダ	ロ、過酸化ナトリウム
ロ、二硫化炭素	ロ、硫化炭素
ロ、メタノール	ロ、木精
ロ、ニトロセルローズ	ロ、硝化纖維素
ワ、弗化水素酸	ハ、弗化水素
ワ、洗濯ソーダ ソーダ灰	ハ、炭酸曹達
ワ、晒粉	ハ、クロール石灰
ワ、イヒチオールスルホン酸アンモン	ハ、イヒチオール
ワ、アセトアニリド	ハ、アンチヘブリン
ナ、コールタールを原料とする製造	ナ、石炭タールを原料とする製造
ラ、消石灰	タ、石灰
ラ、生石灰	タ、煆製石灰
ラ、カーバイト	タ、炭化石灰

用語の補正されたもの

改正呼稱	從前呼稱
ホ、ニトロセルローズ製品の製造	ロ、コロヂウム
ト、塗料(漆を除く)	ワ、塗料
ト、合成染料若は其の中間物	ワ、染料
ル、石炭ガス類	ツ、石炭瓦斯
ヨ、油脂の採取又は加熱加工	テ、製油又は製臘
ツ、製膠	ク、動物質原料の化製
ネ、アスファルトの精製	ヨ、アスファルトの製造

ウ、電氣用カーボンの製造
ク、炭素製品の製造
オ、ロールを用ふる金屬の壓延
オ、金屬の壓延
金屬厚板又は形鋼の工作にして鉚打又は嵌隙作業を伴ふもの
ノ、汽罐の製造
ヰ、鋼釘
ノ、鐵釘類
新たに追加されたもの
ロ、醋酸エステル類
ロ、硝酸鹽類
ヘ、ビスコース製品の製造
ト、印刷用インキ
ト、繪具
チ、芳香油の製造
ヌ、溶劑を用ふる塗料の加熱乾燥又は燒付
ワ、鹽素
ワ、チオ硫酸鹽類
ワ、タンニン酸
カ、蛋白質の加水分解に依る製品の製造
タ、フアクチス又はベークライトの製造
ツ、骨の精製
ナ、アスファルトを原料とする製造

別表第二

改正條文

第三條ノ二　前三條ノ規定又ハ市街地建築物法第四條第二項ノ規定ニ依リ現在地ニ建築スルコトヲ得サル種類ニ屬スル建築物ハ現在地ニ建築スルコトヲ得サルニ至リタル日ヨリ十年間ヲ限リ行政官廳ノ許可ヲ受ケ左記各號ニ規定スル制限内ニ於テ增築、改築、再築又ハ用ヲ、液體ガスの製造
オ、伸管
従前の規定より削除されたるもの
ハ、無水醋酸
ハ、クレオソート
タ、石灰窒素の製造
ニ、水銀を用ゐる計器の製造
5、但書による制限除外が擴大されたこと
従來住居地域にあつては工場のみに限り、住居の安寧を害する虞なしと認められる場合又は公益上已むを得ずと認められた場合は規定に拘はらず建築し得ることになつていたのを、今後は工場に限らず自動車の車庫及劇場の類に迄制限除外の範圍を擴げられることになつた。元よりこれは行政官廳の認定を要する問題であるから、直に制限が緩和された意味にはならないが、場合によつては住居地域内と雖劇場活動寫眞館が出來ることになる譯である。尤も施行に際しては劇場の類に關しては非常に廣大な遊園地内等の餘興場の様なものに限られることになる筈である。

二、用途地域制の緩和規定に關する分

緩和規定に關する條項は第三條の二であつて次の如く改正された

従前條文

第三條ノ二　地域又ハ工業地域内特別地區ノ指定又ハ變更ノ際現ニ存在スル建築物ニシテ前三條ノ規定ニ依リ現在地ニ建築スルコトヲ得サル種類ニ屬スルモノハ其ノ指定又ハ變更ノ日ヨリ十年間ヲ限リ行政官廳ノ許可ヲ受ケ左記各號ニ規定スル制限内ニ於テ增築、改築又

途ノ變更ヲ爲スコトヲ妨ケス

一、現在地ニ建築スルコトヲ得サルニ至リタル際現ニ存在スル建築物ノ敷地及之ト一團ヲ成ス土地ヲ超エテ增築、改築、再築又ハ用途ノ變更ヲ爲ササルコト

二、建築物ノ增築、改築、再築又ハ用途ノ變更ニ因リ增加スベキ建築面積ハ現在地ニ建築スルコトヲ得サルニ至リタル際現ニ存在スル建築物ノ建築面積ノ二分ノ一ヲ超過セサルコト

三、建築物ノ增築、改築、再築又ハ用途ノ變更ニ因リ增加スヘキ床面積ハ現在地ニ建築スルコトヲ得サルニ至リタル際現ニ存在スル建築物ノ床面積ヲ超過セサルコト

四、工場ノ常時使用スル原動機馬力數ヲ增加スル場合ニ於テ增加スヘキ馬力數ハ現在地ニ建築スルコトヲ得サルニ至リタル際常時使用スル馬力合計數ヲ超過セサルコト但シ行政官廳土地ノ狀況事業ノ種類、作業方法又ハ建築物ノ構造設備ニ依リ特ニ支障ナシト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラス

五、前號ニ揭クルモノヲ除クノ外用途ノ變更ニ付テハ現在地ニ建築スルコトヲ得サルニ至リタル際現ニ存在スル建築物ノ用途ニ類似スル用途又ハ設備ヲ變更セス若ハ之ニ些少ノ變更ヲ加フルニ依リ營ムコトヲ得ル用途ニ限ルコト

第二十六條ノ規定ニ依リ建築ノ許可ヲ受ケタル建築物ハ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ現在地ニ建築スルコトヲ得サルニ至リタル際現ニ存在スル建築物ト看做ス

こゝに於て改正された主要な事項は

1、緩和される場合を多くしたこと

2、再築を認めることになつたこと

3、敷地を超えて建築することを認める様なつたこと

4、增加し得る馬力數を明瞭にしたこと

5、用途變更の標準を明瞭にされたこと

ハ用途ノ變更ヲ爲スコトヲ妨ケス

一、地域又ハ地區ノ指定又ハ變更ノ際現ニ存在スル建築物ノ敷地ヲ超エテ增築又ハ改築セサルコト

二、建築物ノ增築又ハ改築ニ因リ增加スヘキ建築面積ハ地域又ハ地區ノ指定又ハ變更ノ際現ニ存在スル建築物ノ建築面積ノ二分ノ一ヲ超過セサルコト

三、建築物ノ增築又ハ改築ニ因リ增加スヘキ床面積ハ地域又ハ地區ノ指定又ハ變更ノ際現ニ存在スル建築物ノ床面積ヲ超過セサルコト

第二十六條ノ規定ニ依リ建築ノ許可ヲ受ケタル建築物ハ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ地域又ハ地區ノ指定又ハ變更ノ際現ニ存在スル建築物ト看做ス

の五項であつてこれを順次考察する

1、緩和される場合を多くしたこと

從來第三條の二の適用を受ける資格あるものは地域又は地區の指定又は變更のため制限を受けることになつた建築物のみであつて法令の制限對象が改正されたため新たに制限を受けることになつたもの例へば塗料の吹付工場は今迄住居地域内に於ても建築する

ことが出來たのであるが、今度の改正によると未指定地域或は工業地域でないと出來なくなつた如きものにはその恩典がなかつた譯であるが、同じく資格を得せしむるために「地域又は工業地域內特別地區の指定又は變更の際現に存在する建築物にして前三條の規定に依り現在地に建築することを得ざる種類に屬するものは其の指定又は變更の日より」を「前三條の規定又は市街地建築物法第四條第二項の規定により現在地に建築することを得さる種類に屬する建築物は現在地に建築することを得ざるに至りたる日より」に改正されることになつた

2、再築を認めることになつたこと

從前災害等によつて滅失した建築物は再度建築することは出來なかつたのであるが、今回新たに再築し得る途が開かれることになつた

用途地域制のためにこの改正は相當議論の餘地があるかも知れないが、災害を被つて弱らされた上に更に再築罷りならぬと云ふ從前の規定に比較すると中々溫か味豐な規定に變つた譯である。然し乍らこの規定の施行に際して建築物が滅失してから再築しやうとする意志の發動する迄の期間が餘程長かつたりその他二三の場合に於て相當疑義があり、それ等の適否に關してはその都度行政官廳の指示を俟たねばならないことは云ふ迄もない。

3、敷地を超えて建築することを認める樣になつたこと

現在地に建築することが出來なくなつた際現存していた敷地を超えて建築することは認められていなかつたが、かくては舊來の敷地內に建築物が密集し却て危險、有害なるを以て直接に隣接する土地であつて舊來の敷地と一團地になるものに限り、舊來の敷地を超えてその新たな敷地へも建築し得る樣に緩和され。尤もこれは隣接する土地に限るのであつて、道路や水路を距てたり或は飛び離れた土地を以て一團地とは見做し得ないのである

4、增加し得る馬力數を明瞭にしたこと

從來は馬力數の增加を許す限度に關しては明確な規定がなく、各府縣まちまちであつたものを明瞭にされることになつた。然しこの規定では府縣によつては從來の取扱よりも嚴重になつたものも出來た樣である。大阪府、愛知縣の如きは最も著しいものである然し乍らこれ等の府縣では嚴重になつた新規定に對し何等かの緩和が試みられることになるかも分らない。

5、用途變更の標準を明瞭にされたこと

今回の改正によつて現在地に於ては最早建築することの出來ない建築物であつても相類似する用途への變更とか設備を變更せずにすむもの若は變更を要しても極く些少な程度ですむものどうしの用途變更が認められることになつた。

例へば住居地域內に從前より存在した金屬の熔融を營んでいた工場が金屬の精煉工場になることは認めるがそれは用途が互に類似して居るから認められるのであつて、金屬の熔融工場が燐寸の製造工場になるが如きことは類似の用途でないから認められないのである。

又活動寫眞館の如き舞臺を變更することによつて寄席にすることは認めるが、倉庫業を營む倉庫を屠場にするには餘程の變更を要することになるからそれは認められないと云ふ樣な意味である。唯類似の用途とか些少の變更と云ふ文字は頗る判斷に苦しむのであるが、それはその場合場合に應じて適否を決定するより方法のないものと思はれる。

三、高及空地に關する分

高及空地に關する箇條は第四條より第十六條迄であつて附隨的のものとして第十六條の二をも次に記載する。

別表第三

改正條文

第四條中「六十五尺」ヲ「二十メートル」ニ、「百尺」ヲ「三十一メートル」ニ改ム

第五條　第一項中「四十二尺」ヲ「十三メートル」ニ、「三十尺」ヲ「九メートル」ニ、「二十五尺」ヲ「八メートル」ニ、「十五尺」ヲ「五メートル」ニ、同條第三項中「三寸」ヲ「十センチメートル」ニ改ム

第七條　第一項中「二十五尺」ヲ「八メートル」ニ改ム

第八條　第一項中「八十尺」ヲ「二十五メートル」ニ改ム

從前條文

第四條　建築物ノ高ハ住居地域内ニ於テハ六十五尺ヲ住居地域外ニ於テハ百尺ヲ超過スルコトヲ得ス但シ建築物ノ周圍ニ廣濶ナル公園、廣場、道路其ノ他ノ空地アル場合ニ於テ行政官廳交通上、衛生上及保安上支障ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラス

第五條　煉瓦造建築物、石造建築物及木造建築物ハ高四十二尺軒高三十尺ヲ、木骨煉瓦造建築物及木骨石造建築物ハ高二十五尺軒高十五尺ヲ超過スルコトヲ得ス

前項ノ石造ニハ人造石造及「コンクリート」造ヲ、木造ニハ土藏造ヲ包含ス

第一項ノ木骨煉瓦造建築物トハ厚三寸以上ノ煉瓦積ヲ以テ木骨ヲ被覆又ハ塡充シテ外壁ヲ構成スルモノヲ謂ヒ木骨石造建築物トハ厚三寸以上ノ石、人造石又ハ「コンクリート」ヲ以テ木骨ヲ被覆又ハ塡充シテ外壁ヲ構成スルモノヲ謂フ

一建築物ニシテ外壁二種以上ノ構造ヨリ成ルモノニ付テハ第一項ノ規定ノ適用ニ關シ制限ノ最嚴ナルモノニ依ル

第七條　建築物ノ各部分ノ高ハ其ノ部分ヨリ建築物ノ敷地ノ前面道路ノ對側境界線迄ノ水平距離ノ一倍四分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス且其ノ前面道路幅員ノ一倍四分ノ一ニ二十五尺ヲ加ヘタルモノヲ限度トス但シ住居地域外ニ在ル建築物ニ付テハ一倍四分ノ一ヲ一倍二分ノ一トス

前項ノ高トハ前面道路ノ中央ヨリノ高ヲ謂フ

第八條　建築物ノ敷地カ幅員同シカラサル二以上ノ道路ニ接スル場合ニ於テ一ノ道路ノ境界線迄ノ水平距離カ其ノ道路幅員ノ一倍二分ノ一以内ニシテ且八十尺以内ノ區域ノ内ニ在ル建築物各部分ノ高ニ付テハ前條ノ規定ノ適用ニ關シ其ノ道路ヲ前面道路ト看做ス

前項ノ規定ニ依ル前面道路二以上アル場合ニ於テ其ノ幅員同シカラ

第十一條　行政官廳ハ土地ノ狀況ニ依リ特ニ必要ト認ムルトキハ區域ヲ指定シ其ノ區域內ニ於ケル建築物ノ高ノ最低限度又ハ最高限度ヲ定ムルコトヲ得

第十四條ノ二　行政官廳ハ土地ノ狀況ニ依リ特ニ必要ト認ムルトキハ區域ヲ指定シ其ノ區域內ニ於ケル建築物ノ敷地內ニ存セシムヘキ空地ノ最小限度ヲ定ムルコトヲ得

第十四條ノ三　都市計畫區域內ニ於テ第十一條ノ規定ニ依リ建築物ノ最低限度若ハ最高限度ヲ定ムル場合又ハ前條ノ規定ニ依リ建築物ノ敷地內ニ存セシムヘキ空地ノ最小限度ヲ定ムル場合ニ於テハ行政官廳ハ之ヲ都市計畫委員會ノ議ニ附スヘシ

第十五條　第一項中「前條ノ」ヲ「本令ニ於テ」ニ、「六尺」ヲ「二メートル」ニ、同條第二項中「三尺」ヲ「一メートル」ニ、同條第三項中「前條」ヲ「第十四條」ニ改ム

第十六條中「第七條、第八條、第十條、第十四條、前條及第十七條ノ」ヲ「本令ニ於テ」ニ改ム

第十六條ノ二　建築物ノ敷地ガ二以上ノ地域、地區又ハ第十四條ノ二ノ規定ニ依リ指定セラレタル區域ニ跨ル場合ニ於テ第一條乃至第三條、第十四條又ハ第十四條ノ二ノ規定ノ適用ニ關シテハ制限ノ最嚴サルトキハ幅員小ナル前面道路ハ幅員最大ナル前面道路ト同一ノ幅員ヲ有スルモノト看做ス

第一項ノ場合ニ於テ同項ニ規定スル區域ノ外ニ在ル建築物各部分ニ付テハ幅員最大ナル道路ヲ前面道路ト看做ス

第十一條　行政官廳ハ命令ヲ以テ特ニ道路ヲ指定シ之ニ面スル建築物ノ高ノ最低限度ヲ定ムルコトヲ得

第十五條　前條ノ建築面積トハ建築物ノ水平斷面ニ於ケル外壁ノ又ハ之ニ代ルヘキ柱ノ中心線內面積中最大ナルモノヲ謂フ但シ地階ニシテ其ノ外壁ノ高地盤面上六尺以下ノモノノ部分ノ面積ハ之ヲ建築面積ト看做サス

軒、庇、桔出緣ノ類カ前項ノ中心線ヨリ突出スルコト三尺テ超ユル場合ニ於テハ其ノ外端ヨリ三尺ヲ後退スル線ヲ以テ前項ノ中心線ト看做ス

前條ノ建築物ノ敷地ノ面積トハ建築物ノ敷地ノ水平斷面ノ面積中最大ナルモノヲ謂フ

第十六條　第七條、第八條、第十條、第十四條、前條及第十七條ノ建築物ノ敷地トハ一構ノ建築物ニ屬スル一團ノ土地ヲ謂フ

ナルモノニ依ル但シ特別ノ事由アル場合ニ於テ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

これ等の條項を通覽するとこの分の改正の事項は自ら三種になる。

1、尺單位をメートル單位に改められたこと

2、建物の高及敷地内に存せしむべき空地に關して新たな制限方法が設けられたこと

3、手續の制定及解釋の的確を期せられたこと

の三項目である。これ等の各項について考へると。

1、尺單位をメートル單位に改められたこと

第四條　第五條、第七條、第八條及第十五條の一部は度量衡法改正に基く必然の改正に過ぎないものであつて說明する迄もない。

2、建物の高及敷地内に存せしむべき空地に關して新たな制限方法が設けられたこと

第十一條は高に關する新規定であり、第十四條の二は空地に關する新規定である。從來の體積制限地域制は完全に用途地域制に一致せしめ餘りに概括的の憾あつたのであるが、今回土地の實情に應じ適當の制限をなし得る途が開かれた。

この新制度は今回の改正中唯一の收穫である。緩和することが將して進歩と云ひ得るか否かについては相當疑義があるが、それに反してこの規定は確實に一段の進歩である。都市の人口密度を小にすると云ふことは都市のあらゆる災害、不快を除くに最も適切な方法である。人口密度が大であることが如何に社會風敎上に惡影響を及ぼすかは既に議論の餘地がない。故に今日人口密度を小にすることによつて救濟し得る社會現象が可なりあることは頗る明瞭である。從つて人口密度の增加を防ぐ手段を講ずることは急務である。第十一條後段及第十四條の二の追加はこの意味に於て眞に適切な改正であると讃嘆することが出來る。

3、手續の制定及解釋の確定されたること

地方長官は第十一條及第十四條の二の規定により建築物の高の最低、最高若は空地の限度を定めることの權限を附與されて居る。然し乍らその決定は地方地主及家主に對しては場合により又は考へ方により私權の行使を制限することが著しいことになり、頗る重大な影響を都市に與ふることになるを以てその決定は愼重を要する譯である。その意味に於て第十四條の三に依つてかゝる際には都市計畫委員會の議に付すべきことが制定された。

次に第十五條、第十六條、及第十六條の二に於て解釋の的確を期するため補正並に追加が行はれた。その內容は說明する迄もない程度のものである。

四、市街地築築物法準用に關する分

法律の準用に關する分は第二拾六條の二の規定である。

尙第二十七條の改正は法律の準用とは無關係なるもこの項で說明する。

別表第四

改正條文

從前條文

第二十六條ノ二　建築物ノ敷地ヲ造成スル爲ニスル擁壁ニ對シテハ市街地建築物法第九條、第十二條、第十五條乃至第二十二條及第二十五條ノ規定ヲ準用ス

第二十七條中「又ハ準用」ヲ削ル

第二十七條　市街地建築物法ハ古社寺保存法又ハ史蹟名勝天然紀念物保存法ノ適用又ハ準用ヲ受クル建築物ニ付之ヲ適用セス

1、第二十六條の二の追加

今迄は建築物に非ざる工作物に付市街地建築物法を準用されたためしはなかつたのであつて、擁壁も建築物に非ざるの故を以て適用から敬遠されて來たのである。然し乍ら毎年雨期等には崖崩れ多く、その爲め家屋の倒壊、人間の壓死の記事が新聞の三面を賑はして居る。山間、崖地の都市に於けるこれ等の災害は眞に座視するに忍びないものがある。そこで今度終に法律第二十四條「本法は建築物に非ざる工作物に之を準用することを得」の規定を生かして、市街地建築物法の制限對象物とされた譯である。これによつて建築物の敷地を造成する擁壁は建築線、構造強度その他の規定の適用を受けることになつた。

2、第二十七條の改正

現在に於ては國寶保存法又は史蹟名勝天然紀念物保存法を準用されるものが無いから之を削ることになつたのである。

五、市街地建築物法適用除外に關する分

適用除外に關する箇條は第二十八條、第二十八條の二及第二十九條である。

別表第五

改正條文	從前條文
第二十八條　左ノ各號ノ一ニ該當スル建築物ニシテ行政官廳支障ナシト認ムルモノニ對シテハ市街地建築物法第八條、第九條及第十一條ノ規定ヲ適用セサルコトヲ得 一、鳥居、形像、紀念門、紀念塔ノ類 二、交通信號塔、公共便所ノ類 三、陸橋ノ類 四、地下停車場ノ類 五、高架工作物内ニ設クル倉庫、店舗ノ類 第二十八條ノ二　地階ヲ有スル建築物ノ地盤面下ニ在ル部分ニ對シテ	第二十八條　鳥居、形像、紀念門、紀念塔其他ノ建築物ニシテ道路ヲ占用シテ施設スルモノニ對シテハ市街地建築物法第八條、第九條及第十一條ノ規定ヲ適用セス

ハ市街地建築物法第九條ノ規定ヲ適用セサルコトヲ得

第二十六條ノ二ノ擁壁ノ地盤面下ニ在ル部分ニ付亦同シ

第二十九條中「足代及棧橋ノ類ニシテ假設的ノ」ヲ「足代、棧橋其ノ他ノ假設建築物ニシテ行政官廳支障ナシト認ムル」ニ改ム

第二十八條及第二十八條の二は主として道路占用建築物その他の假設に非ざる建築物に關する適用除外であり、第二十九條は假設建築物に關する適用除外である。

1、第二十八條及第二十八條ノ二

從來第二十八條の規定は道路を占有する建築物に限られて居たのであるが、今回の改正ではそれ以外のものも含まれることになつた。この二つの條項の改正は今回の幾多の改正の中で最も時宜を得たものと云はれて居る。地下停車場、高架工作物内の使用或は歩道下の建築物等の問題は大正七八年の市街地建築物法制定當時では殆んど考慮する必要がなかつたのである。それが爲め規定から全然削除されて居た。然るに時代の趨勢と共にこれ等の問題が日本の各都市に於て追々考究されねばならない様になり、そして既にこの問題に直面した都市では施行令の規定の仕方が時勢に合つて居ないために問題の處置に當惑した。故にこの改正によつて漸くとりつく島を得た感がある。この中特に歩道下の建築物に關しては時代の要求眞に切なるものがあり、この改正によつて幾多の建築設計が浮び上ることになつた。尙陸橋が認められるゝことになつたのも大なる福音である。道路を距てゝ運河に接する工場、倉庫等が道路によつて兩斷されて居る等の際、兩者間を陸橋等にて連絡することは土地の利用或は事業能率增進の上から見れば實に必要な問題であつた。その陸橋の類が從前の規定では禁ぜられて居たゝめに、不自由を感じられて居たことは大したものであり、特に大阪の如く港灣都市、工業都市にあつてはこの緩和に就ては屢々要求されて來たのであるが、今回これを認める途が開かれたことは眞に同慶に堪えない次第である。

第二十九條　博覽會建築物、觀覽場、飾門、飾塔、足代及棧橋ノ類ニシテ假設的ノモノニ對シテハ市街地建築物法第二條乃至第六條、第九條及第十一條ノ規定ヲ適用セサルコトヲ得

2、第二十九條

從來假設建築物として規定の適用を一部除外される資格あるものは此處に列擧されて居るものに限られて居たのである。然るに實際にはこれに列擧されてあるもの以外に全く一時の用途に供せられる建築物の種類はまだ外に多數ある。その爲めにこれ等の見落されて居た假設物に直面するときは前條同樣その處置に當惑された。今回はこれ等の不自由を一掃するために一切の假設物が包括されることになつた。これも大なる緩和と稱することが出來る。

（昭和七年一月二十日稿）

市街地建築物法施行規則改正に就いて

松井清之助

時代の趨勢は建築に關する法規の改正を必要とし、既に市街地建築物法施行令及同法施行規則は改正公布され、本年二月一日より施行されてゐるのである。同法施行細則（地方令）も既に愛知縣、京都府、警視廳、神奈川縣、及兵庫縣に於ては改正の上公布されて居るのであるが、大阪府の施行細則は未だ公布されてゐないけれども、近く發令されることとなつてゐる。

元來施行規則は前面及屋上突出部、一般構造設備、構造強度、防火地區、美觀地區、工事執行及一部適用除外に關する規定を、其内容として居るのであるが、今度の改正は美觀地區に關する規定を除いて全般に渉つて四十箇條に及んで行はれたのである。其の内で最も重要な改正と思はれるのは、構造強度に關する規定と、工事執行に關する規定とであつて、特に「コンクリート」の調合と其の強度に付ての新しい學說に依る改正、及手續の簡易化を圖る爲の大改正とは顯著なるものである。

四十箇條の改正の内で、今度削除された條項、六ケ條、追加された條項、五ケ條、其の他は嚴に失する爲の緩和や、變更が行はれ、又從來よりも嚴に改正されたと思はれるものは、唯五ケ條のみであつて、而も是等は取締を必要とするもので見落されてゐたと考へられるものばかりで、此の際の追加、變更は當然のものと言ひ得るのである。

今各條項を追つて順次說明することとするが、構造強度に關する規定のみは、大阪府で其の方の取締に當つてゐられる落藤技師が詳くし說明されることゝなつてゐるのでこの分は省略し、從前條文と改正條文の全文とを別表で對照して、追加されたもの、削除されたものを（――）で、變更されたものを（……）で表すことゝした。

一、用語の定義に關する分

第一條中界壁に對する定義が削除された。

別表第一

改正條文	從前條文
第一條　本則ニ於ケル用語ハ左ノ例ニ依ル（第一號乃至第八號及第十號乃至第二十一號　省略）	第一條　本則ニ於ケル用語ハ左ノ例ニ依ル（第一號乃至第八號及第十號乃至第二十一號　省略）
九　削除	九　界壁トハ接續建築物ヲ區劃スル壁體ヲ謂フ

施行規則中界壁と云ふ字句の用ひられて居る條項は、防火地區內建築物に關する規定中の第百三十一條で防火地區內建物の界壁は防火壁と爲すべしと云ふものがあつたが、界壁の意義が明瞭でないのと假に字義の如く建築物を區劃する爲の壁體と解しても其の制限が餘りに嚴に過ぐるものとの見解から今度削除されることとなつたので、自然界壁の定義が必要でなくなつたのである。

二、突出部に關する分

第四條、第五條及第六條の三箇條で前二ケ條は建築線よりの前面突出部の限度、後者は高の制限を超ゆる場合の屋上突出部の限度の規定で次の如く改正された。

別表第二

改正條文

第四條　市街地建築物法第九條但書ノ建築物ノ前面突出部ハ地方長官特ニ指定スル場合ニ於テハ左ノ範圍內ニ於テ建築線ヨリ突出セシムルコトヲ得但シ特ニ地方長官ノ許可ヲ受ケタル場合ノ外前面建築線間ノ距離ノ二十分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

一　蛇腹、軒、小塔、出窓、標旗、標燈、招牌其ノ他之ニ類スルモノハ路面上八尺以上ニ在ル場合ニ限リ三尺迄

二　出入口ノ階段、凹庭ノ手摺地覆、腰石、根石其ノ他之ニ類スルモノハ一尺迄

第六條　裝飾塔、物見塔、屋窓、昇降機塔、水槽等建築物ノ屋上突出部ニ付テハ市街地建築物法施行令第四條乃至第九條ノ適用ニ關シ其ノ部分ノ高ノ最高限ノ五分ノ一迄ハ建築物ノ高ニ之ヲ算入セズ但シ其ノ算入セザル部分ノ最大面積ノ合計ハ建築面積ノ十分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ズ

昇降機塔ニ付テハ特ニ地方長官ノ許可ヲ受ケ前項ノ五分ノ一ヲ九メートル迄增加スルコトヲ得

從前條文

第四條　市街地建築物法第九條但書ノ建築物ノ前面突出部ハ左ノ範圍內ニ於テ建築線ヨリ突出セシムルコトヲ得但シ特ニ地方長官ノ許可ヲ受ケタル場合ノ外前面建築線間ノ距離ノ二十分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

一　蛇腹、軒、小塔、出窓、標旗、標燈、招牌其ノ他之ニ類スルモノハ路面上八尺以上ニ在ル場合ニ限リ三尺迄

二　出入口ノ階段、凹庭ノ手摺地覆、腰石、根石其ノ他之ニ類スルモノハ一尺迄

第六條　裝飾塔、物見塔、屋窓、昇降機塔、水槽等建築物ノ屋上突出部ニ付テハ市街地建築物法施行令第四條乃至第八條ノ高ノ最高限ノ五分ノ一迄ハ建築物ノ高ニ之ヲ算入セス但シ其ノ算入セサル部分ノ最大幅ハ建築物ノ高ノ五分ノ一ヲ、其ノ最大面積ノ合計ハ建築面積ノ十分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

第四條は從來建築線が道路幅の境界線より後退して指定されて居る場合、例へば大阪府、愛知縣の一部の如きは家並を整へる爲に道路幅より一尺五寸後退して建築線が指定され、又他の都市では特殊建築物に限り建築線を後退して指定され、或は將來の道路擴築を目的として後退建築線を指定して居る樣な場合等には規定に明定されて居る範圍內では自由に建築線より前面突出部を突出せしめ得ることとなつて居

たのであるが、改正に依つて一般的でなく將來街路の擴築に際して齟齬を來さない場合に限り地方長官が指定して前面突出部の建築線よりの突出を認むる様に改められたもので、從つて特に地方長官の指定なき場合は前面突出部の建築線より突出することは拒否されることとなつたのである。

第六條の改正には次の二點が考へられる

1、屋上突出部の最大幅の制限が除かれたこと

2、昇降機塔に限り高の限度を緩和されたこと

種々の屋上突出部の內でも昇降機塔は最近建築される大建築物では集合せしめて設くる方便宜多く、從來の規定に依る場合には僅かな距離を隔てて制限內のものを數多く設けられることゝなつて、之を拒否する途なく規定の趣旨を徹底せしめることが困難であるので、此不都合を避け時運に從ひ、撤廢する方適當であると認められたのである。

昇降機塔は建築物の如何を問はず構造上建築物の屋上に相當高く突出せしめねば其の機能を充分にあらはすことの出來ぬ實情にあつて、從來の規定では、住居地域內の低い建築物に設けられる昇降機塔は充分に其の機能を現すことが出來ず、又最高の場合でも二十尺迄認められるに過ぎないので、これだけの高の內で機械を配置するには無理を生ずる場合は地方長官の許可を受けて九メートル迄認められる様緩和されたのである。

三、一般構造設備に關する分

第七條より第四十三條迄で別に是等の構造設備を有效に保持すべき規定が第三條にあつて、今度は是等の內で十ケ條が次の如く改正された。

別表第三

改正條文	從前條文
第七條　建築物ノ敷地ハ其ノ接スル道路境界ニ於ケル路面ヨリ高カラシメ建築物ノ床下ノ地盤面ハ周圍ノ地盤面ヨリ高カラシムベシ但シ建築物ノ用途又ハ土地ノ狀況ニ依リ地方長官本條ノ規定ニ依リ難シト認メ又ハ必要ナシト認メタル場合ハ此ノ限ニ在ラス	第七條　建築物ノ敷地ハ其ノ接スル道路境界ニ於ケル路面ヨリ高カラシムヘシ但シ建築物ノ用途又ハ土地ノ狀況ニ依リ地方長官本條ノ規定ニ依リ難シト認メ又ハ必要ナシト認メタル場合ハ此ノ限ニ在ラス
第八條　建築物ノ敷地濕潤ナルトキ、出水汎濫ノ虞アルモノナルトキ又ハ塵芥ノ類ヲ以テ埋立テラレタルモノナルトキハ地方長官ハ地盤面ノ地揚高、建築物ノ床高又ハ地盤ノ改良等ニ關シ必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得	第八條　建築物ノ敷地濕潤ナルトキ又ハ出水氾濫ノ處アルモノナルトキハ地方長官其ノ地盤面ノ地揚高又ハ建築物ノ床高ニ關シ必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得
第十條　下水溝、下水管、溜桝ノ類ハ耐水材料又ハ當該官吏又ハ吏員ノ承認スル材料ヲ以テ構造スベシ	第十條　下水溝、下水管、溜桝ノ類ハ耐水材料又ハ地方長官ノ承認スル材料ヲ以テ構造スヘシ
第十三條　汲取便所ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルベシ 一　糞尿溜、尿樋、糞尿壺及其ノ上口周圍ハ不滲透質ノ材料ヲ以テ造ルコト	第十三條　汲取便所ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルヘシ 一　糞尿壺及尿樋ハ不滲透質ノ材料ヲ以テ造リ糞尿壺ノ上口周圍ハ厚三寸以上ノ「コンクリート」ヲ以テ漏斗狀ニ作リ不滲透質ノ材料

二　床下ニ於テハ耐水材料ヲ以テ他ノ部分ト遮斷スルコト

三　汲取口ハ密閉シ得ル裝置ヲ爲シ地盤面ヨリ十センチメートル以上高カラシメ且之ヲ直接道路ニ面セシメザルコト

第十九條　居室ハ其ノ室面積ノ十分ノ一以上ノ有效面積ヲ有スル窓又ハ之ニ代ルヘキ採光面ヲ有スヘシ

前項ノ採光面幅三尺以上ノ椽側ヲ距ツル場合ハ其ノ採光面積ノ二分ノ一ヲ有效面積ト看做ス此ノ場合ニ於テ濡椽ハ椽側ト看做サス

第一項ノ採光面積ハ左ノ各號ニ該當スル部分ニ限リ有效ナルモノト看做ス但シ道路、公園、廣場等ノ空地ニ面スルモノニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

一　其ノ部分ヨリ直上屋根面（直上屋根面ナキトキハ壁頂迄以下同シ）ニ至ル高ハ住居地域内ニ於テハ其ノ面スル隣地境界線迄ノ水平距離ノ二倍半ヲ、商業地域内ニ於テハ五倍ヲ、住居地域及商業地域内ニ於テハ四倍ヲ超過セサルコト

二　其ノ部分ヨリ直上屋根面ニ至ル高ハ住居地域内ニ於テハ同一敷地内ニ在ル對向壁迄ノ水平距離ノ二倍半ヲ、商業地域内ニ於テハ五倍ヲ、住居地域及商業地域外ニ於テハ四倍ヲ超過セサルコト但シ其ノ部分ヲ含ム水平面ヨリ對向壁直上ノ屋根面ニ至ル高カ住居地域内ニ於テハ對向壁迄ノ水平距離ノ二倍半ヲ、商業地域内ニ於テハ五倍ヲ、住居地域及商業地域外ニ於テハ四倍ヲ超過セサルトキハ此ノ限ニ在ラス

軒、庇其ノ他著シク採光ヲ妨クルモノアリト認メ又ハ衛生上特別ノ必要アリト認ムルトキハ地方長官ハ採光ニ關シ特ニ採光面ノ增加其ノ他適當ナル措置ヲ命スルコトヲ得

第一項ノ適用ニ於テ天窓ハ地方長官ノ認定ニ依リ其ノ面積ヲ三倍迄ニ換算スルコトヲ得

第一項ノ面積ニ相當スル窓又ハ之ニ代ルヘキ採光面ノ部分ハ其ノ上端ヲ床面上五尺七寸以上ト爲スヘシ

ヲ以テ上塗ヲ爲スコト

二　床下ハ周圍ニ耐水材料ヲ以テ障壁ヲ設ケ他ノ部分ト遮斷スルコト

三　汲取口ハ其ノ下端ヲ其ノ接スル地盤面ヨリ三寸以上高クシ且之ヲ直接道路ニ面セシメサルコト

第十九條　（第一項乃至第四項、第六項及第七項　省略）

第一項ノ適用ニ於テ天窓ハ其ノ面積ヲ二倍ニ換算ス

隨時開放シ得ル襖、障子ノ類ヲ以テ仕切リタル二室ハ本條ノ適用ニ關シ之ヲ一室ト看做ス

第二十四條　出入口及窓ノ扉ハ路面上三メートル以上ニ在ルモノヲ除クノ外開閉ノ際ト雖建築線ヨリ突出セザル構造ト爲スベシ但シ第四條ノ指定アリタル場合ハ同條第二號ノ例ニ依リ建築線ヨリ突出セシムルコトヲ得

第二十七條　屋根ハ耐火構造ニ非サルトキハ不燃材料ヲ以テ覆葺スヘシ但シ「モルタル」塗、漆喰塗ノ類ヲ以テ覆葺セムトスルトキハ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ

瓦葺屋根ニ在リテハ引掛桟瓦ノ類ヲ使用シ又ハ瓦ヲ野地ニ緊結スヘシ

神社建築物ノ屋根、茶室、四阿ノ類ノ屋根又ハ輕微ナル庇ノ類ハ土地ノ狀況ニ依リ地方長官ノ許可ヲ受ケ本條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

地方長官ハ土地ノ狀況ニ依リ支障ナシト認ムルトキハ區域ヲ指定シ第一項ノ規定ヲ適用セザルコトヲ得

第二十九條　建築面積二百坪以上ノ建築物ニハ建築面積二百坪以内毎ニ防火壁ヲ設クヘシ但シ外壁、床、屋根、柱及階段耐火構造ナルトキ若ハ壁體、床、屋根、天井、小屋、柱及階段不燃材料ヲ以テ構成セラレタルモノナルトキ又ハ地方長官其ノ用途ニ依リ已ムヲ得スト認ムルトキ若ハ土地ノ狀況ニ依リ特ニ支障ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四十二條　高六十五尺ヲ超過スル建築物ニハ適當ナル避雷設備ヲ爲スヘシ但シ地方長官土地ノ狀況又ハ建築物ノ種類ニ依リ必要ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第四十三條　高六十五尺又ハ軒高五十尺ヲ超過スル建物ハ其ノ壁體、床、柱、屋根、階段等主要構造部ヲ耐火構造ト爲スヘシ但シ壁體、床、屋根、天井、小屋、柱及階段不燃材料ヲ以テ構成セラレタルモノニシテ地方長官支障ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二十四條　道路ニ面スル出入口及窓ノ扉ハ開閉ノ際ト雖モ建築線ヨリ突出セサル構造ト爲スヘシ但シ路面上十尺以上ニ在ルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二十七條　屋根ハ耐火構造ニ非サルトキハ不燃材料ヲ以テ覆葺スヘシ但シ「モルタル」塗、漆喰塗ノ類ヲ以テ覆葺セムトスルトキハ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ

瓦葺屋根ニ在リテハ引掛桟瓦ノ類ヲ使用シ又ハ瓦ヲ野地ニ緊結スヘシ

神社建築物ノ屋根、茶室、四阿ノ類ノ屋根又ハ輕微ナル庇ノ類ハ土地ノ狀況ニ依リ地方長官ノ許可ヲ受ケ本條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

第二十九條　建築面積二百坪以上ノ建築物ニハ建築面積二百坪以内毎ニ防火壁ヲ設クヘシ但シ外壁、床、屋根、柱及階段耐火構造ナルトキ又ハ地方長官其ノ用途ニ依リ已ムヲ得スト認ムルトキ若ハ土地ノ狀況ニ依リ特ニ支障ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四十二條　高六十五尺ヲ超過スル建築物ニハ適當ナル避雷設備ヲ爲スヘシ

第四十三條　高六十五尺軒高五十尺ヲ超過スル建物ハ其ノ壁體、床、柱、屋根、階段等主要構造部ヲ耐火構造ト爲スヘシ

以上の改正を通覽すれば建築敷地に關する條項其の他一、二は從來よりも嚴になつたと考へられるも、他の條項は總べて緩和され特に防火、耐火に關する規定は著しく緩和されて居る、以下各條を追つて考察すると

第七條は敷地高に關する規定で、新に字句が加へられ、建築物の床下地盤が周圍の地盤面より高くない場合は床下に雨水、汚水等が流入して、例へ敷地地盤が路面より高くとも床下に水が溜ると衛生上有害であるので斯く改正され、當然の改正と思はれる。

第八條は從來濕潤地、出水地に關するもののみの規定であつたが、第七條と同樣新に字句が加へられ、建築物の敷地が塵芥の類で造成せられた場合、即近頃發展してゆく郊外住宅地では往々田圃、窪地等に塵芥を捨てゝ埋立をしたり、地盛りを行つたりするのを見受ける。是等の土地に愈々建築する場合にはこの塵芥の上に僅に表面に土を盛つて立派な敷地に裝ふて居るので、地盤が弱い爲に將來其の上に建てられた建築物に狂を生じて危險な狀態になつたり、塵芥の類に雨水、汚水が作用して往々惡臭又は有害瓦斯を發散して衛生上誠に有害であるので、斯の如き場合には極端なものは地盤の改良をなさしめる等必要な命令を發し、衛生上害なきものとせしめる樣改正されたのである。この改正は從來より取締る必要のあつたものが見落されて居たと考へるが至當であらう。

第十條は下水溝等の構造に關する規定で、今度改正されたのは、書面で審査することの煩雜な事項で然も輕易なものは地方長官の承認とすることを不適當と認められ、建築監督官や府縣の現場を見廻る吏員に其の權能を與へる樣に改められたのである。此の種類の改正が尙三ケ條に渉つて行はれて居る。

第十三條の汲取便所に關する規定の改正は次の樣な三點が考へられる。

1、一般汲取便所に適合する樣字句を修正されたこと

2、汲取口に密閉し得る裝置を爲さしめる樣改められたこと

3、尺單位をメートル單位に改められたこと

從前の規定の樣に汲取便所の糞尿壺を總て漏斗狀に作らしめることは、近來進歩して居る改良便所の發達を阻害せしめ、且は內務省改良便所をはじめ其の他數種の漏斗狀でなくて衛生的な構造を有するものの普及を遲らせることゝなり、又一方郊外住宅では是等改良便所の設備を有するものが追々と其の數を增すので、この時代の要求に應じて適切な改正が行はれたのである。

次に汲取口に關しては從來其の位置のみを規定して居たのであるが汲取口より自由に蠅の侵入し得る間隙を有する蓋を設けて居ることは誠に衛生上好ましくないので、是等のものに對して密閉し得る裝置を爲さしめる樣改められたのである。

第十九條は採光に關する規定で改正されたのは唯天窓の採光面の換算を一率に取扱はず地方長官の認定に依つて決定する樣、一項のみ字句を加へられたのである。從來天窓は總て採光面として三倍に換算することゝなつて居たのであるが、其の種類或は傾斜角度等に依つて一律に換算することの出來ぬ例が多くあつて、例へば普通住家の炊事場に用ひられる天窓、工場に用ひられる傾斜度の大なる窓、又地下室の採光面に利用されるペーブメント等、是等を同じく採光面を三倍として取扱ふことは甚だ適當でないので天窓の位置、種類或は傾斜度、硝子の種類等に應じて適當に斟酌なし得る樣改められたので、從來よりは合理的になつた譯である。

第二十四條は扉と建築線に關する規定で、第四條の改正に伴つて同じ程度に迄扉の建築線突出を緩和されたのである。從來は第四條に規定されて居る建築物の前面突出部が建築線より突出することの許される場合でも路面上十尺以上に在るものの外は出入口及窓の扉は開閉の際でも建築線より突出せしめることが出來なかつたのであるが、これは固定的な前面突出部に比して如何にも不權衡であるので、第四條の規定に依る指定のあつた場合には同條第二號、即ち出入口の階段、凹庭の手摺地覆、腰石、根石等と同程度の突出を認める樣になつたので

ある。

第二十七條は屋根に關する規定で、市街地建築物法の適用範圍も近年著しく擴大され、是等の區域内に於て土地の狀況に依つては不燃材料で屋根を覆葺せしめなくとも支障ないと考られる區域もあるので、そう云ふ狀況に在る區域は特に地方長官が適當に運用して屋根を藁葺板葺としても認め得る様に改められたのである。都市に住んで居る人々には一寸考及ばぬ處であらう。

第二十九條は建築面積の大なる建築物に防火壁を設置せしむる條項であつて、從來より鐵骨造建築物には可なり嚴なる規定と考へられて居たのが、今度耐火構造でなくとも建築物の主要構造部、即外壁のみならず壁體、床、屋根、小屋、柱等と主要被覆部、即天井、床等とが不燃材料で出來てゐる様な場合、例へば鐵骨造帶鉛引鐵板葺の工場、上家の類の如きは燃えないものばかりで出來て居るので、防火上相當の効力あるものと考へられる。是等の建築物は强ひて防火壁を設けなくとも差支へなき様緩和されたのである。

第四十二條は高い建築物に對して避雷設備を要求した規定で、從來高六十五尺を超過した建築物には例外なく避雷設備を爲さしめる趣旨であつたのが、土地の狀況や建築物の種類に依つては强ひて避雷設備を爲す必要のないものには例外を認められる様、例へば同一敷地内の他の建築物の避雷設備の保護區域内にある場合、或は放送局の鐵塔の附近に在つて、その避雷設備の保護區域内に在る場合、又は鐵骨塔の如きもので建築物自體が完全な避雷設備の用をなすと考へられるものには避雷設備なくても認められる様、除外規定を但書として加へられたのである。

第四十三條は高い建物の耐火に關する規定である。從來「高六十五尺軒高五十尺ヲ超過スル建物」と規定されてゐたので、單に一方のみ其の高を超過する建物は耐火構造としなくとも差支ない様に間違つて解釋される場合があるので、明確にする爲「又ハ」を加へられ、第二十九條の場合と同じ程度の緩和條項が加へられたのである。此の改正に依つて地方長官が支障なしと認める場合には鐵筋「コンクリート」造の屋上に鐵骨の上家を造つたり、耐火構造の建築物に輕い半枚積の間壁を造ることも出來得るのである。

四、防火地區に關する分

第百十八條より第百三十五條ノ二迄であつて二箇條の改正がある。

別表第四

改正條文	從前條文
第百三十一條　削除	第百三十一條　防火地區内ニ在ル建物ノ界壁ハ防火壁ト爲スヘシ
第百三十四條　前二條ノ防火壁ニ付テハ第三十條ノ規定ヲ準用ス	第百三十四條　前三條ノ防火壁ニ付テハ第三十條ノ規定ヲ準用ス

第百三十一條の削除は、第一條第九號削除の所で說明した様に制限が極めて嚴に失するものと認められた結果で、第百三十四條の改正は之に伴つて改正されたのである。

五、工事執行に關する分

第百四十三條より第百四十九條迄で次の如く改正され、今度の改正の主要な部分である。

別表第五

改正條文

第百四十三條　左ノ各號ノ一ニ該當スル建築物ノ新築、增築、改築又ハ移轉ヲ爲サムトスルトキハ地方長官ノ認可ヲ受クベシ建築物ノ用途ヲ變更シテ第一號又ハ第五號ニ充テムトスルトキ亦同ジ

一　市街地建築物法第十四條ノ建築物

二　防火地區及美觀地區內ノ建築物

三　鐵筋「コンクリート」造、鐵骨造、鐵造、石造、煉瓦造、木骨造其ノ他木造ニ非ザル建築物

四　階數三以上ノ建築物

五　前各號ニ揭グルモノヽ外地方長官ノ指定スル建築物

高四メートルヲ超ユル擁壁ノ築造ヲ爲サムトスルトキハ地方長官ノ認可ヲ受クベシ

第百四十四條　左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ハ地方長官ニ屆出ヅベシ

一　前條ニ該當セザル建築物ノ新築

二　前條ニ該當セザル建築物ノ增築、改築又ハ移轉

三　前條第一項第一號乃至第四號ノ建築物ニシテ其ノ床面積百平方メートルヲ超ユルモノヽ大修繕又ハ大變更

四　高二メートルヲ超ユル擁壁ノ築造

第百四十四條ノ二　地方長官ハ輕微ナル事項ニ付前二條ノ規定ニ拘ラズ命令ヲ以テ別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

第百四十八條　地方長官ハ當該官吏又ハ吏員ヲ派シ建築物及建築工事ヲ臨檢セシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ臨檢者ハ其ノ證票ヲ携帶スヘシ

第一項ノ場合ニ於テ建築主、建築工事請負人、建築工事管理者又ハ建築物ノ所有者若ハ占有者檢査ニ必要ナル準備ヲ命セラレタルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

前項準備ノ費用ハ建築主又ハ建築物所有者ノ負擔トス

從前條文

第百四十三條　左ノ各號ノ一ニ該當スル建築物ノ新築、增築、改築、移轉、大修繕又ハ大變更ヲ爲サムトスルトキハ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

一　市街地建築物法第十四條ノ建築物

二　防火地區及美觀地區內ノ建築物

三　其ノ他地方長官ノ指定スル建築物

建築物ノ用途ヲ變更シテ前項第一號又ハ第三號ニ充テントスルモノ亦同シ

第百四十四條　前條ニ該當セサル建築物ノ新築、增築、改築、移轉、大修繕又ハ大變更ヲ爲サムトスルトキハ地方長官ニ屆出ツヘシ

地方長官ハ命令ノ規定ニ依リ輕微ナルモノニ付前項ノ屆出ヲ爲サシメサルコトヲ得

第百四十八條　地方長官ハ吏員ヲ派シ建築物及建築工事ヲ臨檢セシムルコトヲ得

（第二項以下省略）

出願手續に付て改正された主要な事項は

1、認可を受くべき建築物の種類を內務省令で統一されたこと

2、大修繕、大變更工事は認可を要しないことに緩和されたこと

3、大修繕、大變更工事の屆出を要する建築物の種類を新に設けられたこと

4、床面積に依つて大修繕、大變更工事の屆出の要否が區別されたこと

5、擁壁の築造に手續規定を設けられたこと

6、輕微な事項は認可を要するもの迄も省略し得る途を開れたこと

手續の複雜なことは、市街地建築物法を施行するにあたつて、從來相當批難のある點でもあつたので、努めて事前の監督を緩にして手續の簡易化を圖ると云ふ意味から、大なる緩和が行はれたのである。認可を要する建築物に付ては出來得る限り多く施行規則で統一して、從來施行細則（府縣令）中に指定されて居た、不統一な建築物の種類中より、第三號の木造に非ざる建築物と、第四號の階數三以上の建築物とが掲げられ、僅に地方の狀況に依つて認可を必要とする建築物を、第五號に依り施行細則中に追加指定せしめる內務省の方針で改正されたのである。

從來認可を要する種類の建築物の大修繕或は大變更工事は認可を受ける必要があつたのであるが、今度緩和され認可の必要なく、而も屆出を要する大修繕、大變更工事は、第百四十三條の第一號乃至第四號の建築物に限られることゝなつて、施行細則中に追加指定された種類の建築物は、大修繕、大變更工事の屆出を要しないこととなつたのである。尙其の上に床面積百平方メートル（三十坪二合五勺）以上の建築物に限り大修繕、大變更の手續を取るといふ樣に大いに緩和されたのである。

別表第六

從前の第百四十四條は認可を要する建築物以外のものの新築、增築改築、移轉、大修繕、大變更工事は總て屆出を要する樣、例外なく手續を要求し、僅に輕微なものだけ地方長官の命令に依り、屆出を爲さしめずに工事の出來る主義のものであつたが、手續を出來得る限り簡易化する爲に輕微なものには手續を爲さしめず、屆出を要するもののみ列記されたのである。

次に今迄全然市街地建築物法の制限のなかつた、建築敷地を造る爲の擁壁が、今度の施行令の改正に依る同令第二十六條ノ二の追加で市街地建築物法の一部準用されることとなつたのである。其の結果自然事前の監督を必要とするので、高四メートル以上のものを築造しやうとする時には認可を、又高二メートル以上四メートル迄のものを築造しやうとする時には屆出を要する樣になつたのである。擁壁が無雜作に築かれる時には地震の時、降雨の時等に、倒壞して隨分危險なもので、特に道路に面する場合等は保安上危險の度を增すので、事前に充分監督する必要ありとされ、追加されたのである。

最後の事項は、從來屆出に付てのみ例外を設け得る立前から、第百四十四條中に一項として規定されて居たのであるが、認可に付ても輕微なものは、屆出程度に止め、若は全然手續を要しないことに爲し得る樣、新に第百四十四條ノ二を追加して、地方長官が適宜取扱ひ得られる樣緩和されたのである。

第百四十八條は建築工事場の臨檢に關する規定で吏員のみでは官吏を含むや否やに疑を生ずる處があるので、之を明瞭にされたのである。

六、施行規則適用除外に關する分

第四十三條ノ二と第百四十九條ノ二との二箇條で、後者が次の如く改正された。

改正條文

第百四十九條ノ二　第七條乃至第二十三條、第二十五條　第二十六條第二十七條第二項・第二十八條乃至第百十五條、第百三十六條乃至第百四十二條及第百四十四條第二號乃至第四號ノ規定ハ內務大臣ノ指定スル區域ニ之ヲ適用セス

地方長官特別ノ事由アリト認メ內務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ前項ノ指定區域ニ付命令ヲ以テ建築物ノ種類又ハ地區ヲ指定シ前項ニ揭ク條項ノ規定ノ全部又ハ一部ヲ適用スルコトヲ妨ゲズ

第百四十九條ノ二と云のは市街地建築物法適用區域內で內務大臣の指定せる區域に於ける建築法規の一部適用除外に關する規定である。

從來市街地建築物法の適用ある區域では、其の全部を適用されるか然らざれば施行令第三十一條の規定に依つて內務大臣の指定したものには施行令の一部を適用しない所謂緩和規定が適用されるかの二途よりなかつたのである。現在の樣に廣く各都市に市街地建築物法が適用されてゐる狀態では餘りに大別的に過ぎ、各都市の實狀に副ふことが出來難いので、都市の實狀に應じて適宜規定の內容を適當に撰擇し得る樣改正されたのである。

尙詳しく說明すれば、所謂緩和規定と云ふのは、市街地建築物法令中の地域制限の規定、建築線に關する規定、防火地區に關する規定及屋上制限の規定のみが適用されるもので、從來は施行令第三十一條の規定に依つて內務大臣の指定せる地方市街地では、この規定が適用されてゐた。六大都市の如く市街地建築物法令の全部が適用されてゐるものに比しては極めて輕い制限であつたのであるから、今度の改正で其の中間の制限を受ける都市をも設け得る樣第二項を追加されたのであつて、規定の適用に付ては大體次の如き四種類に分ちて考へられてゐる。

一、主として地域、建築線、屋根及防火地區に關する事項を適用すべき區域(從來の緩和規定適用區域)

二、前號の外建築物の高及空地に關する規定を含む事項を適用すべき區域

三、前號の外建築物の構造設備、美觀地區及特殊建築物に關する規定の一部を含む事項を適用すべき區域

四、全部の事項を適用すべき區域

從前條文

第百四十九條ノ二　第六條乃至第二十六條、第二十七條第二項　第二十八條乃至第百十七條、第百三十六條乃至第百四十二條及第百四十四條ノ規定ハ市街地建築物法施行令第三十一條ノ規定ニ依リ內務大臣ノ指定スル區域ニ之ヲ適用セス

別表第七

附則

本令ハ昭和七年二月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前市街地建築物法施行令第三十一條ノ規定ニ依ル指定アリタル區域ハ第百四十九條ノ二ノ規定ニ依ル內務大臣ノ指定アリタルモノト看做ス

第百四十九條ノ二の改正に伴つて、同條の規定に依る內務大臣の指定區域を必要とするので、既に施行令第三十一條の規定に依つて指定された區域は第百四十九條ノ二の規定に依る指定區域と看做され、從來の緩和規定適用都市では、地方長官が內務大臣の認可を受くれば高及空地に關する規定、或は其の他の規定を適用し得るのである。

——二五九二、四——

市街地建築物法施行規則の內構造強度に關する改正條文に就いて

建築技師　落藤　藤吉

序

市街地建築物法施行規則の今度の改正せられた各條につき其の內容を見るに、過去十數年間の施行の經驗に鑑み規定の不備な點を訂正補足したに過ぎないものもあり、亦一面學理の進歩に伴ひ、施工の實際に照し建築工事に於て改良を要す可き諸點に關し規定を修正或は追加されたものも多々あるのであります。殊に構造强度に關する諸條項に於ては後者に屬する改正多く建築技術と施工の實際と學理と相矛盾し或は學理の進歩に順應しない憾のある點は當然修正補足せらる可きでありませう。而して木構造及木骨構造、石構造及煉瓦造、又は獨立煙突に關する規定の如く技術上の永い間の經驗に由り一定の基準を規定せられたものは單に施行の運用をより以上圓滑ならしめんが爲、或は只事務簡捷を計る爲の事務的字句の修正補足に過ぎない改正で、しかも僅かに二箇條文に加えられたのみであります。

之に反し鐵骨構造、鐵筋「コンクリート」構造又は强度計算に關する諸規定に於ては可成り內容の豐富な改正を多くなされ、特に全て理論的に取扱はれ學理に相平行して規定せられた鐵筋「コンクリート」構造は近來「コンクリート」の研究大いに進み「コンクリート」材料學の長足の進歩發達を遂げたので從來の規定では學理より推して滿足し得る「コンクリート」は得難いことが明かとなり、こゝに於て遂に此の度の如く本質的な改正となつたのであります。

順次これから記載する改正條文、並に從前の條文に於て改正を加えられ、追加、削除又は修正された部分に對しては縱線（｜）を以て示すことにする。

一、一般規定に關する分

構造强度に關する一般的規定の內構造用材料の品質規定の第四十四條が次の如く改正せられた。

別表第一

改正條文

第四十四條　構造用「コンクリート」及「モルタル」ノ原料ト爲スヘキ「セメント」ハ商工省告示日本標準規格第二十八號又ハ第二十九號ノ規定ニ依リ合格シタルモノナルコトヲ要ス構造用鋼材ハ商工省告示日本標準規格第二十號ノ規定ニ依ル品質以上ノモノナルコトヲ要ス

従前條文

第四十四條　「コンクリート」及「モルタル」ノ原料ト爲スヘキ「セメント」ハ農商務省告示「ポルトラン、セメント」試驗方法又ハ商工省告示高爐セメント試驗方法ノ規定ニ依リ合格シタルモノナル事ヲ要ス

第八十二條　建物ノ構造ニ使用スル鋼材ノ品質ハ應張強度一平方糎ニ付二千六百瓩以上、伸度試驗片小徑ノ八倍以上ニ付百分ノ二十以上ノモノナルコトヲ要ス

第八十八條　第二項

鐵筋「コンクリート」構造ニ使用スル鐵筋ノ品質ハ第八十二條ノ規定ニ依ルヘシ

本條改正の要旨は

1、商工省告示日本標準規格に準據したこと。

2、構造用材料と明確に限定せられたこと。

3、構造用壓延鋼材の品質に關する規定を本條に取纏められたこと

規格（日本標準規格を略稱す）第二十八號は「ポルトランドセメント」規格、第二十九號は「高爐セメント」規格を定め、第二十號には構造用壓延鋼材の品質に關する規格を示してゐる「セメント」の品質については單に規格番號に移されたのみで實質上從前と大した變化はないが鐵筋「コンクリート」に使用する「セメント」は其の强度（耐壓强度）が直接に「コンクリート」の强度を支配するものであるから、成る可くは耐壓强度の大きな「セメント」を使用することが肝要事であり且經濟的にも大いに得策である。從來「セメント」の强度試驗は抗張試驗のみを意味するかの如く一般に行はれてゐたが、寧ろ耐壓試驗が重要で「コンクリート」强度に對し「セメント」耐壓强度試驗は主要な役目を勤めるものである。（第百二條ノ二參照）今爲念「ポルトランドセメント」規格の內主要なる試驗規定を示せば次の如し。

試驗種目		規格ノ限度	備考
比重		三、〇五以上	
粉末ノ程度		殘滓量一二%以下	篩ハ平方糎ニ付四九〇〇孔
凝結		始發一時間後終結一〇時間以內	溫度ハ攝氏一五度乃至二五度
膨脹性龜裂	浸水法	龜裂無シ（完全）	室溫及水溫攝氏一五度以上、水量二五%—二七%成形後二四時間後二七日間浸水
	煮沸法	龜裂無シ（完全）	室溫攝氏一五度以上、水量二五%—二七%成形後二四時間後沸煮一時三十分間
耐壓强度（供試體調合比）「セメント」一砂三	經過期日 七日	二二〇瓩（一平方糎ニ付）以上	强度試驗ハ耐壓强度試驗ニ依ル
	同 二八日	三〇〇瓩（一平方糎ニ付）以上（但シ七日ノカヨリ大ナルヲ要ス）	試驗片ハ立方體（斷面積各面二五平方糎）

試験種目	規格ノ限度	備考
抗張強度（供試體調合比ハ右ニ同ジ）	同　七日　二〇瓩（一平方糎ニ付）以上	試驗片（斷面積五平方糎）二五瓩（一平方糎ニ付）以上（但シ七日ノ力ヨリ大ナルヲ要ス）
同　二八日	苦土含有量　三％以下	
苦土硫酸	硫酸（SO_3）含有量　二％以下	
灼熱減量	四％以下	
重量	一袋　五〇瓩　一樽　一七〇瓩	

以上の試驗は試驗片を製作してから二十八日間を要する故工事に使用する少くとも一ケ月以上前に供試體を取つて試驗を請求しないと工事に齟齬を來す處がある。一般の「セメント」製造會社は其の製品に付月々試驗を行つて其の結果を發表してゐるから其れに據つて或程度の品質判斷を下すことは出來得るが、併し「セメント」は普通製造後三ケ月目位から風化の爲著しく變質が目立つものであるから、試驗後三ケ月以上を經た時又は貯藏方法が惡くて塊が出來たときは再試驗を行つた上で使用しなくてはならない。

斯くの如き場合は普通工事現場に於て行はれる爲試驗に長時日を費すことが困難で、右の試驗をなす期間を有しない場合は少くとも左記項目に就いて合、不合格を調べる要がある。

試驗種目	規格ノ限度	備考
膨脹性龜裂（煮沸法）	龜裂無シ（完全）	室温攝氏一五度以上、水量二五％―二七％成形後二四時間後一時三十分間煮沸
赤熱減量	四％以下	風化試驗
耐壓強度（供試體調合比「セメント」一標準砂三）	經過日數　三日　一五〇瓩（一平方糎ニ付）以上	
同　七日	二二〇瓩（一平糎ニ付）以上（但シ三日ノ力ヨリ大ナルヲ要ス）	

次に日本標準規格第二十號は構造用壓延鋼材の規格が示され、此の第二十號に依る品質に合格するもの、又は其れ以上のものを使用する様本條に於て定めてある。規格第二十號では重要な抗張試驗規定に於て鋼材の抗張力は最小、最大の兩限度を以て制限せられ其の範圍内の抗張力を有する鋼材を合格品と定めあるも本條に於ては品質以上であれば宜いのであるから最小を準據して最大を超過するも支障ない譯となる、爲念抗張試驗規定を本條を以て表示すれば次の如くなる。

種類	抗張力 kg/mm²	標準抗張試驗片	伸 %
鋼板	三九以上	第一號	厚九粍以上　二一以上
形鋼			厚九粍未滿　一七以上
平鋼			
棒鋼	三九以上	第二號	二一以上
		第三號	二五以上
鐵筋「コンクリート」用棒鋼	三九以上	第二號	二一以上
		第三號	二五以上
鋲材	三四以上	第二號	二七以上
		第三號	三四以上

二、鐵骨構造に關する分

鐵骨構造に關しては第八十二條の鋼材品質規定が前記の如く改正第四十四條に包含せられたる爲削除となり猶接合に關する規定の第八十三條に次の如く改正を加えられた。

別表第二

改正條文

第八十三條　建物ノ構造ニ使用スル鋼又ハ錬鐵ノ主要ナル構材ノ接合ニハ地方長官ニ已ムヲ得ズト認ムル場合又ハ支障ナシト認ムル場合ノ外「リベット」ヲ使用スヘシ

接合用「リベット」又ハ「ボールト」ノ中心距離ハ其ノ直徑ノ二倍半未滿ト其ノ中心ト材端トノ距離ハ其ノ直徑ノ一倍半未滿ト爲ス可ラス

新たに改正、追加せられた要旨は

1、熔接技術の進歩に伴ひ或程度まで認容せしめ得る様改められたこと。

2、組立家屋の如く物と場合とに依り特別の接合方法を認め實際に即し運用せしめる様になつたこと。

從來は鐵骨構造の接合は殆んど鋲接合に限定せられ、技術上鋲接合の不可能なる場合或は其の他仕事上眞に已むを得ずと認め得る場合にのみ除外せられてゐたに過ぎなかつたが、改正條文の如く支障のない場合には「ボールト」接合、或は電氣、瓦斯による鎔接合をも或る範圍内に於ては認められ得ることゝなつた。勿論、電氣熔接技術の進歩發達が本條の如き改正の一大誘因をなしたものと想像出來るが、條文に於て明瞭な如く、接合の主體は「リベット」接合であり、電氣熔接はパイプハウス構造の捻ぢ繰ぎ或は組立家屋の場合のボールト接合と同様に單に緩和規定であり、支障なき場合に限り認められるものと解す可きであろう。

從前條文

第八十三條　建物ノ構造ニ使用スル鋼又ハ錬鐵ノ主要ナル構材ノ接合ニハ已ムヲ得サル場合ノ外「リベット」ヲ使用スヘシ

接合用「リベット」又ハ「ボールト」ノ中心距離ハ其ノ直徑ノ二倍半未滿ト、其ノ中心ト材端トノ距離ハ其ノ直徑ノ一倍半未滿ト爲スヘカラス

別表第三

改正條文

第八十八條　鐵筋「コンクリート」構造ニ使用スル「コンクリート」ハ左ノ規定ニ依ルヘシ但シ其ノ用途ニ依リ已ムヲ得ス且構造上支障ナキ

三、鐵筋「コンクリート」構造に關する分

鐵筋「コンクリート」構造に關しては「コンクリート」の品質規定（併せて調合制限）であつた第八十八條に根本的な改正を加えられ、其の他に繫筋規定の第九十條を條文整理上削除して第百十二條ノ三に移し柱構造に關する第九十一條第四號に緩和規定を新たに追加せられた。說明の都合上「コンクリート」調合に關しては參照條文を括弧書として列記する。

從前條文

第八十八條　鐵筋「コンクリート」構造ニ使用スル「コンクリート」ハ左ノ規定ニ依ルヘシ但シ其ノ用途ニ依リ已ムヲ得ス且構造上支障ナキ

モノニ在リテハ地方長官ノ許可ヲ受ケ第三號ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

一、砂、砂利又ハ碎石ハ泥土、鹽分有機物等ヲ含マサルモノナル事

二、砂利又ハ碎石ハ硬質ニシテ二センチメートル二分ノ一目篩ヲ通過シ且鐵筋相互間及鐵筋ト假構トノ間ヲ自由ニ通過スルモノナルコト

三、煉瓦屑、石炭燼ノ類ハ之ヲ使用セサルコト

四、軟度ハ均質ナル「コンクリート」ヲ得ルニ適當ナルモノナルコト

（第百二條ノ二、第三項第四項第五項參照）

第百十二條ノ三

（繋筋規定、第百十二條ノ三ニ於テ說明）

第九十一條　鐵筋「コンクリート」柱ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一、主筋ハ四本以上タルコト

二、繋筋ノ中心距離ハ一尺以下トシ且主筋直徑ノ十五倍ヲ超過セサルコト

三、柱ノ小徑ハ其ノ主要支點間距離ノ十五分ノ一以上ナルコト

四、主筋ノ斷面積ノ和ハ「コンクリート」ノ有効斷面積ニ對シ八十分ノ一以上ナルコト但シ地方長官構造強度上支障ナシト認ムル場合ハ此ノ限ニアラズ

第八十八條の改正要旨は

1、調合に關する一律的規定を廢止したこと

2、調合の經濟的設計の自由を認めたこと

3、「コンクリート」製作に必須の目標を示して調合選定範圍を制限したこと。

4、鐵筋の品質に關する項を第四十四條に整理し削除したこと。

5、其の他單に文句の修正をなされたこと。

從前は第八十八條第四號に於て調合割合を「セメント」一に對し骨材總量六を超えてはならぬ樣容積比を以て配合を制限し、應力度に關する第百二條で「セメント」一、砂二、砂利四の現場調合比を定め殆んど劃一的調合規定として施行せられてゐたが、劃一的調合は不合理も甚しきことが實證せられたので之が廢止となつた。本來「コンクリート」

モノニ在リテハ地方長官ノ許可ヲ受ケ第三號及第四號ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

一、砂ハ泥土、鹽分等ヲ含マサルモノナルコト

二、砂利又ハ碎石ハ硬質ニシテ二糎二分ノ一目篩ヲ通過シ且鐵筋相互間及鐵筋ト假構トノ間ヲ自由ニ通過スルモノナルコト

三、煉瓦屑、石炭燼ノ類ハ之ヲ使用セサルコト

四、「コンクリート」ノ調合割合ハ「セメント」ノ容積一ニ對シ砂ト砂利又ハ碎石トノ容積ノ和六ヲ超過セサルコト但シ「セメント」一ハ千五百五十瓩ヲ以テ一立方米トス

鐵筋「コンクリート」構造ニ使用スル鐵筋ノ品質ハ第八十二條ノ規定ニ依ルヘシ

第九十條　削除

第九十一條　鐵筋「コンクリート」柱ノ構造ハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一、主筋ハ四本以上タルコト

二、繋筋ノ中心距離ハ一尺以下トシ且主筋直徑ノ十五倍ヲ超過セサルコト

三、柱ノ小徑ハ其ノ主要支點間距離ノ十五分ノ一以上ナルコト

四、主筋ノ斷面積ノ和ハ「コンクリート」ノ有効斷面積ニ對シ八十分ノ一以上ナルコト

の品質と應力度との間には不可分な關係を有す可きが當然であり、且構材としての「コンクリート」は其の最大應壓强度（破壞强度）の大小、並に出來上り「コンクリート」の良否に重要な役目をもつ施工の難易とによつて制限さる可きである。而して最大應壓强度を支配するファクターは單に調合のみでなく「セメント」の强度、水量、調合比、骨材粒大並割合、氣溫、軟度等を擧げる事が出來、其の組合せによつては同一强度の「コンクリート」は如何なる調合割合でも得ることが出來ると云つても宜いのである。其の樣に種々の調合割合の內、經濟的なものを選定する自由を與へ劃一的調合を廢止した。出來上り「コンクリート」は完全な出來榮え、換言すれば一點の「豆板」も生じないことが「コンクリート」本來の使命を果す爲には必須の條件であろう。この意味に於て從來の一、二、四調合比は不適當で非常に仕事の困難な硬練にするか、或は水のみ增して、粘りのない均質でないものにまで流動性を增すかであつて前記の意味に於て不適當至極なものであつたが、今後は其の必須要件を揭げ均質な「コンクリート」を得るに適當な軟度でなくてはならぬ樣調合を限定せられた。從つて實際上建築工事に不適當な著しく硬練りのもの或は軟練りのものは不可で、粘りがあり、仕事に樂な軟さを有する調合を選ばなくてはならぬことになつた。具體的に云へば其の軟さが所謂スランプ試驗標準方法（「コンクリート」を一定の型中に入れ直に此の型を垂直に靜に引上げた際「コンクリート」が崩れ落ちた高低差を以て測定す）に依り「スランプ」十五糎乃至二十五糎位の範圍を要求してゐると解す可きである。尙最も適當した「スランプ」は次の數値位と思はれる。

基礎又は大きな容積の「コンクリート」	「スランプ」十九糎以下二十二糎以下十九糎迄
一般構造部	二十三糎以下二十糎迄
鐵骨鐵筋「コンクリート」	

以上の如く調合と軟度との間には密接な關係があり且「コンクリート」品質は許容應力度にも相關聯してゐるから本條の軟度規定と第百二條ノ二及第百二條ノ三と共に調合其の他品質を支配する諸點を制限し、將來取締つて行かうと云ふことに改められたものである。尙詳細は第百二條ノ二に於て說明する。

四、獨立煙突に關する分

從來本條には緩和規定なく、如何なる場合にも五十尺を超過する煙

別表第四

改正條文

第九十五條　高五十尺を超過する煙突は鐵造又ハ鐵筋「コンクリート」造トシ支線ヲ要セサル構造ト爲スヘシ　但シ假設的ノ煙突ニシテ地方長官支障ナシト認メ存續期限ヲ附シ許可シタルモノハ此ノ限ニアラズ

鐵造又ハ鐵筋「コンクリート」造ニ非サル煙突ニシテ高三十尺ヲ超過スルモノニ在リテハ鐵材ヲ以テ適當ナル補强ヲ爲スヘシ

從前條文

突は支線を要しない自立煙突としなくてはならないことになつてゐたが、實際工場等で震火災等の爲煙突が大被害を受けた場合などに、何を措いても作業を繼續して行かなくてはならぬ樣な逼迫した事情がある時は假設的の意味を以て支線を用ひた構造のものも許可し得る樣緩和したのである。

別表第五

改正條文

第百二條　強度計算ニ於テ建築物ノ各部分ニ生スヘキ應力度ハ各種材料ニ付左ノ限度ヲ超過スヘカラス

材料	應壓力度（一平方糎ニ付瓩）	應張力度（一平方糎ニ付瓩）	應剪力度（一平方糎ニ付瓩）	應曲力度（一平方糎ニ付瓩）
欅、栗	九〇・〇	九〇・〇	九・〇	九〇・〇
松	七五・〇	七五・〇	七・五	七五・〇
檜、「オレゴンパイン」	六五・〇	六五・〇	六・五	六五・〇
杉、北海道松ノ類	五〇・〇	五〇・〇	五・〇	五〇・〇
花崗岩	一一〇・〇			一五・〇
硬質安山岩	八〇・〇			九・〇
煉瓦積	二二・〇			
「コンクリート」（「セメント」一、砂三、砂利又ハ碎石六）	三〇・〇	三・〇	三・〇	三・〇

從前條文

第百二條　強度計算ニ於テ建築物ノ各部分ニ生スヘキ應力度ハ各種材料ニ付左ノ限度ヲ超過スヘカラス

材料	應壓力度（一平方糎ニ付瓩）	應張力度（一平方糎ニ付瓩）	應剪力度（一平方糎ニ付瓩）	應曲力度（一平方糎ニ付瓩）
欅、栗	九〇・〇	九〇・〇	九・〇	九〇・〇
松	七五・〇	七五・〇	七・五	七五・〇
檜、「オレゴンパイン」	六・〇	六五・〇	六・五	六五・〇
杉、北海道松ノ類	五〇・〇	五〇・〇	五・〇	五〇・〇
花崗岩	一一〇・〇			一五・〇
硬質安山岩	八〇・〇			九・〇
煉瓦積	二二・〇			
「コンクリート」（「セメント」一、砂二、砂利又ハ碎石四）	四五・〇	四・五	四・五鐵筋「コンクリート」構造ニ於テ主筋ヲ橫斷スル面ニ對シ、九・〇	四・五

五、强度計算に關する分

强度計算に關しては「コンクリート」の應力度及調合に關する第百二條ノ二、第百二條ノ三、及主筋を橫斷する面の應剪力度、並に繫筋規定たる第百十二條ノ二、第百十三條ノ三の新條文を改正の主體とする

		リベット側ニ對シテハ			
		一二〇〇・〇			
軟鋼	鋼	一二〇〇・〇	八〇〇・〇	一二〇〇・〇	
錬鉄	鉄	八五〇・〇	八五〇・〇	五五〇・〇	八五〇・〇
鋳鉄	鉄	八五〇・〇	二〇〇・〇	二〇〇・〇	二〇〇・〇

前表ニ於ケル「コンクリート」ノ調合割合ハ容積ヲ以テシ「セメント」ハ千五百キログラムヲ以テ一立方米トス

品質特ニ劣等ナリト認ムルモノニ對シテハ地方長官ハ第一項ノ限度ヲ低下セシムルコトヲ得

第百二條ノ二　強度計算ニ於テ鐵筋「コンクリート」構造ノ各部分ニ生ズベキ「コンクリート」ノ應力度ハ左ノ限度ヲ超過スベカラズ

應壓力度（一平方糎ニ付瓩）	應張力度（一平方糎ニ付瓩）	應剪力度（一平方糎ニ付瓩）
應壓强度ノ三分ノ一且七〇・〇	應壓强度ノ三十分ノ一且七・〇	應壓强度ノ三十分ノ一且七・〇

鐵筋「コンクリート」ニ使用スル「コンクリート」ハ一平方センチメートルニ付九十キログラム以上ノ應壓强度ヲ有スルモノタルベシ

第一項ノ應壓强度ハ左式ニ依リ算定セルモノヲ超過スベカラス但シ適當ナル試驗方法ニ依リ「コンクリート」ノ强度ヲ試驗シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ。

$$F=\frac{2k}{20x}$$

F　「コンクリート」ノ應壓强度

k　商工省告示日本標準規格第二十八號又ハ第二十九號ノ試驗方法ニ依リ試驗セル砂入「セメント」ノ四週間後ノ應壓强度

x　水ト「セメント」ノ重量比

寒冷ノ季節ニ施工スル「コンクリート」ニ付テハ地方長官ノ定ムル所ニ從ヒ前項ノ應壓强度ヲ減ズルモノトス

「コンクリート」ノ調合割合（「セメント」一、砂三、砂利又ハ砕石六）				
				三〇・〇
軟鋼	鋼	一一五〇・〇	一一五〇・〇	七五〇・〇
錬鉄	鉄	七五〇・〇	八五〇・〇	五五〇・〇
鋳鉄	鉄	八七〇・〇	二〇〇・〇	二〇〇・〇

前表ニ於ケル「コンクリート」ノ調合割合ハ容積ヲ以テシ「セメント」ハ千五百五十瓩ヲ以テ一立方米トス

品質特ニ劣等ナリト認ムルモノニ對シテハ地方長官ハ第一項ノ限度ヲ低下セシムルコトヲ得

第百二條（參照）

第八十八條　第四項參照

地方長官ハ第三項ノ適用ニ關シ「コンクリート」ノ調合ニ付必要ナル規定ヲ設ケ又ハ措置ヲ命ズルコトヲ得

第百二條ノ三　地方長官必要ト認ムルトキハ建築材料ノ提出又ハ強度試驗ノ施行ヲ命ズルコトヲ得

第百五條　強度計算ニ適用スル各種床動荷重ノ最小限左ノ如シ

床ノ種類	動荷重（一平方米ニ付瓩）
住家	二五〇
事務室、病院ノ類	三七〇
學校	四二〇
集會所、劇場、寄席ノ類	五〇〇
商品陳列室、陳列館ノ類	五五〇

倉庫、書庫、作業場等ニ付テハ其ノ實況ニ應スル適當ナル動荷重ニ依ルヘシ

本條ノ動荷重ハ出ノ實況ニ應シ小梁ニ對シテハ其ノ十分ノ一以内ヲ大梁ニ對シテハ其ノ十分ノ二以内ヲ、柱ニ對シテハ其ノ十分ノ三以内ヲ、震力計算ニ關シテハ其ノ十分ノ五以内ヲ減スルコトヲ得但シ倉庫、書庫、集會室、劇場棧敷、陳列室等ニ對シテハ本項動荷重ノ輕減ヲ爲スコトヲ得ス

別表第六

改正條文

第百十二條ノ二　鐵筋「コンクリート」ノ梁、版等ノ主筋ヲ横斷スル面ニ於テ左式ニ依リ算定スル應剪力度ハ「コンクリート」ノ應壓强度ノ十二分ノ一以下ニシテ且一平方センチメートルニ付十八キログラムヲ超過セザルモノナルコトヲ要ス

從前條文

第百二條（參照）

$$f=\frac{S}{bj}$$

f 「コンクリート」ノ應剪力度

S 剪力

b 梁又ハ版ノ幅但シ梁ニ在リテハ梁腹ノ幅

d 應壓中心ヨリ應張中心迄ノ距離

j 鐵筋「コンクリート」ノ梁、版等ニ生ズル應剪力度第百十二條ノ三

第百二條ノ二ノ規定ノ應剪力度ヲ超過スルトキハ其ノ部分ニ左ノ規定ニ依リ梁筋ヲ配置スベシ

一、繋筋ハ應剪力ノ分布ニ從ヒ適當ニ之ヲ配置シ其ノ間隔ハ梁、版等ノ厚ノ三分ノ二ヲ超過セザルコト

二、繋筋ハ應張鐵筋外側ヨリ應壓端ニ近ク達セシメ且適當ニ之ヲ碇着スルコト

主筋ヲ適當ニ曲ゲタルモノハ其ノ部分ヲ繋筋ト看做ス

第九十條　鐵筋「コンクリート」ノ梁、版等ニ生ズル應剪力度「コンクリート」ノ許容應剪力度ヲ超過スルトキハ其ノ部分ニ左記ノ規定ニ依リ繋筋ヲ配置スヘシ

一、繋筋ハ應剪力ノ分布ニ從ヒ適當ニ之ヲ配置シ其ノ間隔ハ梁版等ノ厚ノ三分ノ二ヲ超過セサルコト

二、繋筋ハ應張鐵筋下端ヨリ應壓力中心迄達スルコト

主筋ヲ適當ニ曲ケタルモノハ其ノ部分ヲ繋筋ト看做ス

A、應力度規定の改正要旨

1、軟鋼の應力度を緩和し應剪度八〇〇斤其の他の應力度は一二〇〇斤（一平方糎に付迄幾分增大したこと。

2、「リベット」の側壓に對する應壓力度を規定したこと。

3、「セメント」の重量計量と容積計算との關係を其の實際に即し一立方米の重量を千五百瓩に修正せられたこと。

4、鐵筋「コンクリート」構造の「コンクリート」の應力度の劃一的規定を廢し應壓強度と安全率とに依り決定する樣になつたこと。

5、「コンクリート」の應力度は必要に應じ任意な數値を採用し得る自由を與えたこと。

6、主筋を横斷する面に於ける許容應剪力度は從來第百二條表中に規定せしも新たに第百十三條ノ三に明確に表示せられたこと。

第二點の「リベット」の「ベヤーリング」値を求むるに必要な側壓に對する應壓力度は各都市各々認定により取締つてゐたが今度判然と一平方糎に付一五〇〇瓩と規定せられた。

第四點第五點は新たに設けられた第百二條ノ二の改正要旨で「コンクリート」品質（調合を含む）に關する規定と相關聯せる條文である。第六點と共に「コンクリート」の諸應力度は次表の如く應壓強度より求め且或る限度を附せられてゐる。

單位一平方糎ニ付瓩	應壓力度	應張力度	應剪力度	主筋ヲ横斷スル面ニ對スル應剪力度
應壓强度トノ比例分數	1/3	1/30	1/30	1/12
限度	三〇―七〇	三―七	三―七	七・五―一八

B、「コンクリート」品質規定に就いて

構造強度に關する新舊條文を學術上の見地から比較對照するに、「コンクリート」の應力度並に品質に關する第百二條ノ二の改正は他の規定の場合と異なり非常に進歩した。根本的なもので今度の改正の重點である事が判る。今其の改正の要旨を概說すれば次の如し。

1、應壓强度を以て「コンクリート」品質取締りの基準とすること、應壓强度と應力度とは不可分の關係に規定せられてゐる以上、逆

に許容應力度に應ずる應壓强度の「コンクリート」を必ず製作す可きことを規定したことにもなる。例えば一平方糎に付應壓力度五十瓩と假定して設計せられた工事に在りては、其の三倍の百五十瓩の應壓强度を有する品質の「コンクリート」を技術的に必ず製作しなくてはならぬ。從つて「コンクリート」品質の設計或は仕樣に當つては、目的の强度を得るに充分な諸條件を具備せしめる要がある譯で、この理論的に新しく「コンクリート」を考えて行かうとする要旨が改正の根本義で「コンクリート」の設計、調合決定に對しても目的の强度確保を念頭に置いて處理しなくてはならぬ。

2、設備、及施工を考慮して均質な「コンクリート」を得るに適當な軟度であること。

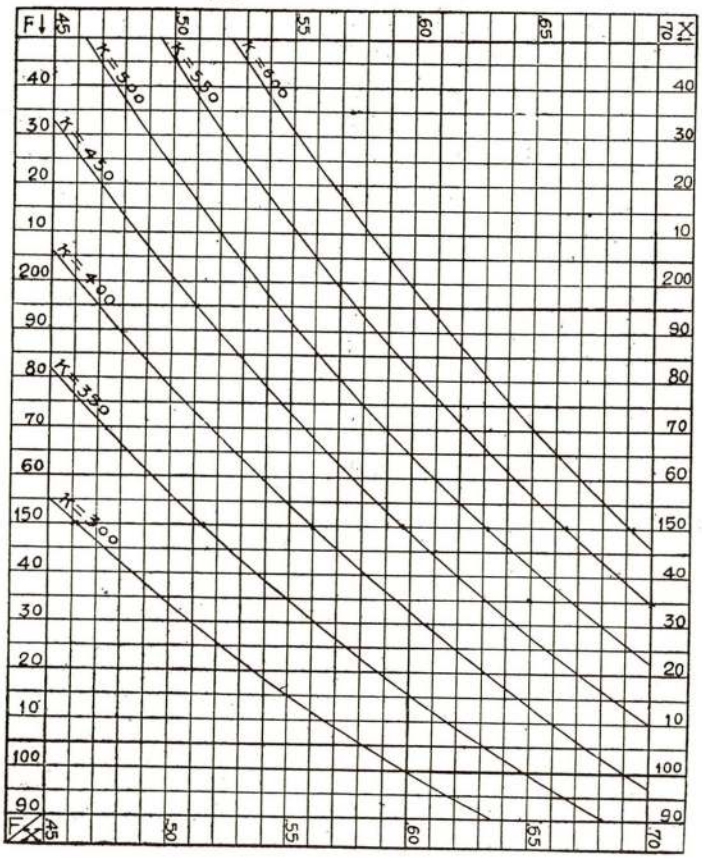
第八十八條の改正說明を參照されたい。

3、水「セメント」比說を採用されたこと。

軟度の或範圍內に於ては「セメント」が同一强度を有するものとすれば「コンクリート」の應壓强度は水と「セメント」の比のみに依り定まると云ふ實驗上の實證に基く水「セメント」比說を採用され公式を第三項に示された。

第一表

$$F = \frac{2K}{20x}\ ;\ F, K\ in\ Kg/cm^2 \quad \begin{pmatrix} K=300\sim600 \\ x=.45\sim.70 \end{pmatrix}$$



イ、公式の說明

實驗式として表示された第三項の公式は應壓强度Fは「セメント」の耐壓强度と水と「セメント」の重量比xとの二つの函數として表され、應壓强度は「セメント」の强度に正比例し、水と「セメント」の重量比に逆比する。換言すれば「セメント」の品質と水量(調合が決定し一回分の「セメント」量が定まれば)に依り應壓强度は支配され「セメント」强度大なれば大なる程「コンクリート」の品質は良好となり、水を「セメント」量に比し多く入れる程强度は低下することになる。今其の關係を圖示すれば第一表の如くなる。

ロ、「セメント」の强度

「セメント」强度は「コンクリート」の强度決定に對し重要なファクターであるから、少くとも「セメント」の耐壓强度試驗を行ふ位の注意は必要である。製造會社に依つて大低限度が極つてゐるから略推定出來る、又、現在市場品は四百瓩乃至六百瓩(但し風化「セメント」は除く)一流の製品ならば五百瓩乃至五百五十瓩以上のもの

は容易に得られる。「コンクリート」設計、或は仕様に當りても「セメント」の強度をこの範圍内に於て推定し、又は指定し若くは製品を限定する等適當に方法を講ずれば、水、「セメント」比のみに依つて「コンクリート」を技術的に取扱ひ得ることになり、水量のみを監督すれば宜いので寧ろ便利である。

ハ、水「セメント」比限度

軟度の制限及び應力度の限度に依り自ら建築工事に用ひられる水「セメント」比にも範圍が出來る。即ち許容應力度の低い、平方糎に付三十瓩乃至四十五瓩迄は七十乃至六十五パーセント。其れ以上即五十瓩より七十瓩までは六十五パーセント乃至五十パーセントの範圍内である。

4、調合比は前の條件を滿足するものであれば何んな割合でも採用することが出來る。

常に水と「セメント」比を一定に保てば出來上りの「コンクリート」は公式に依り算出した數値を保持する譯であるが、均質な「コンクリート」を得るに適した軟度を持たす爲には水「セメント」比に應じた調合割合を知る必要がある。是等の關係を表示すれば

コンクリートの應壓强度 ― セメントの强度
コンクリートの應壓强度 ― 水「セメント」比
コンクリートの應壓强度 ― 砂粒大
コンクリートの應壓强度 ― 砂利粒大
コンクリートの應壓强度 ― 砂と砂利との割合
コンクリートの應壓强度 ― 調合比
コンクリートの應壓强度 ― 溫度
コンクリートの應壓强度 ― 軟度

となり目的の强度の確保より(「セメント」の强度を推定すれば)水「セメント」比が算出せられ、又均質な「コンクリート」を得るに適する軟度を決定すれば其の他の項から調合比を見出すことが出來る。勿論一定の水「セメント」比の基に、所要の軟度を出す調合比は表中第三段の骨材粒大、骨材割合に支配せられるから其の組合せに依り無數の調合比が生ずる譯である。其の內經濟的なものを撰擇すれば宜いのであつて、この意味に於て調合選定の自由が設計者に與へられてゐるのである。即ち水「セメント」比は所要强度より算出して逆に求め、この一定した比率の「セメント」糊を作り又砂及砂利を一對二、五　二、五對二、五　二對四等の割合に混合した試驗體に「セメント」糊を混和してスランプテスト並粘りを調べ、施工に適するスランプが表れた時「セメント」糊の容量を測定すれば、自ら合法的調合比が求まる。其の中で最も經濟的なものを選定して使用調合比とすれば合理的な配合となる。以上の如く調合に關し彈力性のある規定に改められたるも可成多數の試驗を要し、手數と設備を必要とし、未だ普く實用に供する迄に至つてゐないが、是の調合決定についての實驗報告も可成發表せられてゐるから、之に依つて大略は認定し得るものである。

5、地方的に調合比を規定して便法を講じたこと、

若し大なる强度を必要としない場合、(一平方糎に付應壓力度四五瓩即ち應壓强度一三五瓩以下、或は水「セメント」比にして約六五乃至七〇パーセントの場合)には地方的に見て最も多く使用せられる砂粒大を推定し、或は「セメント」强度を假定する等(少しは不經濟となることは承知しなくてはならぬ)調合を支配する諸條件を割一的に假定して簡便な形として取扱ひ得る樣に「コンクリート」の調合に付地方長官は規定を設け又は措置を命じ得る規定となつてゐる。第二表は一つの私案であるが御參考の爲擧げる。

第二表　コンクリート調合表(現場調合比)

水「セメント」比	破粒ノ大サ	粗砂(八番篩以下)		中砂(十番篩以下)	
重量比	調合(容積比)	セメント	砂	砂利又ハ碎石	セメント	砂	砂利又ハ碎石
〇・六五	中練スランプ(二〇糎)	一	二・五	三・五	一	二・五	三・五
	軟練(二二糎)	一	二・五	三	一	二・五	三
〇・七〇	中練(二〇糎)	一	三	三・五	一	二・五	四
	軟練(二二糎)	一	三	三	一	二・五	三・五

備考　應壓强度一三五瓩(平方糎ニ付)トスレバ、水「セメント」重量比〇・六五ノ行ノ調合比ヲ採用スレバ、五〇〇瓩以上、〇・七〇ノ行ノ調合比ノトキハ五五〇瓩以上ノ「セメント」ヲ使用スルコト。

6、溫度の影響に對し考慮が拂はれたること。
寒冷の時季に施工する冬季「コンクリート」に對しては地方長官定むる所に從つて强度を低減する必要が、第四項に規定してゐる。其の程度は近畿地方に在りては冬季間約一割以下の低減が適當な樣に思はれるが、この樣な建築工事の工程を織込まれた規定は應力度を減ぜしめるより寧ろ之が對策を講ぜしめ、冬期「コンクリート」は一割方普通より增大せしめる樣留意ありたきものである即ち急硬「セメント」を使用するとか、又は水「セメント」比を小にし、調合比を幾分良好ならしめ、或は養生に特別の注意を拂ふ等對策を樹てゝ施行の圓滑を計りたいと思つてゐる。
7、「コンクリート」設計の形式

第一法

イ、「コンクリート」强度　一四〇瓩（第百三條ノ二應力度より知る）
ロ、軟　度　二〇糎（第八十八條第四號に合格するものを指定）
ハ、骨材調合比限度　砂一砂利一乃至砂一砂利二（この範圍外の割合は色々の缺點を生ず）
水「セメント」比、調合比は右の指定に合格せるものの內請負側にて任意に選定せしめる。

第二法

1、水「セメント」比　〇六五（セメント强度指定の場合―公式により目的の强度より算定／セメント强度を指定せざる場合推定して算定）
2、軟　度　二〇糎
3、骨材調合比限度　一：一―一：二
調合比は第一法と同樣選定の自由を與えてゐる。調合決定の試驗を行はざる時は調合試驗報告に據り決定するも可

第三法

1、セメント强度　五〇〇瓩以上（指定せざる時は四五〇瓩と推定して調合比を決定しなくてならぬから不經濟）
2、軟　度　二〇糎（水量を以て監督せず軟度を以て監督する）
3、調合比　一：二・五　三：五（目的の强度より公式により水「セメント」比を求め、軟度と共に使用砂粒大を想定して調合比を知る（表參照））
尙砂粒大を指定することあり。
8、「コンクリート」施工監督の形式

1、水量に依る法
水「セメント」比と、調合比とより、一回練の「セメント」量が分れば其れに必要な水量が判る。砂、砂利の含水量測定を日々行つて砂、砂利に含む水量を差引いた水量を測定器によつて注入すれば良い。

2、調合比に依る法
從來と同樣であるが軟度試驗を行つて監督補正する。

尙第百二條ノ三の規定により特殊「セメント」使用の場合又は調合決定の爲のセメント試驗或は「コンクリート」强度試驗等其の他必要に應じては强度試驗を命じ、或は材料の提出を要求し得る樣新條文を追加された。

C、繫筋規定の改正要旨

1、應剪力度の算式を揭げたこと。
2、算式により求めた應剪力度が第百二條ノ二の規定の許容應剪力度（應壓力度の十分の一）を超ゆるときは繫筋を要す。
3、繫筋を配置された場合の如き主筋を橫斷する面に對しては算式から求めた外剪力度が「コンクリート」の許容應剪力度の二倍半（應壓强度の十二分の一）迄は支障なく、若し其れ以上の數値なる時は斷面を變更しなくてはならぬ。
4、繫筋に關しては實際の施工に鑑み不備な點を補足した。

六、架構計算に關する分

第百十六條（連梁の曲能率の略算に關する規定）、第百十七條（曲能率を受くる柱の强度計算規定）の二個條は、學理の進歩と共に不必要となり削除せられた外、次の條文に改正を下された。

別表第七

改正條文

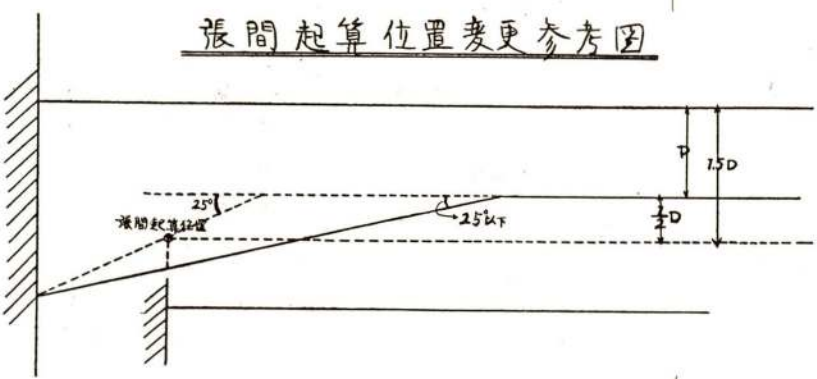
第百十三條　鐵筋「コンクリート」構造ニ於ケル梁又ハ版ノ張間ハ其ノ支承物間ノ中心距離ヲ以テ之ヲ度ルモノトス但シ支承物間ノ內法距離ニ梁ノ丈又ハ版ノ厚ヲ加ヘタルモノヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

梁又ハ版ノ支端ニ持送アル場合ニ於ケル張間ハ持送ノ厚カ梁又ハ版ノ下端ヨリ度リ梁ノ丈又ハ版ノ厚ノ〇・五倍ニ達スル部分ヨリ之ヲ起算ス但シ地方長官其ノ持送ノ形狀、傾斜ノ狀態等ニ依リ張間起算位置ヲ變更スルコトヲ得

材の軸に對し二十五度以下の傾斜をなすハンチの場合、規定に依つて張間起算をなす時は危險となる虞あるに依り張間起算位置を變更し得る樣になつた　斯かる場合は二十五度傾斜となる線を以て規定を準用して、起算位置を定めるのが妥當の樣に思はれる、（參考圖參照）

七、其の他單に字句の修正をなされたる分

第五十七條（木構造及木骨構造制限の緩和規定）、第九十四條（鐵筋「コンクリート」構造制限の緩和規定）、第九十四條（鐵筋「コンクリート」の假構規定）、第九十四條（鐵筋「コンクリート」構造制限の緩和規定）の各條に於て實質的には何等異なつた所はなく、單に內部的事務簡捷を計る目的で、地方長官の許可、承認事項を當該官吏又は吏員の承認事項に修正或は追加せられた。尚第百九條（應壓鐵筋「コンクリート」材の算式）、第百十一條（單筋矩形梁の算式）の二條に於て「コンクリート」に對する應壓力度の條文改正に伴ひ字句の整理を見た。



從前條文

第百十三條　鐵筋「コンクリート」構造ニ於ケル梁又ハ版ノ張間ハ其ノ支承物間ノ中心距離ヲ以テ之ヲ度ルモノトス但シ支承物間ノ內法距離ニ梁ノ丈又ハ版ノ厚　加ヘタルモノヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

改正市街地建築物法施行細則（兵庫縣）に就いて

兵庫縣建築課長　山崎英二

過般市街地建築物法施行令と施行規則の一部が改正せられた關係上縣令も亦改正を餘儀なくせられた點が相當ある。其機會に從來から改めたい點や新たに規定したい事や又永年內規的に實施して居つた事柄を具體的に規定した事が今回の改正である。內務省に於ける今回の改正は可なり重大な問題を伴つて居る樣に思はれる。即今後の監督上に於て果して好果を擧げ得るや否やは餘程特別の注意を要するのではないかと思はれる點があるのである。然し縣令の改正に於ては取立てゝ大なる變更が起つたと云ふ樣な點は全くないので、別段細く說明するの要もないと思はれるが概要を記して見れば次の樣な事柄である。

第三條　に於て工程屆に限り直接當廳に提出し得る事に改められた事に就ては、實は從來から工程檢査は一應所轄警察の係員が現場に臨檢して、然る後、縣廳の技術者が出張臨檢する樣な具合になつて居つた事は二重の檢査をやつて居た樣な嫌が有つた事を改めて　主として縣廳から技術員が臨檢する事に致し其折所轄署の係員も同行する。それには工程の屆は直接當廳に出された方が寧ろ早いので、此樣に改めたのである。然し縣廳に遠い所の方々は矢張り最寄りの警察へお出しになつて差支なく、其場合には警察では現場臨檢をせずに直ちに當廳へ送附せられる樣に致したのである。此工程屆の如きは電話を利用する事なども甚だ一面便利では有り、現に或種の場合にはやつても居るのでは有るが、建築課の內には漸く二線しかない樣な始末で寧ろ原則規定としては、從來通り書面屆の外はないと考へて居る次第である。

第五條　舊規定中の承諾書を提出せしむる範圍を擴張し、更に所謂道路明示の證明等を添附せしむる場合の有る事を附加規定したもので區劃整理の助成の一部にもなり、又官公有地や公道等が思ひも掛けぬ迷惑を蒙る樣な場合に備へたのである。出願書類の一つ一つに道路明示を要求する事は、餘りに出願者には迷惑になる事であるから是は一律に要求する事は差控へて、各公共團體毎に御考慮を願つて特に其必要の有る一定の區域を豫め定めて置いて其區域內の出願には道路明示を要求すると云ふ事にしたい。其場合の根據を此所に擧げたのである

第八條　法八條但書に依る後退建築線を收容力、特に大なる特殊建物の前面に指定する事を新たに規定せるもので、劇場等は大體縣令の興行場取締規則によつて從來此種の制限が有つたのでは有るが、今回の規定によつて前面突出部の關係が餘程窮屈になつたのである。其他集會場、公會堂や百貨店の如きも、相當の後退を規定したものである第二項に「本條ニ依リ指定シタル建築線ニ付テハ規則第四條ニ依ル指定ヲ爲ス」とあり原則として建築線より突出し得ざる前面突出部は此場合は或る程度突出可能なる樣に規定したるものである。第三項により既設の建物を此種のものに用途變更又は新に用途設定をなす場合には、本條の規定だけの前面廣場がなければ使用出來ない事に致したわけである。

第十條　令第十條の第一號を規定せるもので、路巾による高さの制限を道路に接する或範圍の部分に止め、廣場に接して居る建築敷地の

部分内にては保安上支障ない場合には緩和する規定である。

第十一條 舊細則の第九條中の專用軌道を削除し海を追加せるもので、是は高架鐵道や高架電車等が實現して居るので、此種の專用軌道を除いただけの事で高架に非ざる專用軌道は「河海ノ類」の類に包含せしめて取扱ふ可きものと思つて居る。

第十三條 令第十條第五號を規定したに過ぎない。

第十四條 令第十一條の改正に伴ふ變更に過ぎず高さの最低限度に關する規定（舊第十一條）の內容の變化はなく經過規定は附則第五十四條を設けてある。

第十五條 舊第十二條を一部改めたるもの併行道路の場合にも亦道路幅員に最小限度を制定し、「當廳ノ認メタル」の字句を全く削除したる等可なり空地制限の緩和は從來より嚴になつた事と思ふ。

舊第十七條を削除せるは內容輕微のもので、規定として置く程度のものと考へられないからである。

第二十二條 防鼠の使命を帶びた建物の基礎に關する從來からの規定で、一部字句の修正をなせる外舊第一號第二號の特別許可の申請は其要なき爲め之を省略する事に改めたるもの

第二十三條 前條と同一目的の所謂腰積に關する規定の一部字句の修正、竝に其除外例中に「床高特ニ高キ場合」を附加したるもの

第二十八條 多量の燃料を使用する煙突の高さに關する規定中、重油類使用の煙突に對する制限を追加せる改正

第三十一條 舊第三十一條中風壓の低下を認むる場合の特別許可制度を撤廢し手續の簡易化を圖りたるもの

第三十二條 第二項を追加し昇降の設備なき陸屋根に於ても相當の動荷重の最低限度の規定を設けたるもの

第三十四條 舊第三十四條の所謂道路扇の制度の存在に關しては從來多少の疑義を存せる傾もあり、市街地建築物法中の建築線の運用により全く同一の効果を收め得る筈のものなれば、此際此制度を撤廢し總べて本條により建築線指定として處理する事に改めたるもの

第三十五條 願とすべきものを統一規定したる省令規則、第百四十三條第一項第五號に依り地方長官に委任せられたるものを決定せるもの

第一號「罹災地ニシテ當廳ノ指定シタル區域內ノ建築物ニシテ罹災後三箇月以內ニ建築スルモノ」之は專ら建築線指定を全からしむる爲めに、三箇月の期間を保留する要あるによる。

第二號「施行令第一條乃至第三條ニ揭クル建築物」地域制限に關係ある種類の建物は事前に適、不適の完全なる監査をなすは最も必要なる事と信ずるによる。

第三號「學校、病院、市場、集會場、工場」是等は何れも假令木造建築にして、階數も少き場合と雖も其規模概ね大なるもの、又は收容人員の多大なる等特に注意を拂ふ要ある可しと思はるゝものである。是等は何れも法第十四條の冒頭に揭げられあるもので、一見規則第百四十三條第一項第一號に「市街地建築物法第十四條の建築物」とあるを以て重複して居る樣に思はるゝもので有るが、此「市街地建築物法第十四條の建築物」とは法第十四條を根據として發布された規定の適用を受くる建築物のみを指すもので有つて、法第十四條に學校、集會場劇場、云々と揭げられて有つても未だ何等の規定が定められて居ないものならば是に該當しないので有る。即ち現在に於ては單に是に當るものとしては「市街地建築物法第十四條ノ規定ニ依ル特殊建築物耐火構造規則」あるのみで、從つて、此規則の適用を受く建築物のみが規則第百四十三條第一項第一號に該當するのである。それ故特に願とせしむる必要を感ずる學校、病院、市場、集會場、工場を本細則中に

第三十五條第三號として規定したものである。猶細かく申せば耐火構造規則にある劇場等は定員二百五十人以上のものであるから、それより小規模のものは大體願にする必要はない、届出でよろしいのである又揮發石油を使用する自動車の車庫も亦其室面積五坪以上のものは同規定の適用を受くる筈であるから、願では有るが五坪未滿の車庫は届出の形式で良いので有る。又工場に付ては「施行令第一條乃至第三條ニ揭グル建築物」の内に大部分含まれては居るが、藥品名等で一寸判明せずに届に爲す可きか願となす可きか、疑問の物も有ると云ふ懸念から、一層凡ての工場を願の部に入るゝ事に致した爲めに「工場」を此第三號の末尾に入れたのである。是等は寧ろ一括して規則第百四十三條中に「法第十四條ニ揭クル建築物及同條ノ規定ニ基ク命令ノ規定ノ適用ヲ受クル建築物」とか云ふ風に改正して仕舞つた方が煩しくなくつて良いと思ふ。又第一號の「罹災地ニシテ云々」も、第二號の「施行令第一條乃至第三條ニ揭クル建築物」も、共に規則第百四十三條中に將來追加統一さるれば細則中に改めて此種の決定をなす要も無く簡明此上も無い事になると思ふのである。

第四十一條　舊第四十二條の改正で規則第百四十四條ノ二により申請を要する物の内輕微なる事項を届出となすの規定を、追加せるに過ぎず。

第四十二條　舊第四十三條の改正にして様式の指示を改め令第三條ノ二の許可申請に對しては一般説明書の外、特に記載す可き事項を明示し、更に一般願届と同時に特別許可を申請せんとする場合には、願届の何れの場合に於ても單に特別許可申請を併記するを以て足るの途を開き、手續の簡易化を計りたるものである。第五項は令第廿六條の特別許可を申請し得る期間を定めたるものであるが、舊規定に於ては單に法實施の場合のみに限定され居れるものを法、令、規則、細則の各場合に於ても前途を開きたるものである。

第四十四條　舊第四十五條の改正にして建築物の除去届を削除したるもの、是は此種の届出を民間に要求しても實行不可能の事と考へられ、必要なる場合には官廳に於て便宜調査するを可とすと認めたるによる。

第四十八條　舊第四十九條の一部改正にして道路境界線、建築線を追加し、其れ等の要所には必ず界標の類を建設する事を要求し、位置の不明確より來る事後の紛議に備へたものである。

第五十二條　今回の改正により擁壁に對し、法の準用の途が開かれたる關係上設けたるもの

第五十四條　舊第五十四條にして規則の改正の結果、緩和規定適用の都市に届出制を認めたる爲め、之に關聯して條文の整理を爲せるもの

以上各條を通じて度量衡法との關係上、一部を除きメートル、グラム式に換算規定せるを以て、將來の設計、出願等に於ては成る可く是に順應すべきものと考へて居る。今回の改正が法の改正を伴はなかつた關係上、法律第二十六條に在る「道路ト稱スルハ幅員九尺以上ノモノヲ謂フ云々」は從來通り尺として殘れるを初め同規則中に於ても今回の改正條文以外は舊來の儘なる爲め、過度期とは云へ當分紛雜極まる狀態に在るは寒心に耐えざる所である。

市街地建築物法施行細則（京都府）の改正に就いて

京都府建築監督官　和田甲一

市街地建築物法附屬命令の大改正に伴つて、京都府令たる施行細則が改正され去る三月三日より施行されて居る、この改正は大正十三年以來八年目のものである。

今回の改正は形式上全部改正の姿となつては居るが、條文の整理上斯くなつたもので、其の内容が全部改正された譯でない事は勿論である、即大體は從來のものを骨子とし、之に施行令以下の改正に伴ふ必然的の改正と、其の後施行上より得た經驗に鑑み、多少の修正と、若干の新規定が加へられたものである。

左にその新規定幷に修正の重なるものに就て簡單に述べて見よう。

先づ第五條に於て、認可申請又は届出を爲さんとする者は敷地所有者及使用權者又は建築物所有者の承諾を得ねばならなくなつた。之は誠に當然の事であつて、寧ろ斯る規定を設けるのが變な位であるが、事實は往々之を實行しないで工事竣功後に於て、屢々紛糾を來す事があるので、本法直接の要求では無いが、施行の圓滑を期する爲此の規定を設けられたのである。而してその承諾の旨を表示する方法としては、樣式中に定められた相當欄にその旨を記載すればいゝのである。然し必要と認められた場合は、別に承諾書を添附せねばならない。

次に私設道路に關する規定が設けられた、即今後私設道路の開設又は變更を爲さんとする時は、必らず建築線の指定を受けねばならぬ。此の理由は從來自由に私道を設け、之に面して建築をなしたる後に於て、勝手に之を廢し又は變更をなし、爲めに建築線の規定に付後日紛議を起す事が多いためであつて、之を押へるには、建築線の指定に俟つ外はないからである。此の規定の結果として、私道は總べて建築線臺帳に登錄せらるゝ譯である。

◇

敷地の接する建築線の兩端は、必らず他の建築線に接續する事を要する。即行き詰りの道は建築線として認められないといふ規定が加へられた、之は保安上の要求より、從來とても內規によつて行はれて居たものであるから、たゞ成文となつたゞけで、制限上の實質が變つた譯ではないのである。

劇場、活動寫眞館、演藝場、觀物場、集會場、公會堂等の建築物は、其の主たる出入口に面する道路より、後退して建築線を指定せられて居たが、今度其の寸法をメートルに變へると同時に、施行上の實績に鑑み、幾分其の距離を緩和され、その定員七百五十人以上のものは五メートル、二百五十人以上のものは三メートル、その他のものは二メートルとなつた。

施行令第十條所定の敷地即特別の敷地に關する高の規定は、從來もあつたのであるが、今回第十一條に於て條文を整理し且つ多少の變更を加へられた。其の第一は敷地が公園、廣場、河の類に接するときは令第七條第一項後段の高の限度を緩和される。即公園等の幅員（又は對側迄の距離）が右の限度より大なる場合に限り、其の限度を右の幅員迄高くする事が出來る。第二は敷地の前面道路の對側に、公園、廣場、專用軌道若くは鐵道又は河の類がある時には、その道路の幅員と公園等の幅員（又は對側迄の距離）との和を超えざる範圍內に於て、令第七條の一倍四分ノ一を二倍迄、一倍二分ノ一を二倍二分ノ一迄とし、令第八條の一倍二分ノ一を二倍二分ノ一迄とする事が出來る。第三は敷地の地盤面が道路面より九十センチメートル以上高い場合は、

その高より九十センチメートルを減じたる殘の、半分だけ道路面を上げたと考へ、その面より高を測算する事が出來る。第四は敷地の接する二以上の道路面が、高低の差九十センチメートル以上ある場合に於ては其の差より九十センチメートルを減じたる殘の、半分だけを、低き道路面を上げたと考へ、高を測算する事が出來るのである。第五の道路の終端に位するものは、在來と同樣である。

◇

次に施行令第十四條但書の地區即空地制限の除外を認めらるゝ地區は、其の第一が角地（道路に接する敷地二邊の內角が百三十五度以下）であつて、敷地周圍の延長四分ノ一以上が、二以上の道路に接する事を要し、而かもそれ等の道路は、各幅員三、五メートル以上で其の和が十八メートル以上でなければならぬ。第二は敷地の周圍延長四分ノ一以上が幅員五、五メートル以上の道路と、別に公園、廣場、河の類とに接し又は道路を隔てゝ接するものであつて、其の道路と公園等との幅員（又は對側迄の距離）の和が十八メートル以上の場合である。而して第一第二とも敷地の面積は十アール以下のものでなければならない。

構造設備の規定に關しては、二三の新條文が加へられた、其の第一は建築物の敷地境界は、壙壁、葛石其の他の固定物を以て、明確に區劃せねばならなくなつた。そして工事竣功の後に於て、之を移動して敷地面積に增減を來す場合は、必らず屆出をせねばならぬのである。之は建築物の竣功檢査後に於て、空地を狹ばめ以つて空地制限を紊ることを得せしめない爲である。第二は住居の用に供する建築物は、その一棟の建築面積を二十平方メートル以上にする事を要し、且つ棟毎に炊事場及便所を設けねばならぬ、之は府令長屋建築規との均衡をとつた爲である。第三は井戸に關する規定であつて井戸側は「コンクリート」其の他の不滲透質材料を以て構成し、その井筒の高は、地上六十センチメートル以上たるべく、共川井戸の場合は必らず喞筒井戸とせねばならない、但し掘拔井戸、庭井戸等特殊のものに付ては、種々の除外例を認めらるゝのは勿論である。井戸の規定は最近上水道の設備を有せざる土地が、市に編入せられた關係上、益々その必要が多くなつた次第である。

◇

井戸と汲取便所又は汚物溜との距離に就ては、從來は雜用井戸として、便所に特殊の工事を施した場合は、特に近距離の六尺を認められて居たが、其の後衞生上の實績に鑑み、便所又は汚物溜に汚物の滲透を防ぐべき、特殊の構造を施すとも、三、五メートルより近くては、絶對に認められない事となつた、但し掘拔井戸の如きものは除外される。

階段の規定に就ては、新に公衆用に非ざる普通階段に對する規定が加へられた。即蹴上及踏面は各段均一ならしむる事、廻り段を設くる場合は階段の下部に限り段數は四以下とし九十度に對し四段の割合を超へざる事、昇降口には適當なる足溜を設くる事等であるが之等も從來の內規が本規定となつたのみである。今一つ木造建築物（木造床の場合を含む）の三階以上に、居室面積二十平方メートル以上を有する場合には、各階に階段二箇所以上を設けねばならぬ、但しその一箇所は避難階段（踏面、蹴上は普通階段の通りで、幅を六十センチメートル迄縮められる）又は適當なる避難設備を以て之に代へ得る。次に集會場其の他十四種及之に類する建築物の階段で、公衆の用に供するものゝ規定に就ては、從來の條文を書き替へただけで、制限の實質に關しては大同小異である。たゞ此の規定に依る事を要せざる、所謂免除點が、從來の上階面積五坪となつて居たのを、三十平方メートル（約九坪）と緩和した事と、普通階段同樣、三階以上に關する新規定が加へられたのである。其の新規定は木造に限らず總て三階以上に、居室面積十五平方メートル以上を有する場合は、各階に階段二箇所以上を設けねばならぬ。但し階段の個數を定むる規定により、一箇所にて足

る場合は、その二個の内一個は前に述べた避難階段とする事が出來る、勿論此の二個所以上といふ規定は、前の普通階段の場合も同じく、單に數を二ヶ所とするのみではなく、場所を變へて設くる事を要するのは言ふ迄もない。此の三階以上に關する新規定は、火災の際に屢々起る傷害が、三階家以上の高層建物に於て、多く見らるゝ事實より斯く規定せられたものである。

從來は物干、物見臺等の屋上工作物に對する規定が無かつたのであるが、今後は甲種防火地區内にあるものは、不燃材料を以て構成する事を要し、乙種防火地區内のもの及防火地區外のもので、面積二十平方メートル以上、且つ床高三、五メートルを超ゆるものは、不燃材料を以て構成するか或は被覆せねばならなくなつた。

構造強度計算に於ける水平風壓力に就ては、その數字を改められては居るが、從來此の數字によつて各都市とも認められて居たものを茲に事務上の清算をした譯である。

◇

手續の規定に關しては、規則第百四十三條第一項第五號による指定を先づ述べねばならぬ、京都府に於ける指定はたゞ三つだけである。即ち罹災地で知事の指定した區域内に於て、三月以内に建築するもの、他の法令に依り建築物の位置、構造、設備又は敷地に關し許可、認可を要する建築物、建築面積六百六十平方メートル以上の建築物等である。以上の内第二の他の法令に依り建築物の位置、構造、設備又は敷地に關し許可、認可を要すべき建築物とは、大分廣い範圍を意味するもので、警察取締を受くるもの、大部分即ち飲食店遊技場、席貸、湯屋、理髪店、牛乳搾取所、畜禽飼養場其の他多種のものも含まれ、其の外社寺又は風致地區及名勝地内の建築物の如く建築上別に許可、認可を要するものは悉く之に包含せらるゝものである。言ふ迄もない事ではあるが、以上の建築物は皆認可申請をせねばならぬ。

書類及圖面に就ては、大體從來と大差はないが、多少の改廢がある。書式の細部に就ては、實施の經驗上些か修正が加へられた、様式の第一號乃至第三號として、條文の末尾に附してあるのがそれである。

規則第百四十四條によつて、届出を爲すべきもの、内、輕微なるもの、即飾門の類にして假設的のもの、防火地區、美觀地區又は風致地區外のものにして面積五平方メートル以上の屋上工作物、高三メートル以下の墻壁又は門戸の類は全然その届出を要しない。

最後に工事の取締に就て、新に加へられたものは、工事中上棟届等の届出を要する規定である、これは他の都市では從來より行はれて居たものを、遲ればせに本府に規定が出來た譯である。此の上棟届によつて、從來屢々あつた高に關する違反などが、未然に救はれる事と思ふ。

◇

以上は改正の要點に就て、條文の順序に從ひ、畧述したもので、右の他にも細部に就てはなほ修補せられた點が、多々あるが餘りに繁瑣になるので、之を省略するから、詳細は條文に就て見られん事を希望する次第である。

終りに一言附加して置きたい事は、申請、届の書式即様式第二號に依るものは、規定の様式通りに、不動文字を印刷したる用紙が出來て居て、正副二通一組として賣品となつて居る筈であるから、出願者は之を利用せられると便利であると思ふ。（七、三、一七）

市街地建築物法施行令並に同規則の改正に就いて

津田敏雄

市街地建築物法關係命令の改正を機會に津田前大阪府建築課長を煩してこんどの改正變更されたる主旨並に解釋に就いて御說明を願つたところ課長は御多用中にもかゝはらず進んで御快諾あり二月廿二日の例會の席上で次のやうな御講演を得ました、こゝに誌上を藉りて氏に對して厚く謝意を表します。本文は其の速記であります。―記者―

法施行令の改正に就て

私が今日說明申上げますのは改正の極く概略に致し度いと思ひます。從つて極く適切な點に付きましては後に時間をさいて充分御質問を願ふことゝ致しまして、其の御質問に應じて詳しく說明申上ます、左樣御承知を願ます。

御承知の通り市街地建築物法施行令、施行規則、又大阪府令の施行細則は今迄數回に亘り或は改竄或は附け加へられる等の改正がありましたが、是迄の改正は御承知の通り字義に就ての改正等極く消極的のものでありましたために影響が少かつたのでありますが、今回のは多年內務當局に於て市街地建築物法が施行されて御承知の通り十年を過ぎ、立法當時に豫期せることゝ實際とに喰違のある點、更に十年の經驗に依つて從來のでは具合の惡い點、更に又進んで今迄考へなかつた方面迄も法律を以て制定せねばならぬことを氣づかれ、勅令、內務省令に就て大きく改正が試みられたとを聞いて居ります。從つて其の計畫は相當大きいものと承知致して居りますが多少事情により法律に手を觸れぬことゝして勅令以下に及ぶことゝなり非常に大きな變更はありませんでした。然し乍ら前數回の變更よりも著しく變更され其の內容に就きましてざつと說明申上ます。

大體勅令の中に於きまして今度改正されたのは主として地域制限の變更であります。其れと除外例、それに今迄の勅令になかつたものが附け加へられ、其の他の變更でありますが大體地域制限の變更に就き申上げますと先づ從來の規定の制限を廢止し整理を必要とするもの、字句の適切でなかつたもの、字句の修正で、つまり用語等、更に勅令に基き地方により地方令による地域の制限のあるものは各々思ひ思ひのものがあるので、そう云ふ處から內務省に於ては地方令を統一して勅令で制定し、地方令には極く地方的のもののみに限り制定せしむる樣變へられたのであります。

先づ其の內容に關しては住居地域に於きまして從來の第一條に除外例を規定されて居りましたが、之は工場のみにつきまして住居の安寧を害する處なきもの又は公益上已むを得ざるもののみに限られて除外例がありましたが、今度の改正に依り工場に限らず他の色々の用途、自動車の車庫、劇場、活動寫眞館、演藝場、觀物場迄も認められ得る樣になつたのであります。それから更に第一條の各項に就き說明申上げますと「常時使用スル原動機馬力數ノ合計三ヲ超過スル工場」これが從來は二を超過する工場とありましたが今回は三馬力迄の工場とかへられ、つまり一馬力加へられたのであります、勿論馬力の制限はそれ自體の制限ではなく住居地域に禁ずる工場の規模を定める爲に馬力數をきめましたつまり三馬力以上を必要とする工場は禁止するときめられたのであります。市街地建築物法施行後十年、又地域指定後の經驗に依りますと二馬力は餘り抵抗がきついのであります、事實に於て直接馬力が增したからとて振動、音響に直接關係なく工場の設備の狀況に依

るのであります。斯く住居地域に於ては二馬力を三馬力に變更され商業地域に於ては同樣の事由に依り十馬力が十五馬力となりましたそれから更に工業地域に於ては三十馬力を超過するものが五十馬力となりまして約七割の增加となります、地域に於ける馬力の變更は工業地域に於ては前第一條、第二條のものとは趣を異にして從來未指定地域は商工業地域の感があるので、これからも說明致しますが指定地域を相當工業地域化しやうと內務省の意があり工業地域の三十馬力を五十馬力とするのは相當に未指定地域に於て大規模の工場を認めやうと云ふ趣旨によるのであります。それからも一つ著しいのは地域の制限に於て職工數の制限が第一條、第二條、第三條に全然けづられたことであります、もと制限されて居た職工數は住居地域、商業地域で許容する工場の規模をきめる爲でありました、然るに今日迄の經驗に依ればはたして職工とは如何なるものか定義に於て苦しいことを考へねばならぬことになつて來ました、職工自體が多いからとてどれだけ住居の安寧を害するか、商業の利便を害するか經驗上考へられぬのであります假りにありとするも職工數がふえても支障がありませぬ、況んや產業合理化等にあたつて一方大きくふやそうとして居る今日の狀態にあつて、この動的な職工數に依つて建築物を律するは矛盾を來すので職工數に就ては制限をやめたのであります。職工數なり、馬力數なりに依る制限に理由ありとするも工場の業態によほど制限があるので職工數、馬力數の變更を來しても大なる故障がないと思はれるので斯樣な趣旨のもとに改正された樣であります。

其の他第一條に就て申しますと從來は業態の制限は簡單であつたが今度は第二號には改正の結果たくさん出たのであります、これは制限を嚴にされたのではなく多くは地方令に依り制定されて居たものを附け加へたもの、更に未指定地域を工業地域化する爲に第三條の業態をゆるめ、住居地域、商業地域に於て明確に業態を示したのであります、例へば其の例を申しますと、イの玩具用普通加工品の製造は從來大阪府令にありましたものを附け加へられ其の他襤褸、屑綿其の他のもの、洗滌は今迄工業地域に限られたものを工業地域で削られたのであります、製綿、古綿の再製、起毛、反毛又は「フエルト」の製造、鑛物、岩石、土砂等の粉碎、こういふもの、尤もこの內で手でやるものは住居地域で認める樣になつたのであります大體細かい說明はわづらわしいので尙御必要があれば說明申すと致しまして、それから第三號でありますが、從來自動車の車庫は五臺以上は禁止されて居たが今度は建物の制限となりまして內にある品物を以て制限するは適切でないと思はれますので建物の大いさを以て制限する樣になり、こゝに五十平方メートルを超過する自動車々庫はいけないと云ふことになりました、五十平方メートルと申しますと約十五坪、大體五臺位の自動車を收容する自動車の車庫ですと一臺三坪として十五坪、四臺未滿だと十二坪位で這入るので數に於て五十平方メートルと云ふ室面積で多少ゆるみを認め五臺位は入れられ更に小さければもう少し收容することが出來るのであります。兎に角面積で自動車々庫を取締る樣に變更されたのであります。

第四號は從來のもの、寄席が演藝場に變へられたのであります、又土地によりましては甚だ通りが悪いので藝演場とした方が通りが良く其の他では大體從來と同樣であります、第十號が「前各號ニ揭グルモノヲ除クノ外行政官廳住居ノ安寧ヲ害スル虞アリト認メ命令ヲ以テ指定スルモノ」とありまして大阪府令も二月一日に間に合ふ樣準備を致して居りましたが、內務省より協議する樣にと通知がありましたので今に發布に至りません。

大阪府では多少地域の制限をゆるめる意向でありますので多少整理して已むを得ぬもののみ四、五入れたいと思つて居ります。それから第二條に就てはやはり唯今住居地域の建築物の說明で我慢を願ひまして、第三條、これの內にはこまかいもの、內には名前が變れるもの—事實は同一のものでこれは名前を統一する爲—或は從來の規定で漠然として適切をかく爲改正されたのであります。

他の法令に依りあげられて居る

もの等で内務省で統一されたと思はれるものもあります、これも内容に於きましては省略させて頂きます。

それから次に地域の制限の緩和の條項であります、第三條ノ二、従來とはよほど趣を異に致しまして先づ今度の改正によりますと一番に氣を付けねばならぬのは従來第三條ノ二と云ふのは「地域又ハ工業地域内特別地區ノ指定又ハ變更ノ際現ニ存在スル建築物ニシテ前三條ノ規定ニ依リ現在地ニ建築スルコトヲ得サル種類ニ屬スルモノハ其ノ指定又ハ變更ノ日ヨリ十年間ヲ限リ行政官廳ノ許可ヲ受ケ左記各號ニ規定スル制限内ニ於テ増築、改築又ハ用途ノ變更ヲ妨ケス」こういふ風に規定されてつまり地域の指定、變更、特別地區の指定、變更と云ふ様な左様な場合に於て現在地におくことの出來ぬ種類のものに緩和の規定がありました、處が新に法令の條項が改正になつた場合従來存在せるものが新に建築することを得ざる種類になつたものは一私共はこれを廣く解釋するときは左様な場合は指定變更に包含されるものと解する様に思ふのであります、廣い意味に解するとは支障ないと私は信じますが、稍曖昧であるとの議論があるので明に左様な場合も包む様に變へられました、其れで令三條ノ二により「前三條の規定又は市街地建築物法第四條第二項ノ規定ニ依リ現在地ニ建築スルコトヲ得ザル種類ニ屬スル建築物」とこういふ風に規定され當然明確になりました、それから更に三條ノ二は従來は左様な種類は「其ノ指定又ハ變更ノ日ヨリ十年間ヲ限リ行政官廳ノ許可ヲ受ケ左記各號ニ規定スル制限内ニ於テ増築、改築又ハ用途ノ變更ヲ爲スコトヲ妨ケス」こういふ風に規定されたのが「十年間ヲ限リ行政官廳ノ許可ヲ受ケ左記各號ニ規定スル制限内ニ於テ増築、改築、再築又ハ用途ノ變更ヲ爲スコトヲ妨ゲズ」新しく再築又は用途の變更を爲すことを妨げずとこういふ風に規定され、今迄には再築がなかつたのでありますがこの再築と申しますのは一度地震により家がつぶれるか、火災により焼けてなくなつた時、これは従來は新築として禁止され大阪のみならず一般に左様取扱つて居たのであります、處が改築は認められるのに一方自己の意志に依つたのでなく天災其の他の不可抗力によつて失はれたものが再築出來ぬのは片手落の様に思はれたので、そこで改築の様に一度失はれたものが再び建つ様に入れられたのであります、それから用途の變更に就てはなるほど前から用途變更と云ふ文字はあつたが、この従來の三條ノ二の全體を通じて研究する時は或る建物より用途を變更して他の用途のものに使用する、左様な場合に多少行政官廳が許可することは出來ても用途をそれまで擴げることは本來の地域の制限を破壊する事となるので用途の變更は一部の用途の變更として施行し來たつたので、全部に亘る用途變更としては思ひ切りやれなかつたのであります、今度の用途の變更はそれでなく全然別の用途に變更することが出來る様になつたのであります。まづそう考へて頂き度い、それから更に三條ノ二の押し擴められたのは「現在地ニ建築スルコトヲ得ザルニ至リタル際現ニ存在スル建築物ノ敷地及之ト一團ヲ成ス土地ヲ超エテ増築、改築、再築又ハ用途ノ變更ヲ爲サザルコト」従來と異り「及之ト一團ヲ成ス土地」となつたので、つまり従來からある工場であれば其の土地に新築することの出來ぬものが、その隣へ敷地をふやし其の内の建築物の用途變更増築をすること、つまりその用途に使用することがこれで出來る様になつたのであります。従來では「地域又ハ地區ノ指定又ハ變更ノ際現ニ存在スル建築物ノ敷地ヲ超エテ増築又ハ改築セサルコト」となつてゐて、敷地をふやすことに就ては規定により或程度迄認容せられます、これは空地の制限に對して便利であつて必要な空地をふやす位にしかつかへぬのでそれらも便利になつたのであります、従來建てることの出來ぬ敷地に、どし〳〵建てることの出來ぬのは少々不便であると云ふのでこの新しい敷地に迄建築出來る様になつたのであらうと思はれます。職工の衛生上又火災の關係上押し込んで家を建てることは甚だ不都合でこの緩和條項の爲に悪い傾向を來す爲敷地の擴張を認めることが不都合のない様に緩和することになつたと思はれます、或程度迄建てさす

方が良いと思はれます。それから第二號に於ては「地域又ハ地區ノ指定又ハ變更ノ際」がけづられ第二號、建築面積、第三號は從來通り床面積で變りありませぬ、第四號に於ては「工場ノ常時使用スル原動機馬力數ヲ增加スル場合ニ於テ增加スベキ馬力數ハ現在地ニ建築スルコトヲ得ザルニ至リタル際常時使用スル馬力合計數ヲ超過セザルコト但シ行政官廳土地ノ狀況事業ノ種類、作業方法又ハ建築物ノ構造設備ニ依リ特ニ支障ナシト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラズ」こういふ風に第四號を加へられ從來の三條ノ二には馬力數に緩和がなかつたので一方工場が相當に增加され色々の室の增加を認めるに馬力の增加を認めないのは不合理なるも條文に多少解釋の餘地あつて大阪府では馬力は用途變更でないと扱ひ相當數迄認めて居たのでありますが今度は明確に用途變更なりと認めそれに對しては新しく緩和のみちを開かれ理由の如何を問はず同じ數に至る迄馬力數をふやすことが出來、それを更に「行政官廳土地ノ狀況、事業ノ種類、作業ノ方法又ハ建築物ノ構造設備ニ依リ特ニ支障ナシト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラズ」と更に除外例迄も附け加へて改正されたのであります。第五號「前號ニ揭グルモノヲ除クノ外用途ノ變更ニ付テハ現在地ニ建築スルコトヲ得ザルニ至リタル際、現ニ存在スル建築物ノ用途ニ類似スル用途又ハ設備ヲ變更セズ若ハ之ニ些少ノ變更ヲ加フルニ依リ營ムコトヲ得ル用途ニ限ルコト」こゝに初めて本文に基きまして增築、改築、再築又は用途の變更に何らの疑念もなく、用途變更をはかる途を開かれたものであります、その內容は唯今讀みました樣に現在地に建築することを得ざるに至りたる時に、其建築物の用途が現在地に建築することの出來ない樣になつた時に、其の地域におけぬものになつた、其の種類と好く似た工場又は現在の工場に設備の變更なくてやる工場或は少しばかりの設備を變へることにより使用出來る工場に變更することが出來る樣な用途變更を認める、これはまだ實際の事柄にあたらぬのでこの程度の用途の類似の工場を認めるか、それから若くは多少の變更があるので其の運用に就ては充分研究して適切な施行をやらうと思つて居ります。

第三條ノ二第二項「第二十六條ノ規定ニ依リ建築ノ許可ヲ受ケタル建築物ハ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ現在地ニ建築スルコトヲ得ザルニ至リタル際現ニ存在スル建築物ト看做シ」從來と餘り變りなく「地域又ハ地區ノ指定又ハ變更ノ際現ニ存在スル建築物」が改正されたのであります、地域の制限は概略唯今說明申しました樣なものであります。

第四條、第五條の變更は單にメートルシステムに變更され、六十五尺が二十メートル、四十二尺が十三メートルになつて多少喰ひ違はありますが換算の結果多少端數をなくしたものに過ぎず、これは整理の結果であります。

第七條、第八條の內の二十五尺、八十尺を八メートルとか、二十五メートルとなつた變更も今申上げた通りに外ならぬのであります。

第十一條と第十四條ノ二と第十四條ノ三とは是だけは全く從來制限なく新しく加へられ、第十一條は「行政官廳ハ土地ノ狀況ニ依リ特ニ必要ト認ムルトキハ區域ヲ指定シ其ノ區域內ニ於ケル建築物ノ高ノ最低限度又ハ最高限度ヲ定ムルコトヲ得」これは從來に於ては道路を指定して之に面する建築物の最低限度を規定するを今度は左樣の場合に道路のみならず更に區域を指定するのであつて最低限度のみか更に最高限度をもきめることが出來る樣に規定されたのであります、或はこの最高限度の規定は住居地域の從來の制限をも少し重くしたものとすることも出來るのであります、同じ樣な制限が工業地域、商業地域にも出來ないこともない樣に思はれます。

第十四條ノ二「行政官廳ハ土地ノ狀況ニ依リ特ニ必要ト認ムルトキハ區域ヲ指定シ其ノ區域內ニ於ケル建築物ノ敷地內ニ存セシムベキ空地ノ最小限度ヲ定ムルコトヲ得」これも一寸云へば住居地域のものも從來四割の空地を必要と規定されて居たのが他の外國の例の樣に田園都市にありてはも少し空地を嚴にして敷地の四分の三迄空地をおけと運用することも出來る。丁度法律の工業地域の特別地區を指定した樣に住居地域の特別住居地區を指定したかの如く思はれる

ならば法律を改正せねば不都合と私は考へるのでありますがそこ迄運用の出來るものが研究は致して居りませぬ、工業地域内の處で職工住宅をおく處に工業地域なるが爲に三割の空地にてゆるされますが住宅なるが爲に四割を要求することも出來ず、工業地域なるも住居地域なる如く住宅が集ることが出來る樣三割を四割位以上の空地をおかねばいかぬこの樣な場合と私は解釋するのであります。

第十四條ノ三　これは「都市計畫區域内ニ於テ第十一條ノ規定ニ依リ建築物ノ最低限度若ハ最高限度ヲ定ムル場合又ハ前條ノ規定ニ依リ建築物ノ敷地内ニ存セシムベキ空地ノ最小限度ヲ定ムル場合ニ於テハ行政官廳ハ之ヲ都市計畫委員會ノ議ニ付スベシ」もともと今の建物の最低限度、最高限度の區域それから唯今の制限の樣なものは都市生活に非常な影響あるもので地域制限と共に重要でなるべく其の都市の市民の意志代表である委員會の人、經驗ある人、學識のある委員の意見其の他委員等のその方面の連絡をとつて指定することが適切なりと考へられるのであります、普通の委員會と異り知事が委員會に附すことは都市計畫法の現行法では變則であるかも知れませぬ。

第十五條の變更は從來の勅令では建築物の高、面積等の制限の内で面積のみの規定であつて、建築面積の地盤面上六尺以下のものゝ部分の面積は二メートルとなつたこの突出の三尺を一メートルと規定されました。

第十六條　これは單に條項の整理と從來面積の計算の樣に解釋されたが、勅令全體の敷地の定義を明確に本令に於ける建築物の敷地に定義が運用出來る樣に制限を整理されたのである。

第十六條ノ二　從來から施行に疑義のある第十四條の地域、地區、第十四條ノ二の區域に、甲乙に跨る場合その運用が妙な取扱で尚地方まちまちであつたのが、どれもこれも明確に統一されて制限の嚴なるものに依ると變更されたのであります。

第二十六條ノ二　これは擁壁に對して明かに從來は建築物か工作物かゞ明確でなかつた爲に建築線より突出、高さに依る構造の制限が加へることが出來ぬ爲にあぶなかしく、そこで第二十六條ノ二で擁壁を建築物と決めて第九條建築線突出部、第十二條高、空地の制限第十五條は美觀地區の制限、第十六條工事執行の必要な規定、第十七條保安上危險な場合、衛生上有害な場合にも適用され、「本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違反シテ建築物ヲ建築シタルトキ」それから其の建築物に對しての違反者の責任の規定、或は建築物の訴願、行政裁判所に出訴し得ることも他と同樣になされる樣に改正されました。

第二十七條　これは從來「市街地建築物法ハ國寶保存法又ハ史蹟名勝天然記念物保存法ノ適用又ハ準用ヲ受クル建築物ニ付之ヲ適用セス」準用をけづられ實際準用するものなく自然不用となつたのであります。

第二十八條　よほど都合の良い改正でありまして第二十八條は御承知の通り道路專用の建築物で從來は「鳥居、形像、記念門、記念塔其ノ他ノ建築物ニシテ道路ヲ占用シテ施設スルモノニ對シテハ市街地建築物法第八條、第九條及第十一條ノ規定ヲ適用セス」敷地、突出部更に高、空地の制限が免除されるも今度は鳥居、形像、記念門、記念塔ばかりでなく交通信號塔、公共便所それから陸橋の類、おそらく之は大阪の實狀を考慮されたのではないかと思はれます。大阪は河川を利用して商工業の發達せる都市で今日に於ては河に接する敷地、其の上に陸橋が作れぬ爲に舟の荷上げ等に於て長尺物の金物が取扱はれる場合に道路と平面交叉して交通を妨げる、他の倉庫業者はクレーン、コムペヤーで倉庫に持ち込むある裝置で運搬すると云ふ風に、これ等を便利ならしめる爲に、實際に於て道路の交通に故障あるので大阪より意見を出したのであります、是等も認められるのであります、但場處をきらわず設けるは不都合に付き三號の運用に付ては明確なる如きもどこでも陸橋なれば無暗に認めることは出來ぬのであります、其の運用に於ては行政官廳の支障なきもので相當な條件に於て運用さるゝ樣これは許可するにしても相當理由あるもののみを認めたいと思ひます。

御必要な場合には御打合せが願度いのであります、相當な制限がとれるのは弊害あるものと思はれます。地下停車場の類、道路の下にステーションを作る場合、明確に入れられるものは停車場のみならず多少その中に新聞賣場、雜誌賣場は類と考へられ停車場以外に賣店迄も入れることは含まれぬものと御承認願度い。五「高架工作物内ニ設クル倉庫、店舗ノ類」阪急の高架線もやつて居りますが窮屈であります。第八條、第九條は認むるも空地制限其の他を加へ如何にも餘りに具合悪いので之を明確に倉庫、店舗が認められる、それから第二十八條ノ二、これは餘程認められ從來から道路下の地下室に使用の希望多く之をむやみにおさへるともむつかしく、市當局と協議して建築物の場合は途なく地下工作物内に於ては從來認め來るものを建築物と連絡をとり法律を適用せずにやれるものを今度明かに建築物の室も入れられることになつたので勿論これは道路監理者の承認を必要とするのであります。

第二十九條の變更は—第二十八條の規定は固定的のもの、第二十九條は假設的のものの如く思はれるも左樣ではなく第二十九條には博覽會建築物、觀覽場、飾門、飾塔、足代及棧橋の類にして假設的のもの、勿論假設的なるものの類を其の他の假設建築物と改められ建築物の類でなく其の範圍を相當擴張せるも第二十八條と混同せぬ樣に法律の第八條、第九條、第十一條の内第二十九條に於ては第八條を除外せず第二十八條に於ては除外されて居る。つまり假設建築物は建築敷地内に建たねばならぬことゝなります。勅令は大體これを終りと致しましてこれから次に規則に移り十把一からげでお話致します。

法施行規則改正に就て

これは大分改正され改正の内で第六條の改正から第四十三條の改正迄は御覽願へれば些細な變更で說明をやめさして頂いて第四十三條に於て高六十五尺の次に「又ハ」を及同條に左の但書を加ふ「但シ壁體、床、屋根、天井、小屋、柱及階段不燃材料ヲ以テ構成セラレタルモノニシテ地方長官支障ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラズ」「又ハ」と云ふ文字が高と軒高との間に挿まれ私の極く一個の意見なるもやはり六十五尺と五十尺とが何れか一方が超えてもいかぬ、引つかゝる場合は一つだけひつかゝるのでは適用がないと多少こういふ方面に他の都市に於て意見があるので「又ハ」とはつきり入れられて裏書されたのであります、主要構造部の壁體、床、屋根及柱が必ずしも耐火構造でなくとも壁體、床、屋根、天井、小屋、柱及階段不燃材料で構成された時は地方長官の斟酌あるも大體に於てよいことゝなつたのであります。第二十九條の防火壁の場合にも除外例としてやはり同じ樣に耐火構造でなく不燃材料で壁體、床、屋根、天井、小屋、柱及階段で構成せられたるものなる時は等しく耐火構造と同じ樣に認められる樣になりました。

構造に就ては時間をいたゞいて第四十四條から第百四十二條迄は御質問に依り落藤技師が十分說明することゝ致します。

この第百四十三條以下の改正、これは内務省令の改正のうちで最も主眼とせられ其の影響も大であります、手續の制限でこれは簡單となつたので施行後十年になり市民が充分に理解したので簡單なものは手續を省略することにしやうとしたのである。

第百四十三條「建築物ノ新築、增築、改築又ハ移轉ヲ爲サムトスルトキハ地方長官ノ認可ヲ受クベシ建築物ノ用途ヲ變更シテ第一號又ハ第五號ニ充テムトスルトキ亦同ジ」大修繕、大變更をはぶき新しく建物がふえる場合は認可をうける、用途變更の場合も認可を要する、一號、從來の法第十四條の建築物、それから二號、防火地區美觀地區の建築物、之はやはり認可三號、鐵筋「コンクリート」造、鐵骨造、鐵造、石造、煉瓦造、木骨造其の他木造に非ざる建築物、これは重要なものですからやはり認可、百四十三條に從來なかつたが地方令にあつた、これはむやみに面倒なものの手續を略する爲に屋上屋をかさねない樣に地方令を或る程度迄百四十三條に整理されたのであります。四號、階數三以上ノ建築物、五號「前各號ニ揭グルモノノ外地方長官ノ指定スル建築

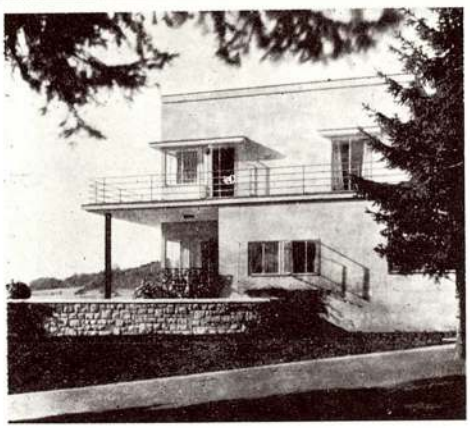
物」内務省では或はこの條項も出し度くはなかつたが會議の結果私共の意見を聞かれて地方によつて不便が伴ひ已むを得ず五號が置かれたものと思はれます、私共の案に於ては範圍をせばめ公布する用意をして居ります。

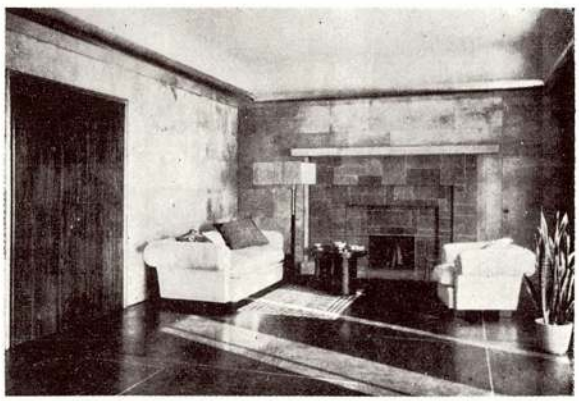
第二項は今迄になかつた「高四メートルヲ超ユル擁壁ノ築造ヲ爲サムトスルトキハ地方長官ノ認可ヲ受クベシ」こういふ風に當然手續がいる樣になつたのであります、そこで大修繕、大變更も從來は認可であつたものを認可でなくも良いこととなり、第百四十四條「左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ハ地方長官ニ屆出ヅベシ」單に屆出づれば良いもの。第一號「前條ニ該當セザル建築物ノ新築」第二號「前條ニ該當セザル建築物ノ增築、改築又ハ移轉」こういふ樣なもの、第三號、前條第一項第一號乃至第四號ノ建築物ニシテ其ノ床面積百平方メートルヲ超ユルモノノ大修繕又ハ大變更、大修繕大變更は屆出ねばならぬが全然全部ではなくその一部であつて前條第一號、法第十四條の建築物、第二號、防火地區及美觀地區の建築物、第三號鐵筋「コンクリート」造、鐵骨造、鐵造等、第四號、階數三以上の建築物、是だけのものだけの大變更、大修繕の屆出を要し地方令により指定されたものゝ大變更、大修繕は屆出なくともよく、全部ではなく床面積が百平方メートルを超ゆるものの前條第一號乃至第四號迄は屆出を要す、第五號がないから地方長官の指定するものは大變更大修繕は面積の如何にかゝわらず屆を必要とせぬのである、第四號は高二メートル以上四メートル迄の擁壁は屆出で二メートルに足りぬものは屆出もいらぬ、手續に對してこれだけの說明では具合が惡い樣でありますが細則が改正してないので現在では現行法をその儘とし矛盾するも當分その儘に運用して居ります。第百四十四條ノ二はこれは前二條の內—第百四十三條のものの內でも地方長官が經微なるものは—其のものに對してあるものは屆出又は屆出を要するものゝ內から一部指定してこれを要せざるものとすることが出來る。內務省の意圖を受け府令にも準備が出來て居ります、それからも少しついでに附け加へて置きますが手續は第百四十三條、第百四十四條で御座いますが大阪は今迄の施行に於て法文を超えたかも知れませぬが從來便法を講じたつもりでありました、然し今度は別に法令を通じて許可、認可の內に含むものを改正の結果第百四十三條、第百四十四條の外に少しばかり許可の願を出して貰はねばならぬかも知れませぬ、他の都市ではこの二重の手續を取つて居りましたが大阪はそういふことは少々具合が惡い樣であります。然し一寸面倒であるが實際には許可が許されるかどうか私共と相談して設計する方が便利で却つて手續を取る方のものの便宜と信ずるのであります。

甚だ粗末ながら之で終ります。

（拍手）

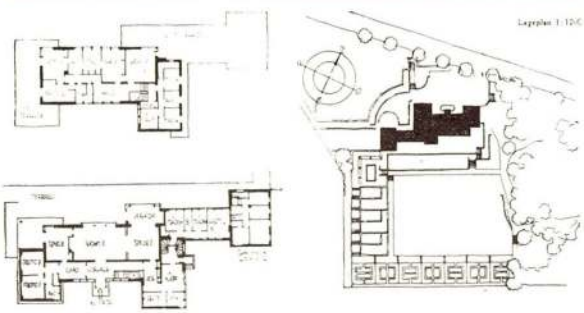








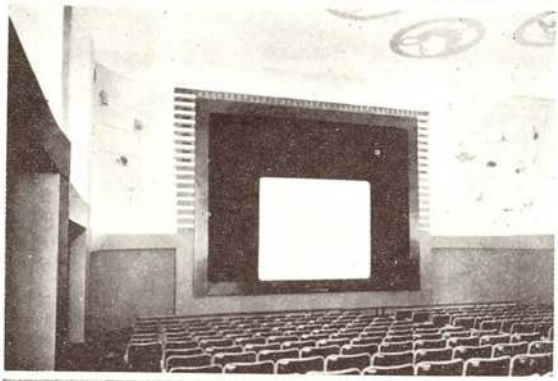


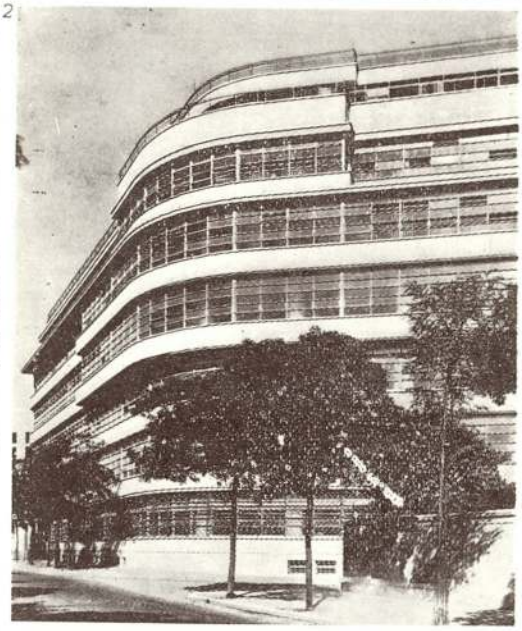


タウヌス・某夫人住宅

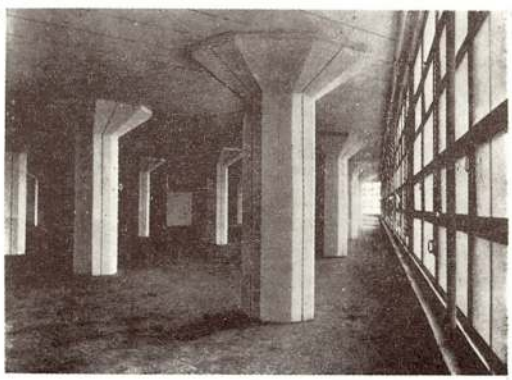
設計　ピーター・ベーレンス氏

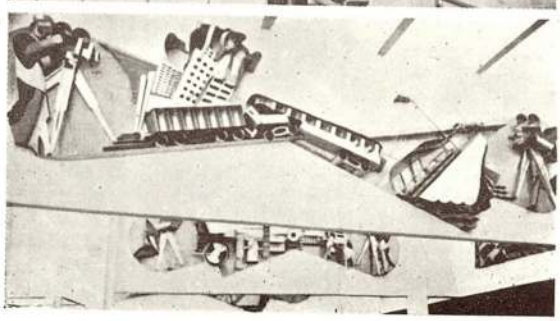






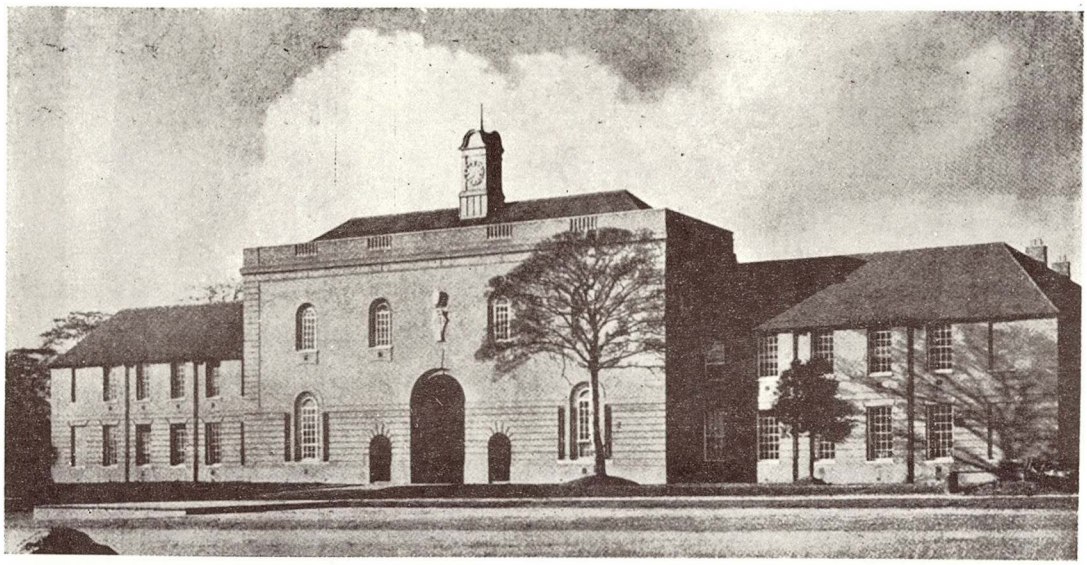


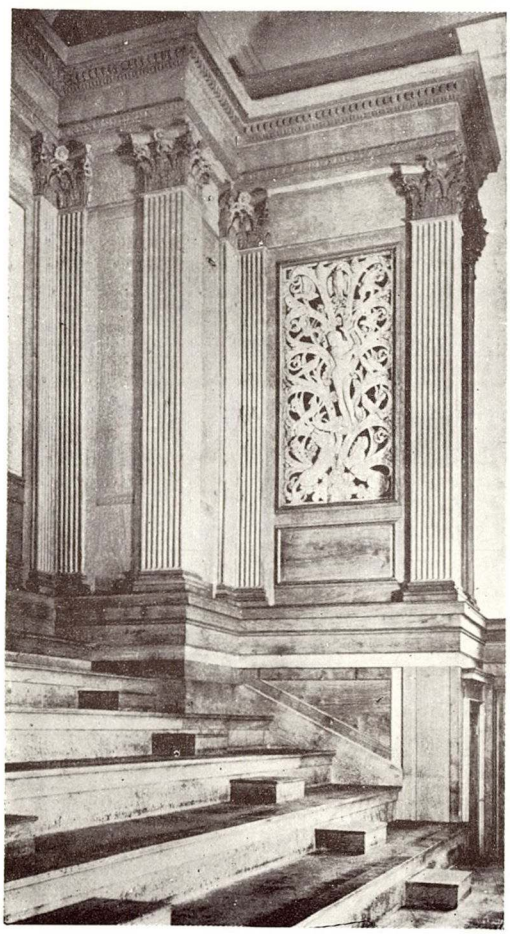


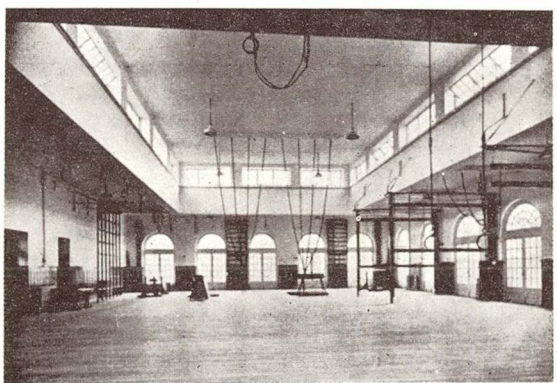


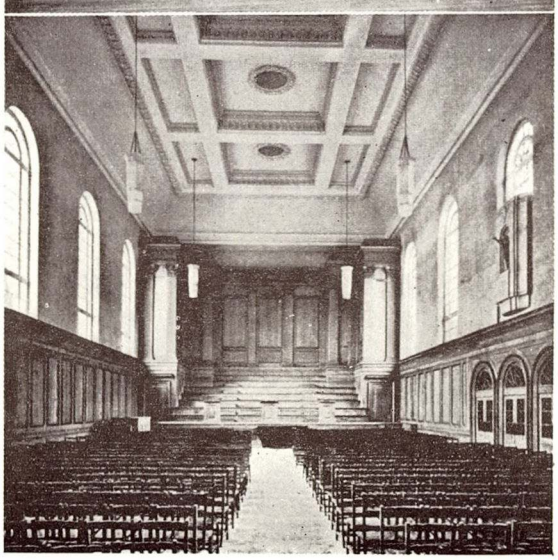
1 獨逸 カツセル 養老院
2~3 佛國 巴里 バラール街工場ビル
4~6 佛國 巴里 某シネマ

設計 ヘツスラー＋フエルケル兩氏
設計 デ マ レ 氏
設計 ゴルスカ＋モントウ兩氏



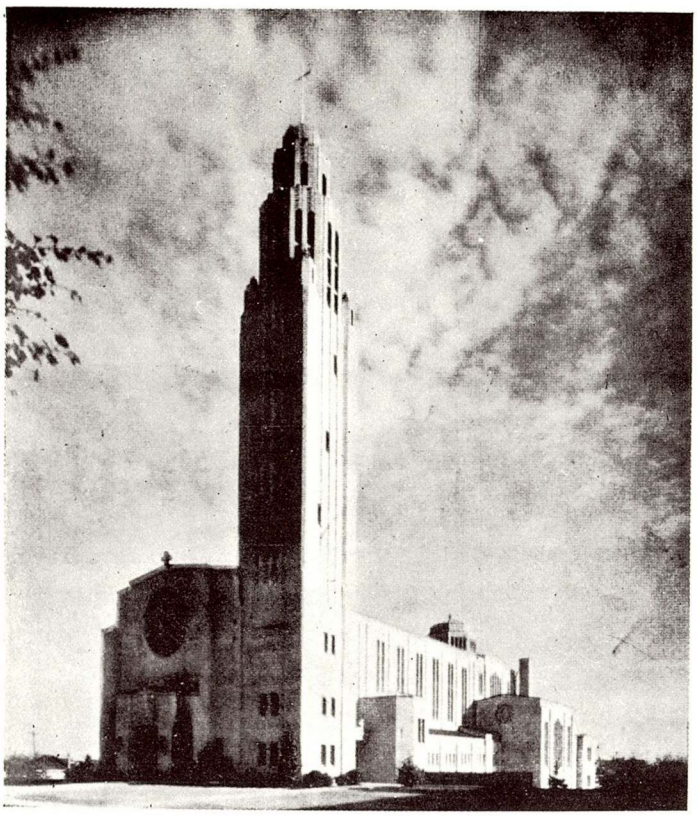


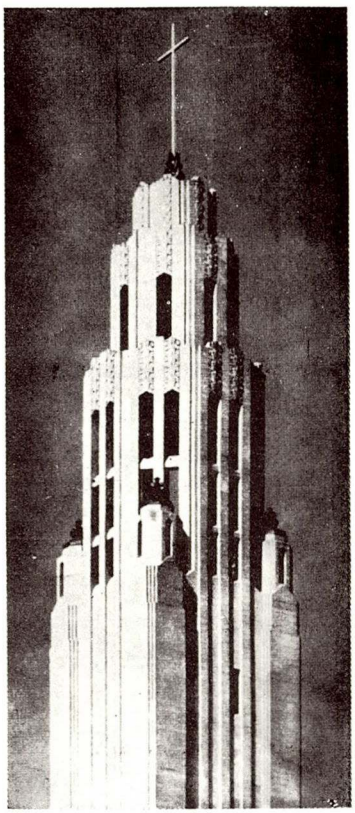


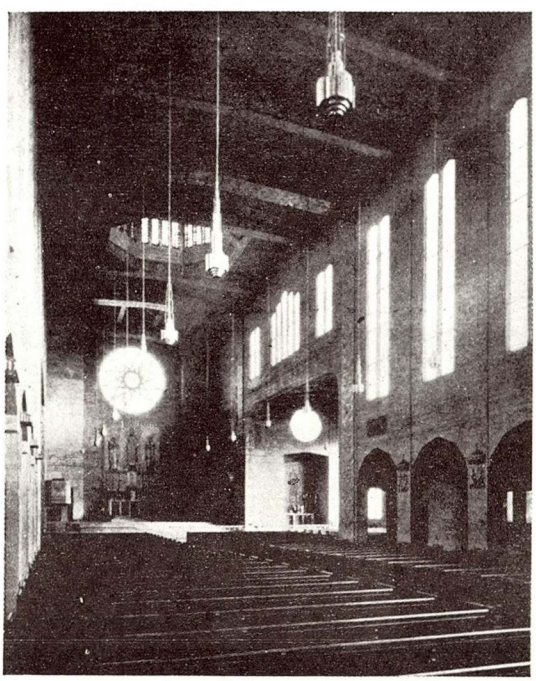


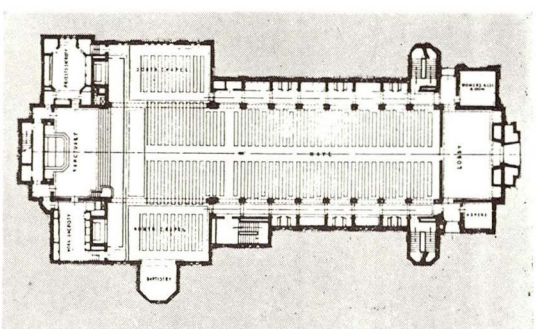
英國　マンチエスター文法學校

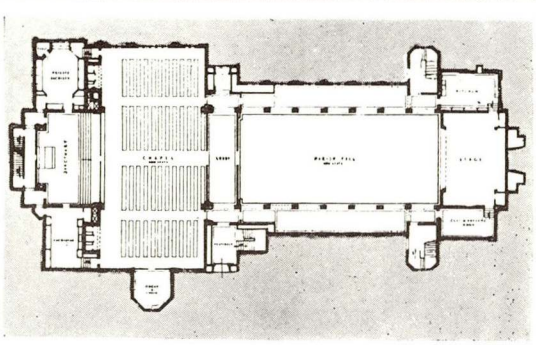
設計　ウオシントン十ジョーンス兩氏



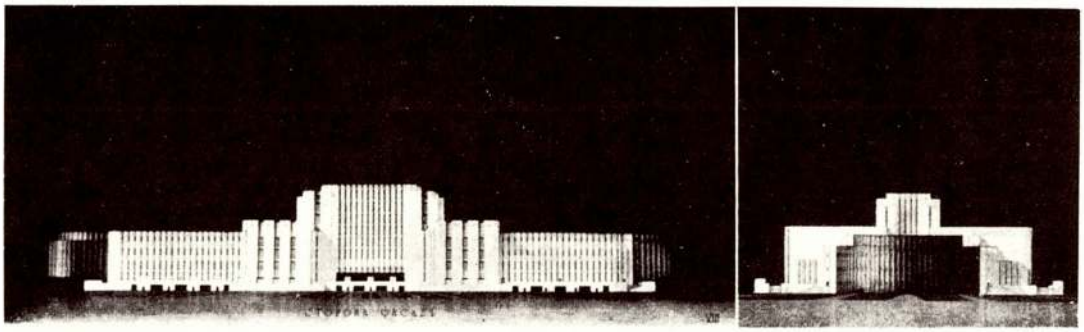


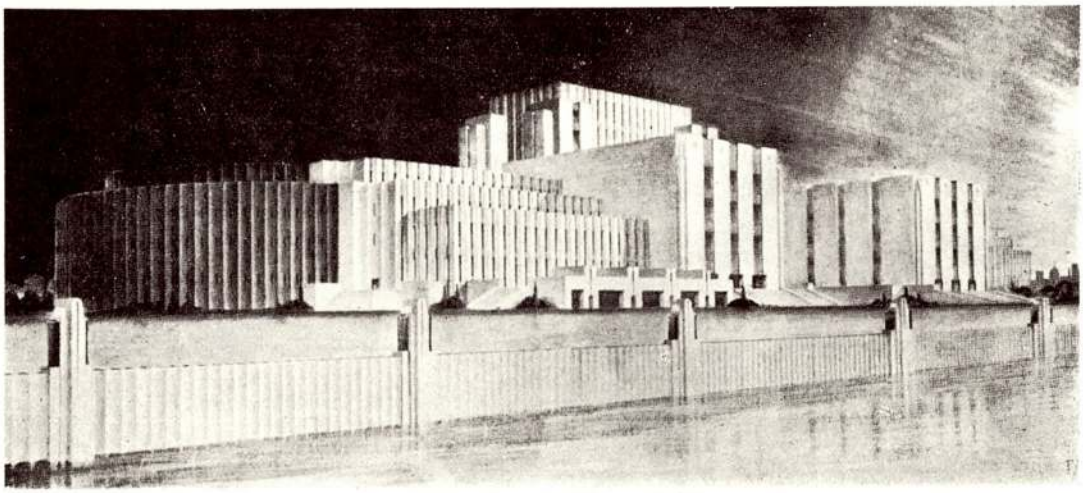




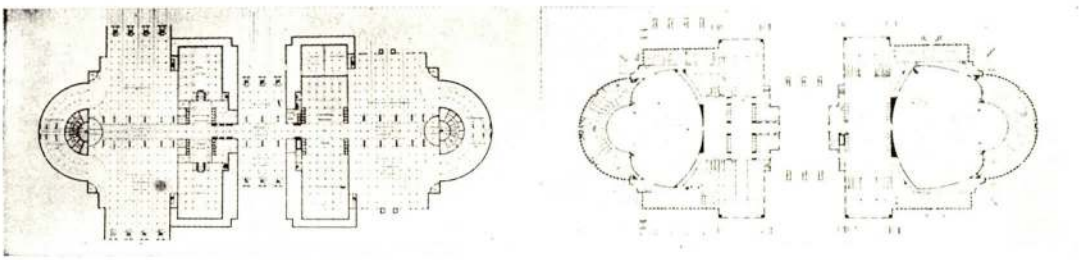


米國　シヤトル　聖ヨセフ寺院　　設計　アルバートソン氏





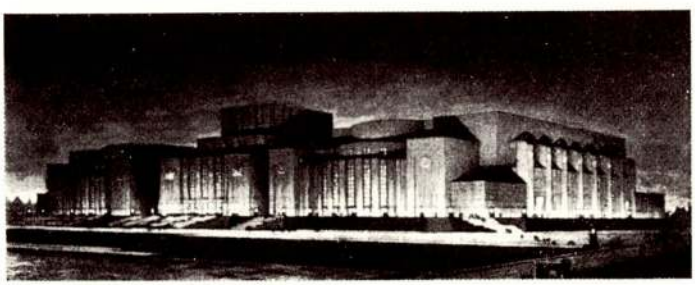
鐵骨構造・中央部ノ壁面ハ白花崗岩、圓形部ハ黒花崗岩トスル由



第一等當選案 イモルトウスキー＋イオフアン＋ハミルトン共同設計

第1階平面ハ全部交通處置ニ充テラル電車、バス、自動車ノ三ツノ組織ニ別ケテ居ル

第1階平面ハ主ナル集會所トナツテヰル下カラハ**エスカレーター**デ上ル樣ニナル中央ノ**オープン**ノ部分ハ集會用**テレース**ニ使用サレル



第二等當選案 カストナー＋ストノロープ共同設計

ソビエート・パレース懸賞當選案



DUNLOP RUBBER FLOORING





弊社製ゴム床敷は既に數多の官衙、會社、汽船並に諸家庭に敷込まれ、快適なる其の感じは御使用家各位の御滿足御賞讃を得つゝあります。御必要に應じ何時にても社員を派し詳細に亘り御要求事項を御説明申上げます。

神戸市脇之濱
ダンロップ護謨（極東）株式會社
各地出張所

ダンロップ護謨床敷

岐阜愛知兩縣下に於ける古建築解說（上）

工學博士　天沼俊一

はしがき

編輯員某氏の請求により、他には何も持合せがないから、また例の如く現代と沒交涉の古建築のことをかくが、此度は甚だ多忙なので、いつもの様にしてゐるひまがないから、昭和二年一月より今年二月までに、此方面を四回程旅行し、可なり努力してとつた寫眞を掲げ、簡單な解說をつけておくことにした。大部分は國寶建築だが、さうでないのもある。

順序は私が歩いた通に竝べてみたのである。昭和二年一月初めて永保寺を見學し、更に翌三年九月行き、その序に定光寺をみた。昭和五年八月に飛驒の高山へ行つたとき、荒城神社・國分寺・安國寺及益田郡萩原町の九津八幡社をみたが、これは既に他の雜誌に記したから今回は省いた。次は今年の一月と二月と、二度愛知縣の古建築をみて歩いたが、一月のとき安八郡神戸町の日吉神社の三重塔をみた。併しこれは岐阜縣所在だから先きにし、次ぎに定光寺をもつていつたのである。

昭和七年四月十四日

目錄

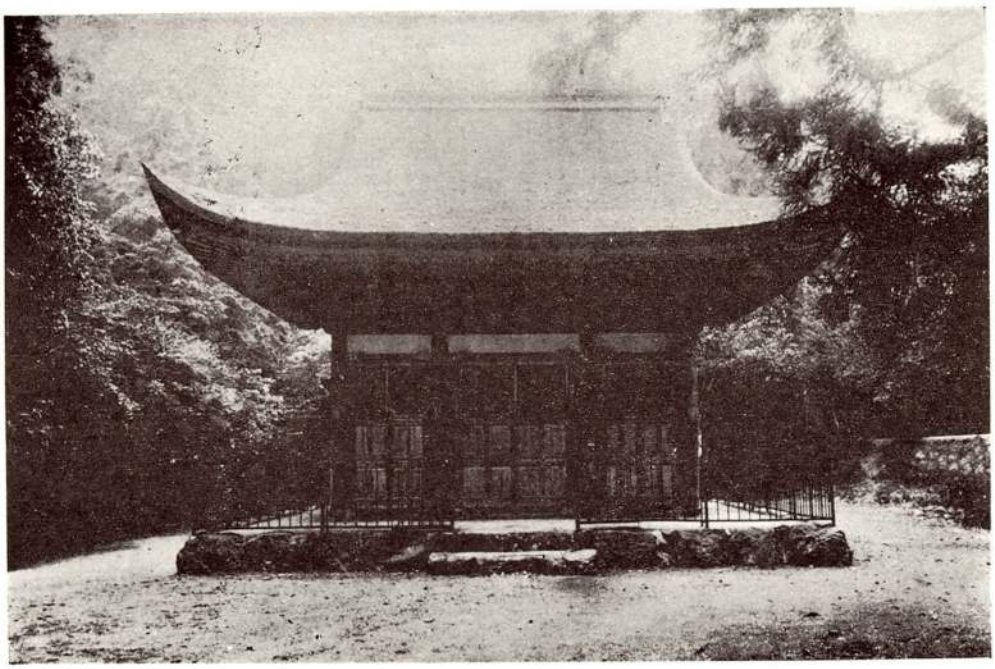
（○印は國寶に指定されてゐないもの）

岐阜縣

永保寺開山堂……第一圖より第十圖まで
同　觀音堂……第十一圖より第十九圖まで
日吉神社三重塔……第二十圖より第二十三圖まで

愛知縣

定光寺……第二十四圖より第三十一圖まで
福壽院塔婆……第三十二・第三十三圖
妙興寺勅使門……第三十四・第三十五圖
○妙興寺鐘樓……第三十六圖
性海寺塔婆……第三十七圖より第四十一圖まで
○性海寺本堂須彌壇……第四十二圖より第四十五圖まで
○性海寺本堂厨子（寶塔）……第四十六圖より第五十圖まで
萬德寺塔婆……第五十一圖より第五十三圖まで
長光寺地藏堂（六角堂）……第五十四圖より第五十六圖まで
本遠寺樓門……第五十七・第五十八圖



第一圖　永保寺開山堂正面　（昭和三年九月十六日・岡崎守藏氏寫眞）

永保寺は岐阜縣可兒郡豐岡町字長瀨にある。開山堂は東面し開山夢窓國師をまつつてあるが，それは後ろの祠堂の內部（第二圖右端・第三圖左端）で，ここに見えてゐるのは一番前の「禮堂」である。即ち前方の「禮堂」と後方の「祠堂」とを，中間にある「合の間」で結びつけたもので，洵に珍らしい形式である。

而してかかる形式をもつた建物では，これが最も古いのである。

*　　*　　*　　*　　*

京都市に菅公を祀つた北野神社といふ官幣中社があることは誰人も知つてゐやうが，あれの「拜殿」と「本殿」との間に「石の間」といふのがあつて，つまり此開山堂の如き形式であることは，皆が皆知つてゐるかどうかと思ふ。江戶時代に入つてから「權現造」と呼ぶ形式の神社建築があつて，「拜殿」と「本殿」とを「石の間」又は「合の間」又は「幣殿」で結びつけてゐるのであるが，永保寺開山堂は，つまり後世の神社建物の一樣式であるところの「權現造」のもとと考へられるのである。

*　　*　　*　　*　　*

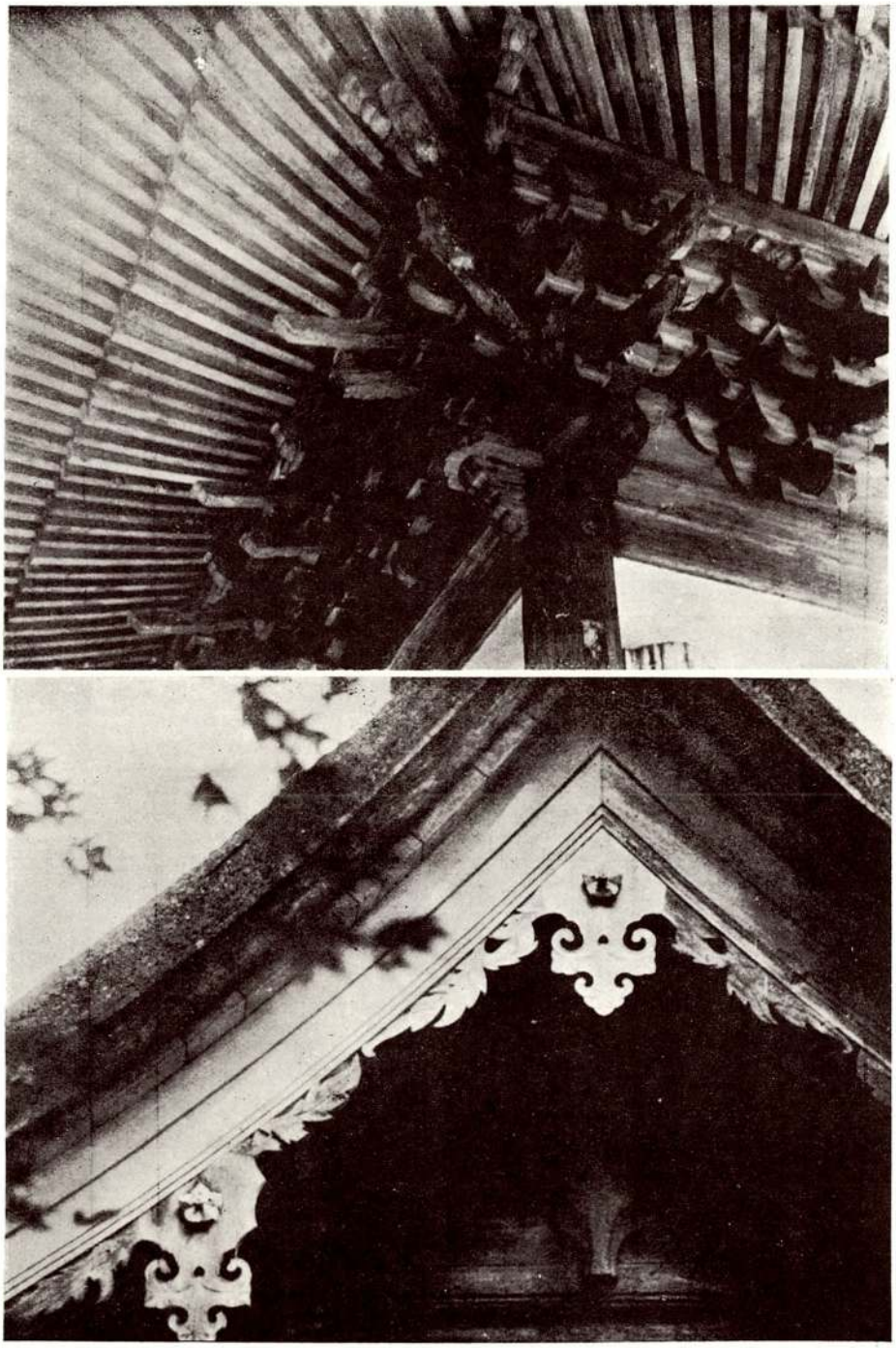
此「禮堂」は方三間，枓栱詰組三手先，軒二重扇垂の唐樣建築。花狹間入棧唐戶及側面の花狹間窓の狹間飾は惜しいことに全部後補。





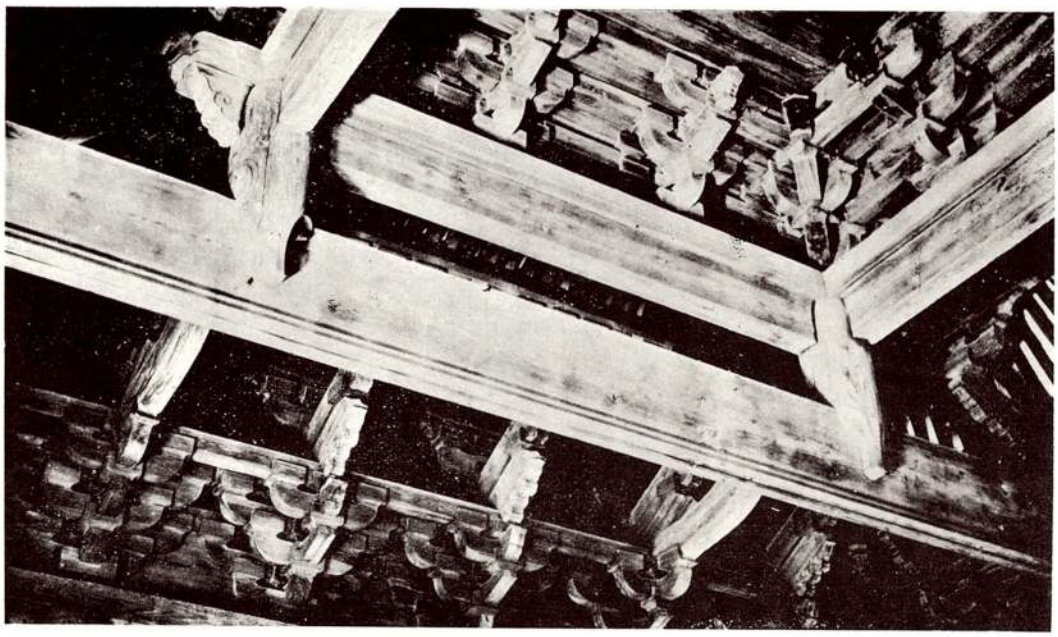
上。第二圖　永保寺開山堂左側面
（昭和三年九月十六日·岡崎氏寫眞）
下。第三圖　同背面　（昭和二年一月四日）

全形を撮るやうな位置は，私のもつてゐるやうな安價の機械では望めぬ。第二圖の如きは廣角のレンズのつけてある上等の暗箱でなければ寫らない。左端より右端へ禮堂•あひの間•祠堂の順に見えてゐる。第三圖は後方から寫したので，これなら後ろの高地からとる事ができる。重層入母屋造は祠堂•あひの間•禮堂の順である。



上。第四圖　同禮堂軒隅見上
下。第五圖　同　　右側面懸魚
（兩圖共昭和三年九月十六日•岡崎氏寫眞）

上圖は禮堂の隅の見上げで，三手先の組物と扇垂を見せるのが目的。典型的唐様の軒である。下圖は禮堂の妻の一部で，異形三鼻懸魚と，此時代のものとすれば異常に發達した鰭を見せたので，大分珍らしいものである。

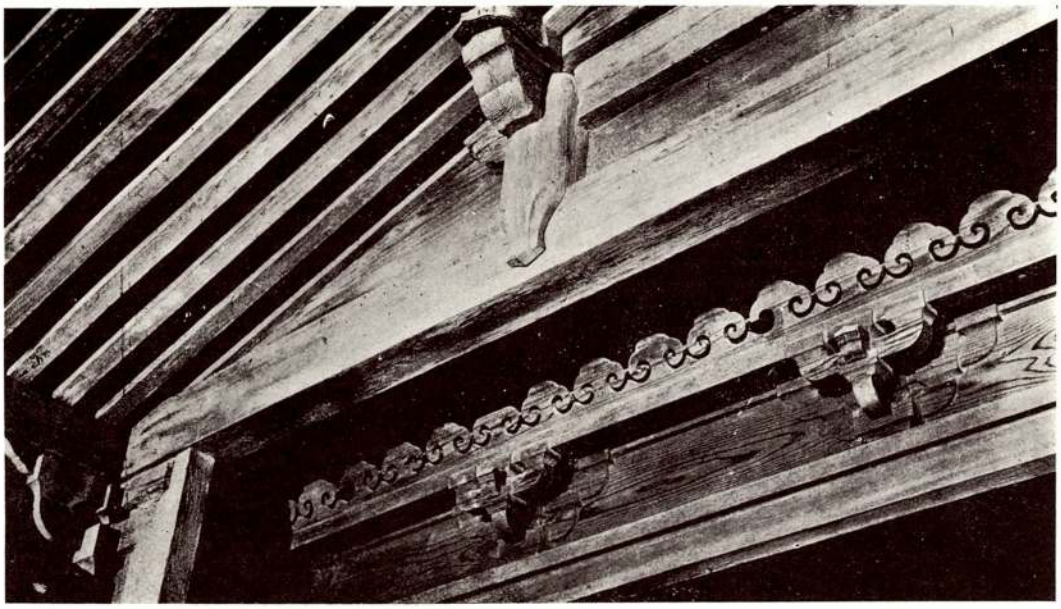


上。第六圖　永保寺開山堂禮堂天井一部　（昭和三年九月十六日）

下。第七圖　同　外陣見上　（同）

禮堂は三間三面だから、かういふ場合には內陣を區劃するのに、一方は內部に柱（來迎柱になる時もある）をたて、他方は大虹梁上に大瓶束をたてて、方形の部分をつくるのに、此場合には內部を廣く使用するため、柱等があつては邪魔なせいか、上圖の如く大虹梁上に二本とも大瓶束にして、內陣を區劃してある。巧な考案である。下圖は外陣の扇垂化粧屋根裏。兩圖共典型的唐樣建築の內部である。





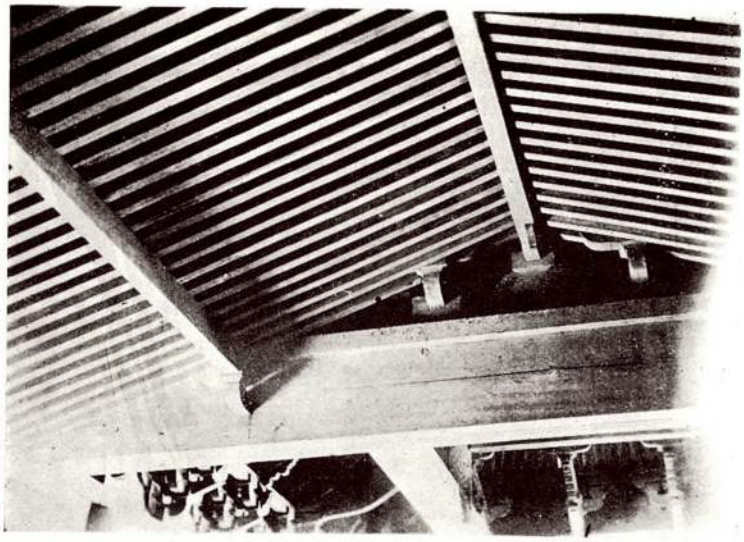
第八圖　同合の間後方右側脇壇上部（昭和三年九月十六日）

「合の間」の構架式は洵に面白く巧みにできてゐる。總て化粧屋根裏で勾配は緩に，化粧垂木と母屋とに繁垂がかけ渡してあるだけである。だから典型的唐様の頗る複雑な禮堂からここへ入ると，非常に落着いた氣分になれる。中中うまく考へたものである。さうして祠堂への入口の兩方に，簡單な脇壇を設けてある。

此は右脇壇（向て左）の上部を示したので，一番下のは頭貫，其上は臺輪，唐様詰組で，枡肘木出組。それで通肘木を受け，例の如く上に懸魚を逆にしたやうなものがつけてあるが，卷き込みのところがくり抜いてあるので，かういふ工合に日光を反射させると，極めて明瞭に見える。

此を第二十四圖と比較すると，同じ出組だが三枡があるのとないのとで，見たところまるで様子が異なつてゐる。この方は先づ普通だが，あの方は珍らしい方であらう。尙ほ此と第九十四圖と比べてみよ。後者は二手先で，尾垂迄入れてあるから隨分複雑で，あれでは少し頭が大きすぎはしないかと思はれる。

全體の有様は次頁の下，第十圖で見當がつくであらうが，上手な組方がしてある。脇壇だけ少し引込めてあるところ等は考へがよろしい。其上の大瓶束・頭貫鼻・臺輪等，總て禮堂の夫れ等と意味が一つで，何れも同時の作といふ事がよく知れる。



第九圖　永保寺開山堂合の間

（昭和七年三月・淺野清氏寄贈）



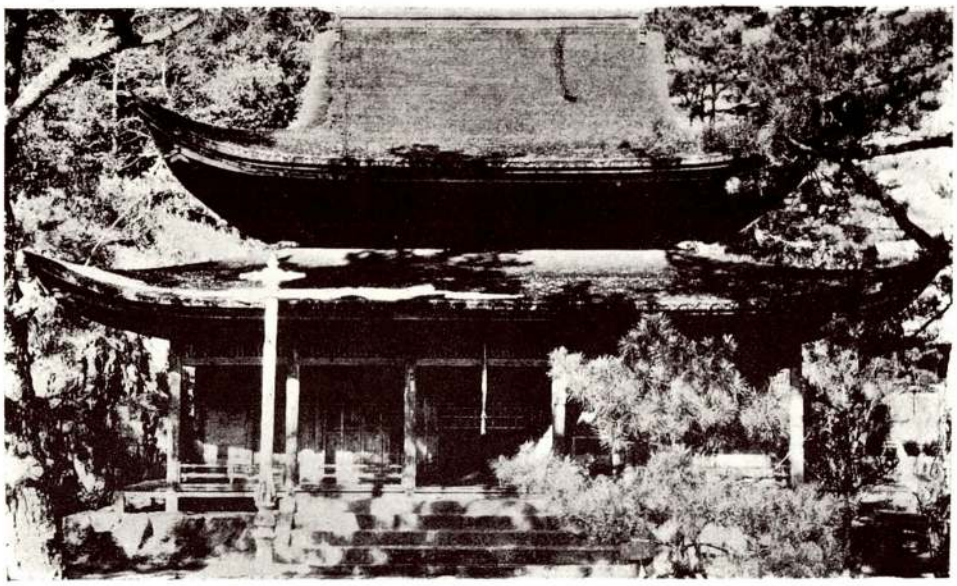
第十圖　同　其二

（昭和三年九月十六日・岡崎氏寫眞）

上圖は合の間の上部を後方より禮堂の方を向つてみたところで，下圖は其反對で，前頁の圖の協壇は，此左下方に見えてゐる。祠堂入口には「無相」の額があるが，其後ろは大瓶束である。

扨て上下圖を通じてみるところ，總てよく唐樣を現はしてゐる。ただ母屋のところで勾配の異る蟇梠が，どうかと思はれるだけである。上圖の禮堂側に於いて，母屋を受けるに挿肘木に枡一つのせたところ等は，甚だ垢ぬけがして氣がきいてゐる。

此程唐樣が濃厚な中に，上圖の化粧棟木受の板蟇股を見落てはならぬ。我我の祖先は純唐樣で建築せねばならぬ時でも，この時代（文和 になると，かういふところに單調を破るために斯樣なものを用ひたので，祠堂側の大瓶束と相對せしめたのである。



第十一圖　同觀音堂正面（昭和二年一月四日）

正和二年の建築で，開山堂より四十一年古いが，先年の大修理の節，正面の扉は一枚もなかつたと見え，全部新しくなつてゐる。觀音堂でも開山堂でも，其修理工事の監督に當つた人は，どちらかといふと，新材を以てとりかへる事がすきであつたとかいふ事だから或は少し位再用できるところも，皆新しくしたのかも知れないと思ふ。

此建物も唐様で，殊に内部にある須彌壇等は，其代表的の一といへる位であるのに，建物は立派な折衷式で，上手に取扱つてゐるところは，全く感心させられる。それを書き上げてみると，

（一）　建物に椽のあること。

（二）　床が拭板敷であること。

（三）　枓栱は唐様なるも詰組でないこと。

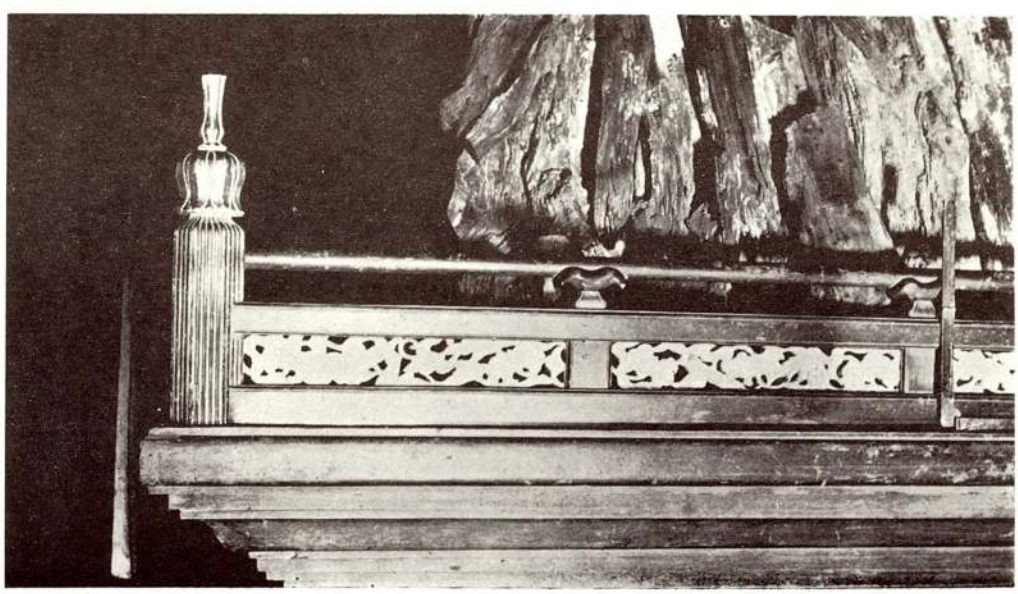
等である。さうして軒に化粧垂が一本もなく，總て化粧裏板になつてゐるのは，大分に變つてゐるので，餘り類例はないが，開山堂祠堂の軒に見られ，また法隆寺塔頭興善院持佛堂の夫れにある位で――此は室町――大して流行しなかつたと見える。とにかく此は軒反りの強い木割の細い，恰好のいいきやしやな建物である。

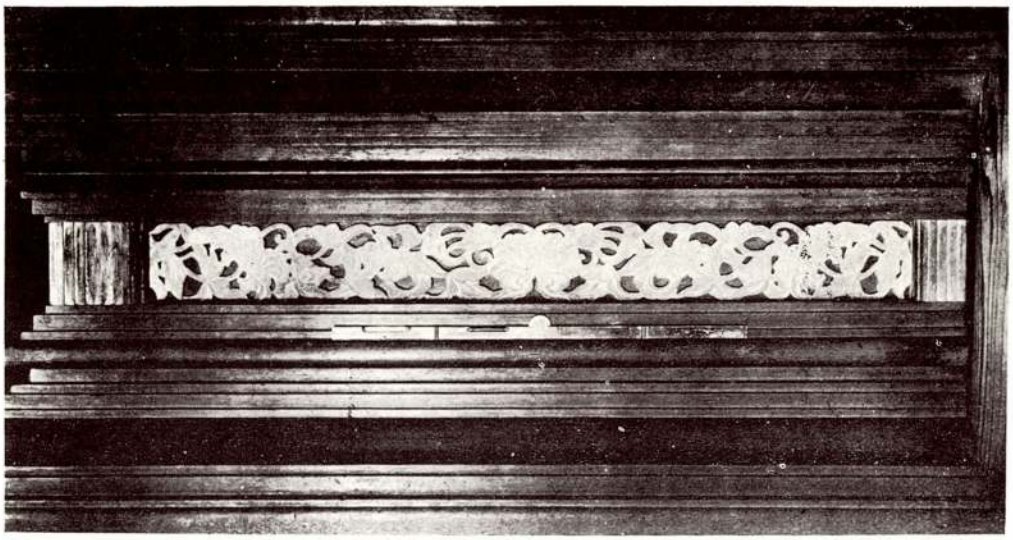
上。第十二圖　永保寺觀音堂須彌壇及勾欄　其一　左側面
（親柱左方に立てるは曲尺の一尺・昭和三年九月十六日）

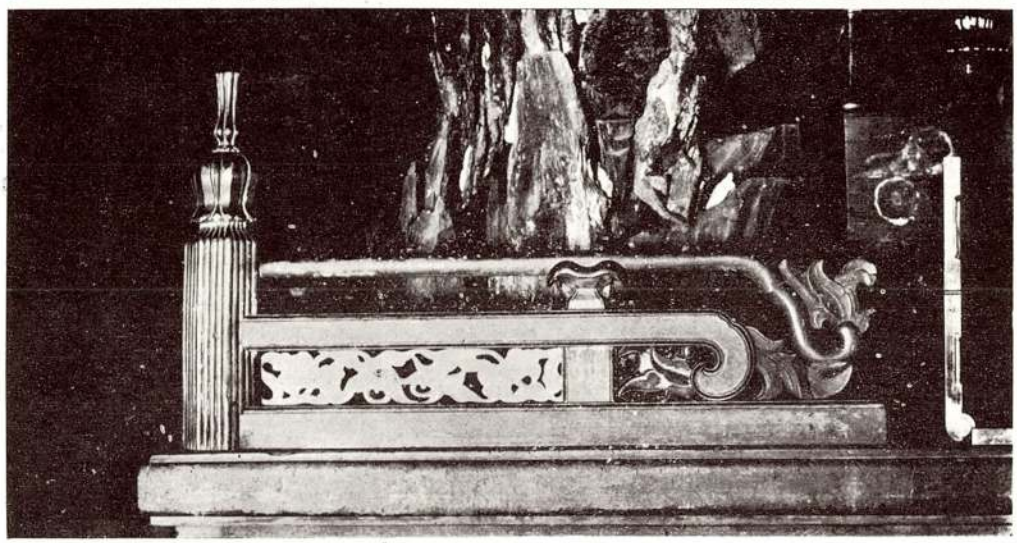
下。第十三圖　同　其二
（右方通柄にそひて立てるは曲尺一尺・昭和三年九月十六日）



此様な須彌壇に、この様な勾欄がついてゐるのは、どうしたつて唐様である。さうして壇の幅の狭い羽目板と、勾欄の平桁・地覆の間に入れてある透彫の唐草も、洵によくできてゐる。然るに此壇の中央には岩をおき、其間に観音を安置してある。厨子にしないで岩にし、細部は唐様にしても、建物に椽を設けたり床をはつたり、取扱が實に巧である。親柱も材束の蓮葉も甚だできがよろしい。







上。第十四圖　同須彌壇右側面一部　（昭和三年九月十六日）
下。第十五圖　同　　正面右勾欄　　（同）
（上圖下に平たくあるは曲尺の二尺•下圖右に立てるは同じく一尺）

上のは第十二圖の羽目の透彫を正面からみたもので，中央に開花せる牡丹をおき，左右に葉や蕾等を相稱に配したもので，いつもいふ通り鎌倉室町のは，いくら込み入つてゐても，すべてが平面的で厚さの感に乏しいので，これ等も其好例の一である。こんなところへほんとうの花の様な厚みのあるのを入れるのは，桃山以前に到底あり得ないのである。

下圖は勾欄の正面の右半分。平桁地覆間の透彫は，第十三圖と共に，相稱ではないが平たい感じのもの。平桁のさきの若葉は變つてゐるが，下に向つて蕨手を形造つてゐるのは定光寺のに似てゐる。第二十七•二十八•二十九圖等と比較せよ。



第十六圖　永保寺觀音堂正面椽上木鼻

（昭和三年九月十六日・岡崎氏寫眞）



第十七圖　同詳細

（同・同）

此は觀音堂の正面の椽の上のところで，滑かな化粧裏板で仕上げ，柱の上に當るところだけ非常に込み入つた木鼻をだしてある。若しこれで化粧棰があるならば，正に手挾であるが，此場合には何と命名したらばいいか。

外軒の化粧棰のところへ，此様な手挾を用ひた例は，和様の建築で室町時代のものには珍らしくないが，鎌倉にあるかないか私は知らぬ。開山堂の合の間にもあるが，あれは棰があるが，この様なのは唐様なのか和様の影響か確言しかねる。



第十八圖　同內陣一部及外陣梁虹繫

（昭和三年九月十六日・岡崎氏寫眞）



第十九圖　同外陣繫虹梁

（同・同）

內陣を全部鏡天井にしてあるところは，さすがに唐様であるが，枓栱はやはり詰組になつてゐない。だから大變に淋しい。其上に頭貫と飛貫との間が大分にへだたり，縦板がはつてあるから，これも亦淋しい。外陣の繫に用ひてある海老虹梁はさすがに古い型式で，開山堂禮堂に比べて非常な差である。

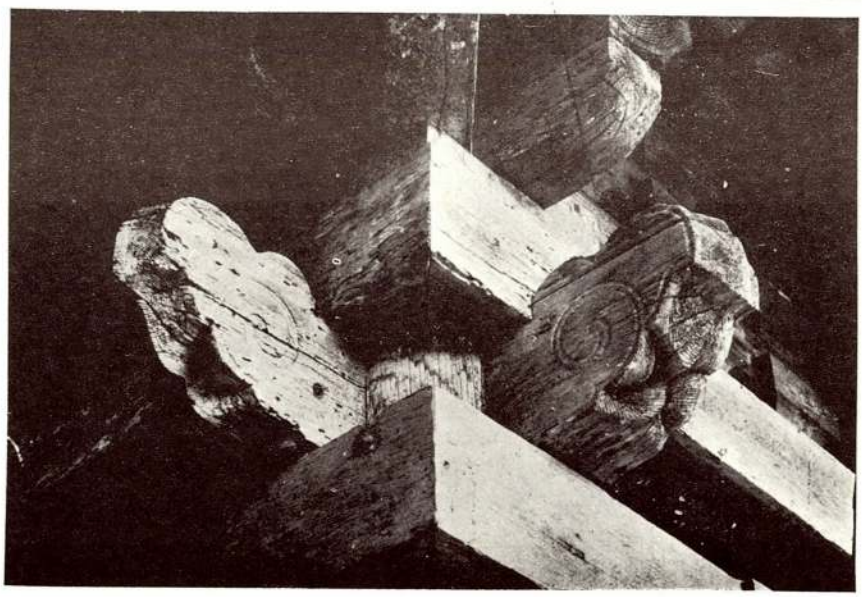
全くの想像だから，當らぬかも知れないが，第十一圖の解說にかいた通り，和唐折衷を極端に試みた結果，內部も亦それに相應する様に，できるだけ簡單にしたのではあるまいか。果して然らば，正面の花狹間戸は，形跡がなかつたのなら連子の方がよかつたのではあるまいか。

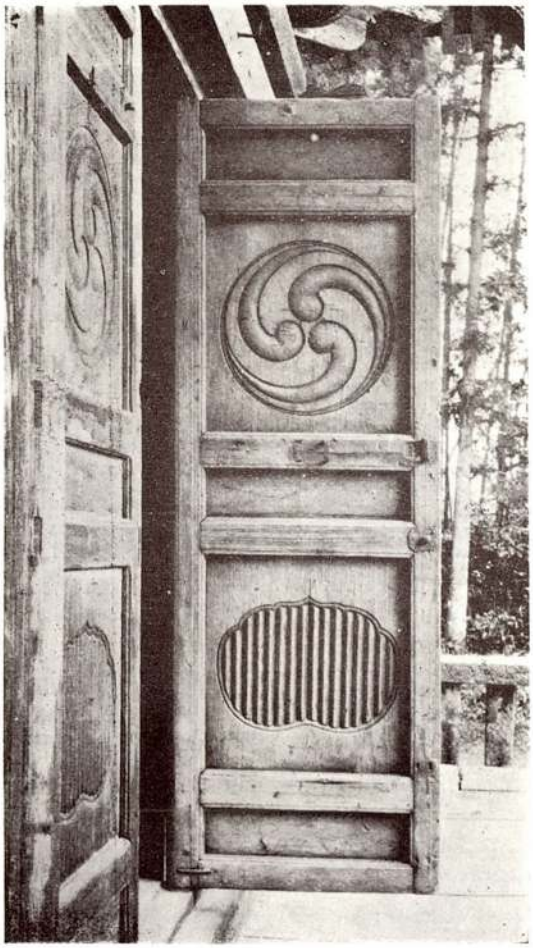


上。第二十圖　日吉神社三重塔全景（昭和七年一月二日）
下。第二十一圖　同　初重隅木鼻（同）

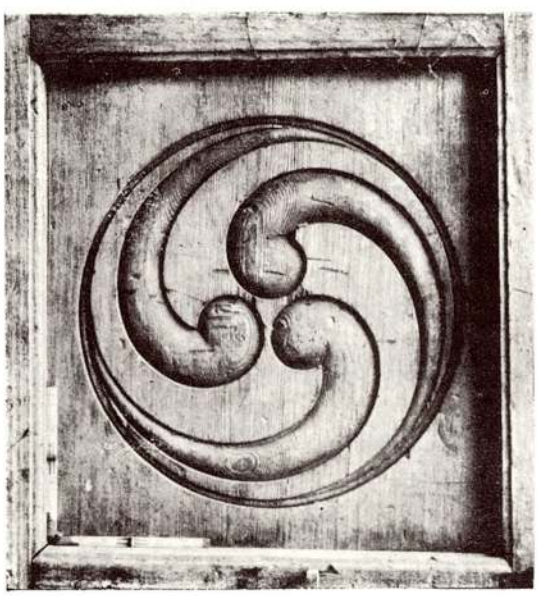
日吉神社は岐阜縣安八郡神戸町にある。神戸とかいてここではGōdoとよむのだから甚だ厄介で、Kō-beなどと言はうものなら、まるで不通である。

普通の三重塔で、とりたてて書く程の事はないが、三重目に勾欄がない——椽もない——こと、山口市の瑠璃光寺五重塔の三重以上の如くである。此場合には三重目の柱の下方に貫も長押もなく、締りがないので頗る物足りぬ。元はあつたのをとつたのではないかといふ説もあるやうにきいたが、それは下から眼鏡でみたのでは判りかねた。





上。第二十二圖　同　初重正面棧唐戸



下。第二十三圖　同　巴文詳細（左下にあるは曲尺の約五寸（六吋））

（兩圖共昭和七年一月二日）

右の三重塔は、天正十三年建立のものたることは、「藥師佛塔婆一基　大願守稻葉伊豫守一鐵」とかいた棟札があるのだから、大概確かであらう。第二十圖で小さすぎて判らぬとしても、第二十一圖の木鼻や肘木の大きな寫眞をみれば、大凡の見當はつくであらう。

然るに其正面の扉は此圖の如くである。此扉は天正迄は少しむつかしい様である。木材のあらびてゐる程度を比較しても、木鼻や枓栱と同時代でないといふことは知れる。然らばいつ頃の修補かといふに、上の巴文が非常にうまいのに、下の桧狹間は左程でもないから、先づ江戸時代の初期位ではあるまいかと思はれるのである。この様な尾の長く充分にのびた上等の巴文は、江戸中期以後では、到底できさうにないことは、他の多くの例から類推することができるのである。



第二十四圖　定光寺本堂脇壇一部（昭和三年九月十五日）

名古屋驛から分岐せる中央線へのると，六つ目に「定光寺」といふ驛がある。ここで下車して何でも二十分間位歩くと，同名の寺に達する。本堂は唐様の重層の佛殿であるが，先づ完全なのは下層だけで，上層は勾配の緩な切妻の假屋根が架してある有様，一見したところで，隨分ひどく荒れてゐるなといふ感がする。

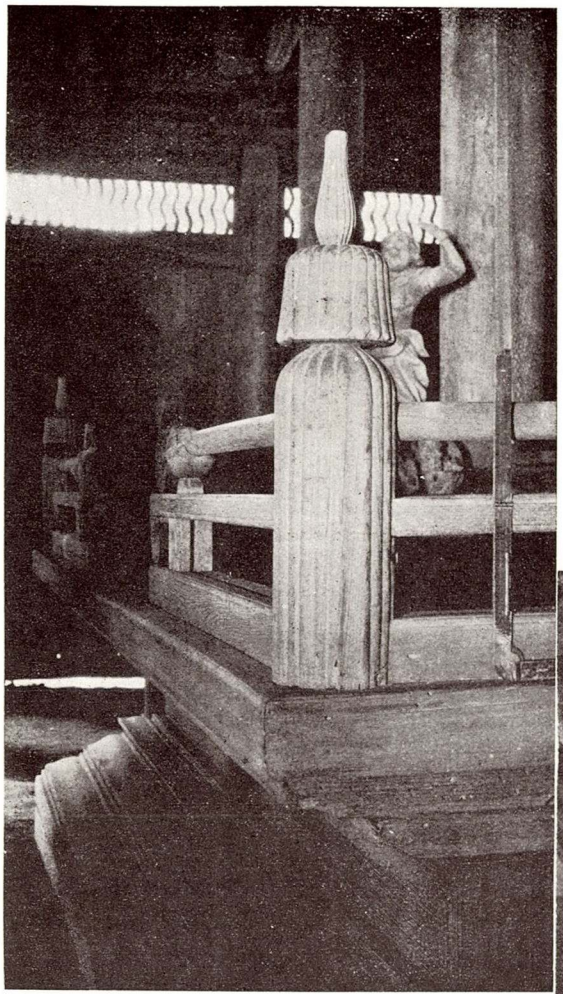
併しながら一度内部へ入つてみると，須彌壇と脇壇とが上等なので，そこいらがきたなくても，甚だいい氣持になれる。脇壇は其上部が此圖の如く，少しく變つた形をしてゐるのが注目に値するのである。

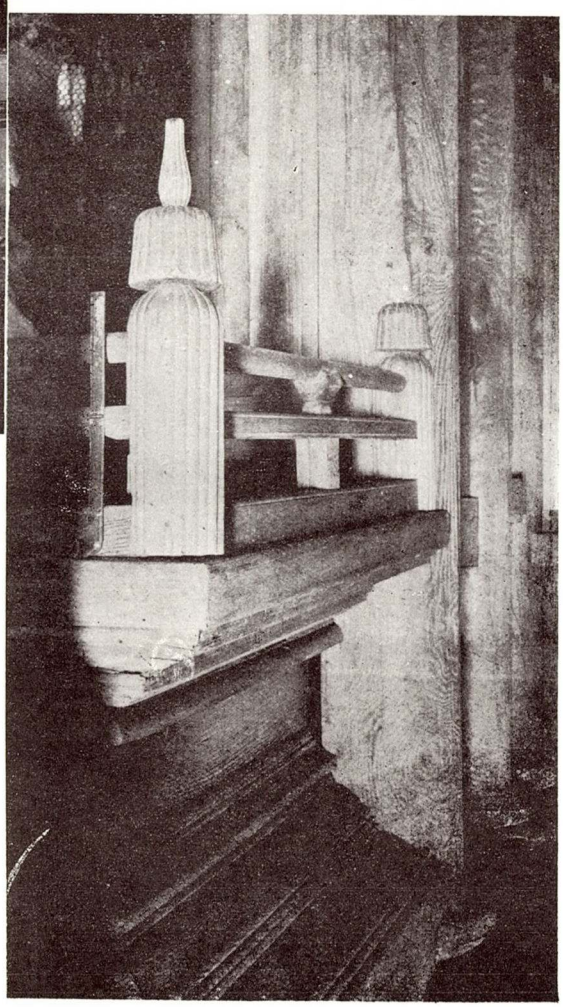
即ち正面柱間一ぱいの大虹梁をかけ，其上に等間隔に大瓶束を立て，柱及大瓶束上に大枓を置いて三枓を組み，其一つでた巻枓には通肘木を含ましてある。此肘木の代りにもう一つ三枓を此巻枓に含ませ，其上に通肘木をやるならば，誰がみても出組であるが，これでは少しばかり物足りなく思はれるかも知れぬ。けれどもやはり純然たる立派な出組である。このあたり尓程他の例と差がある。其上は型の如く逆置した懸魚のやうなものがある。此は大概屋内に用ひてある。屋外の例は慈照寺銀閣の三階と，少し擬物らしいが大徳寺唐門の冠木の上位のところである。

上。第二十五圖　定光寺須彌壇勾欄　其一　正面

（親柱右方に立てるは曲尺の一尺・昭和三年九月十五日）

現在の本堂は隨分あれて居り、床も以前は敷瓦があつたのだらうが、今は土間であるが、須彌壇が甚だ珍らしい。否須彌壇は普通の唐様だが、勾欄が變つてゐるのである。即ち正面の中央があいてはゐるが、次頁の圖でみるやうに鯱がついてゐるのである。隅の親柱は開花蓮で、柱身には「胡麻殻決り」がしてある。これがほんとうの柱に使はれてゐるのは、江戸へ入つての事らしい。



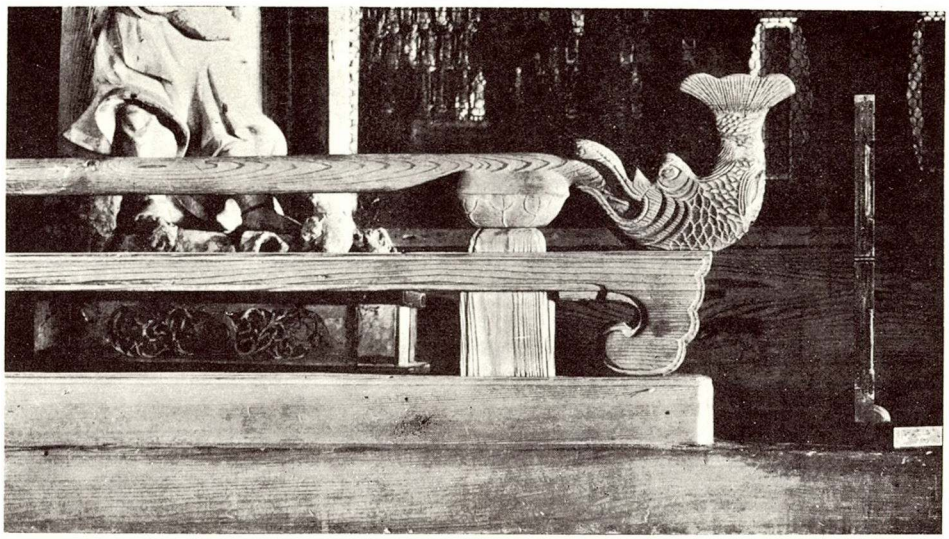


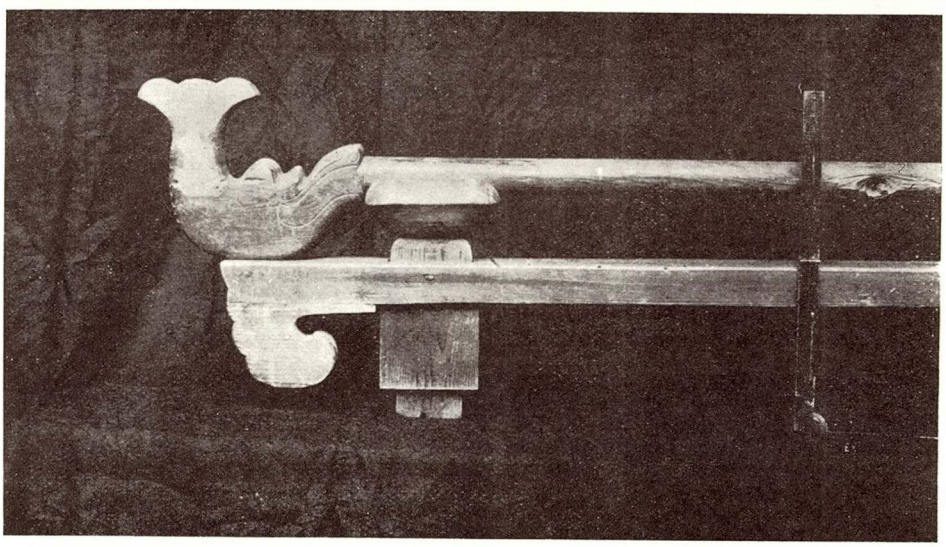
下。第二十六圖　同　其二　左側面　（同月同日）

側面の勾欄は此圖でみる如く、唐様須彌壇ならどこにでもある式。これは左側面で、丁度上圖の大きな親柱が、此圖にも大きく寫つてゐる。但し何かの都合で壇を少し大きく作つたと見え、來迎柱についてゐる半柱は、中心を外れてゐる。

本堂の建築としては、枓栱や虹梁や、勿論當初のものは殘つてゐるが、此須彌壇と脇壇とがなかつたらば、まことに淋しいつまらぬものになつて了ふであらう。

（親柱の左方に立てるは曲尺の一尺）



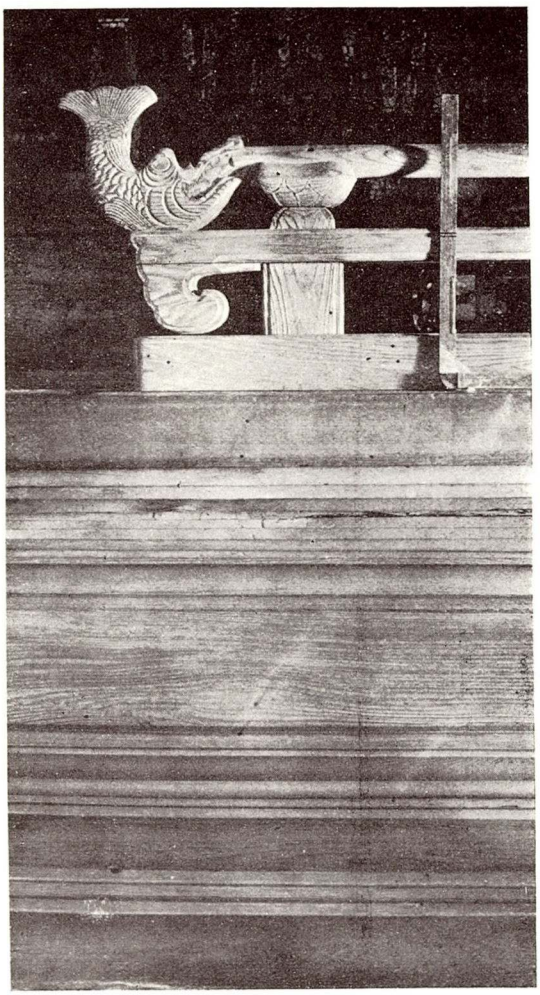


上。第二十七圖　同　須彌壇右方勾欄一部。　其一　鰄正面

下。第二十八圖　同　　其二　鰄背面

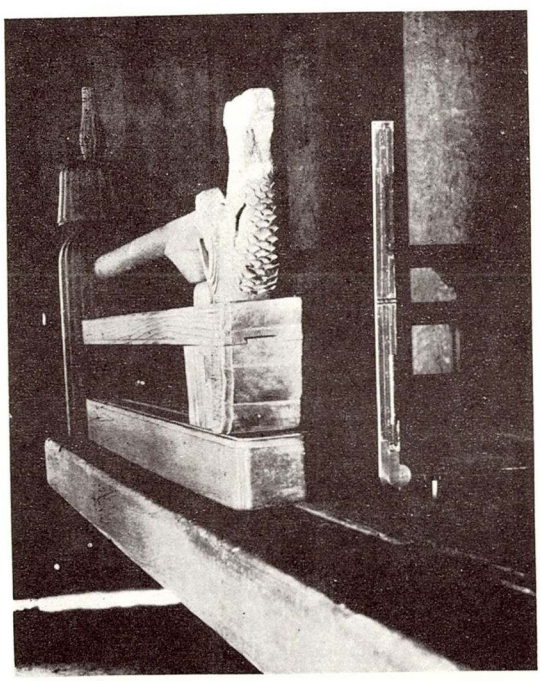
（兩圖共右方に立てるは曲尺の一尺・昭和三年九月十五日）

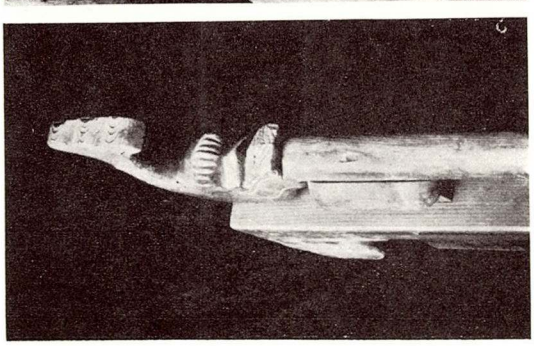
正面右方（向て左）勾欄の終るところに彫刻した鰄を近くみせたもの。架木の先きをこの様に取扱ふなどといふことは，どういふとこから考へついたものか，洵に珍らしい意匠といへる　平桁の先は變つたグリグリがつき，下の方に蕨手を形造つてゐるが，よくみると懸魚をたてに二つ割にしたやうなもので，まるで型のないところから考へ出されたものでもないやうである。束の上の蓮葉・鰄・蕨手は何れもさすがに裏面の方は，鰄の口の形をほつた位で，他は總て略してある。



上。第二十九圖　定光寺本堂須彌壇正面及左方勾欄の一部　（右方に立てるは曲尺の一尺）

改めて述べる迄ももく、寫眞に見えてゐる通り左右向ひ合つて——實は反對向きになつて——ゐるのだから、兩方同じであるべきに、少しく異なつてゐる。例へば第二十七圖のは胸鰭がないのに此にはあり、鰓蓋のところも、もつと小さな所では眼の形も異なつてゐるが、これ等はさういはれて初めて氣がつくので、ただ見た位で判るものではない。左右共背鰭を止むを得ずねかしてしまつてある。





中。第三十圖　右方勾欄鯱を腹面より見る
下。第三十一圖　同　背面より見る
（右方に立てるは曲尺の一尺・昭和三年九月十五日）

此二圖は後方からと上からと、どの様な形に見えるか寫眞にとつてみたので、架木と鯱と一木から刻みだしてあるところをみるに、最初からかうする計畫で、可なり大きな木をもつてかかつたことが知れる。平桁の先の蕨手は、アリにして横から挿込んだことが、第三十圖で知れるであらう。



上。第三十二圖　福壽院塔婆　其一
下。第三十三圖　同　其二

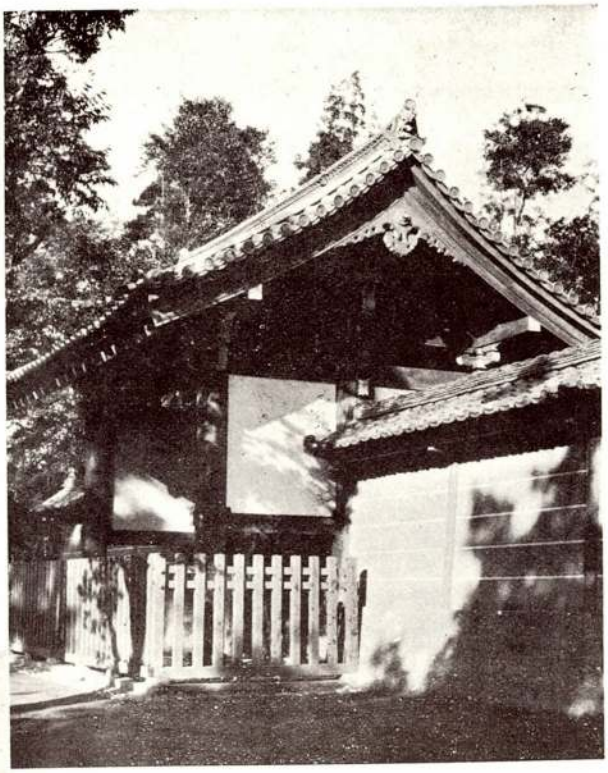
（昭和七年一月二日）

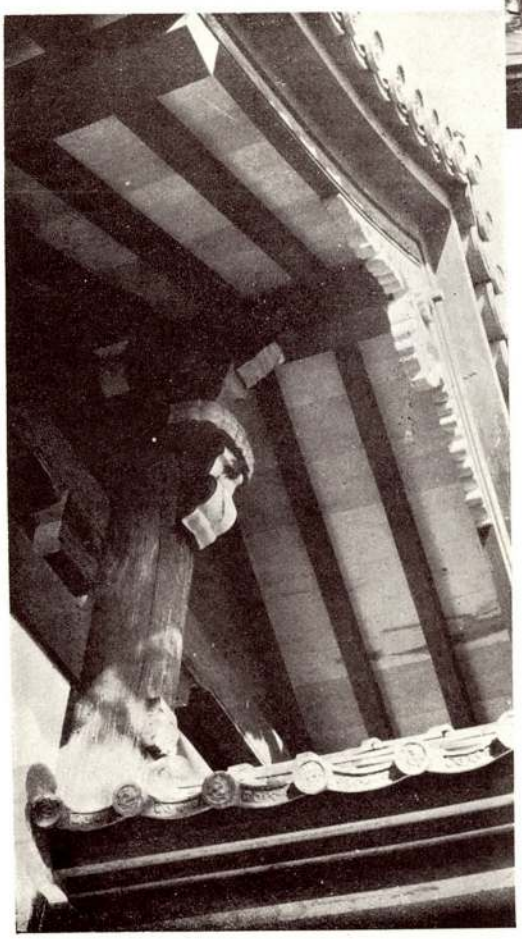
尾張一の宮驛から數町、勿論市中にある、其上道路が寺の境内を貫通してゐるのだからひどい。ゆつくり建築物の鑑賞もできぬ。いい氣持になつてみてゐると、自動車におどかされる始末、なぜあの様なつまらない事をして了つたのか。

何にしろ玉石を六角にして石垣積にした上に建ち、周圍に石柵があるのだから用心頗る堅固である。然るにどういふものか椽がない。とれたのでは（上へ）（下より）なくて、初めからつけなかつた——らしい。出入口も左側面の中の間に引戸がついてゐる位のこと、上層の椽にも勾欄が欠けてゐる。

折角造立したが、もう一歩といふところで金に行づまり、最早工事を進めることができなくなつて、其ままにして了つたのではあるまいか。夫れにしても上層の勾配が急に失し、下層の緩な落着いた氣持を、上層ですつかり壞してゐる。枓栱下層出組和様。上層三手先唐様。扇垂であるのに隅木は和様といつた有様。下層方柱五寸五分、面見付五分半、割合1/10。







上。第三十四圖　妙興寺勅使門

下。第三十五圖　同　妻詳細

（昭和七年一月三日）

（同月同日）

妙興寺は愛知縣中島郡大和村大字妙興寺にある京都花園妙心寺末の大伽藍で、非常にきれいな寺である。此勅使門は貞治五年後光嚴天皇の勅願により建立したといふ事である。小さい柱の太い四脚門で、全體としても形がいいし、また下圖でみる様に、一例を擧ぐれば本柱の上には、出の短い木鼻と蕨輪とあり、其上に枓栱をのせてあるあたり、中中よくできてゐる。軒裏を繋棰にしないで踈棰にしたところなど、建築家の技倆はよく働いてゐる。此門數年前修理を經たらしく（上へ）（下より）隨所新材を以て補加してある。さういふところは、それでよろしいかどうか、と思はれなくもない。例へば縣魚の如き其一例で、兩方共新補であるが、在來の型が殘つてゐたのならとにかく、現在のままをみたのでは、果して貞治頃にこの様な發達した緒をもつたのがあつたかしらんと多少の疑問が起きてくるのである。割合に太いどつしりとした柱を用ひてあるのに引かへ、踈棰にしてあるところも亦、氣がきいてゐる一つである。

第三十六圖　愛知縣中島郡大和村　妙興寺鐘樓（昭和七年一月三日）



寫眞に示せる如き珍らしい形の鐘樓で、角柱に少しく轉びを附したものを四隅にたて、中ごろに椽あり、擬寶珠勾欄を附す。壁は總て白漆喰塗。下層に横に細長き連子窓あり、其反對の側は出入口。上層は連子窓の上方に當るところに圓窓一つあり、額椽は繰形なき木で、狹間飾なし。兩側面には花頭窓を開く、上層頭貫と飛貫との間に浪連子を入る。切妻造棧瓦葺。石垣積の石壇上に建つ。

寺へ上り込んでゆつくりして、文獻でも調べればとにかく、さうでない限り確かかと念をおされると、返答はできぬが、此鐘樓は文明二年再建といふことである。果して然らばまことに珍らしい樣式のもので、殊に圓窓が大問題になつてくるが、この窓はあとであけたとすればそれまでである。尤も浪連子の中には非常に古いのが交つてゐて、室町時代の殘りとしてもよささうなのがあるから、充分調べると面白い結果になりさうである。內部に吊つてある鐘には永和二年の刻銘があり、其時のものとしてよろしい。





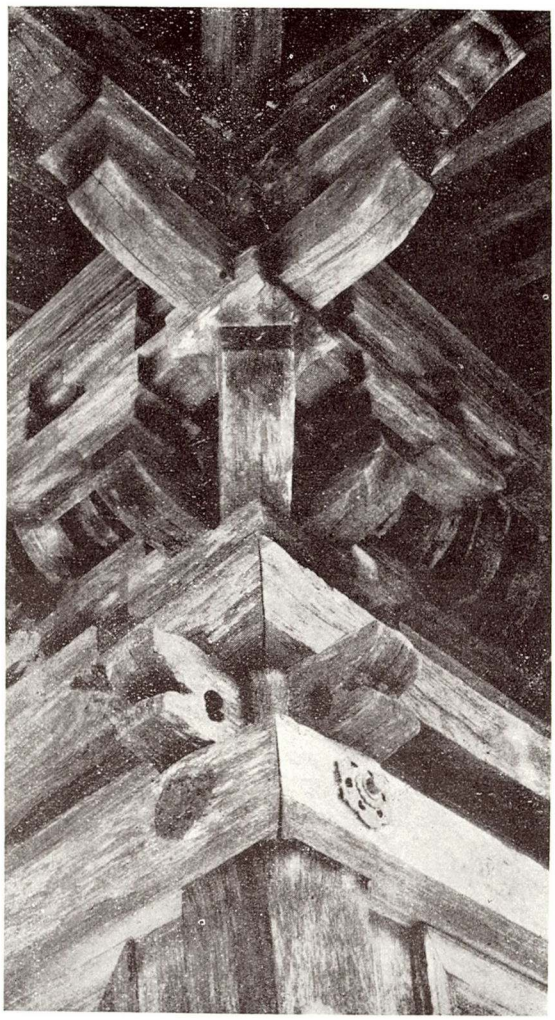
上。第三十七圖　性海寺多寶塔　其一
下。第三十八圖　同　其二

（昭和七年一月三日）

普通の型の如き多寶塔であるが、全形をみたとき、上層が非常に細いこと、極端にいへば折れやしないか、強い風が吹くと飛びはせぬか、といふ多少危いといふ感があるやうである。それが殊に隅から見たときに一層甚だしい（第三十七圖）。それと屋根が銅板葺であることが氣になる一つ。周圍の鐵柵は第一・二・三圖の如く困つ（上へ）（下より）たもので、愛知縣ではこの様なのがすきと見える。尤も京都にも醍醐寺經藏に同様の例があるのだから、餘り人の事はいへぬかも知れぬ。

下層方柱は方五寸五分に面見付七分乃至七分半、即ち約1/8。枓栱内外共出組。内部釘隱六葉古し　上層四手先。上層隅木の鼻下を向き、地隅木の鼻に彫刻のあるところに、唐様の影響を認む。

相輪後補。内部中央に江戸時代の厨子を置き、内に愛染明王を安置す。

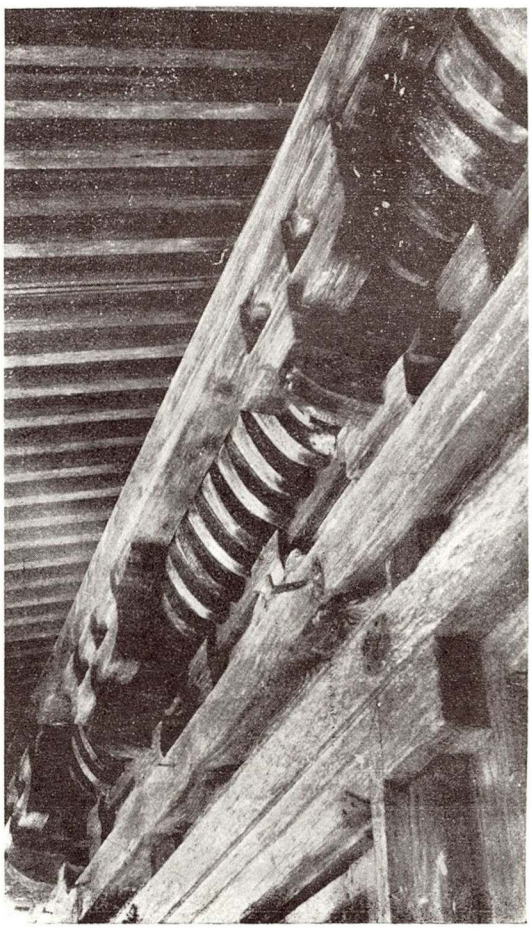


上。第三十九圖　性海寺多寶塔初重隅見上

下。第四十圖　同　軒見上

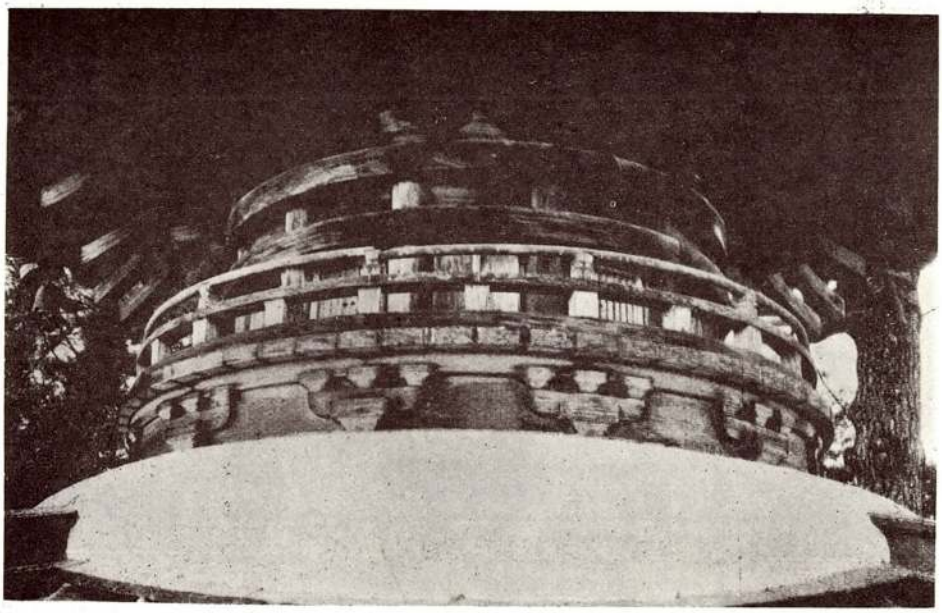
（昭和七年一月三日）

上圖は初重隅枓栱の見上げであるが、枓栱が出組の時は、隅が常にかうなるとは限らない。一手先の枓の上に直に桁がのれば、結果はずつと簡單になるのである。木鼻は割合によくできてゐる。下圖は側柱上の枓栱を見せたもので、これ等が總て和樣であることがよく判る（上へ）



（下より）であらう。

此等の寫眞では見えぬが、四方の出入口上の枓栱間には、一個づつの蟇股がある。脚の先が若葉になつて居り內に牡丹を入れてあるが、牡丹は扁平で、どういふものか中央の雄蘂のところだけが少しく引込んでゐる。最初は其部分だけ古くなつておち込んだのであらうと思つたが、何れもさうなつてゐるから、態とらしい。さうして少し蟇股の背が不足なので、上の方に飛び上つてゐる。即ち下はついてゐないので、構造的意義が全く失はれてしまつた一つの好例とすることができるのである。



第四十一圖　性海寺多寶塔上層一部　（昭和七年一月三日）

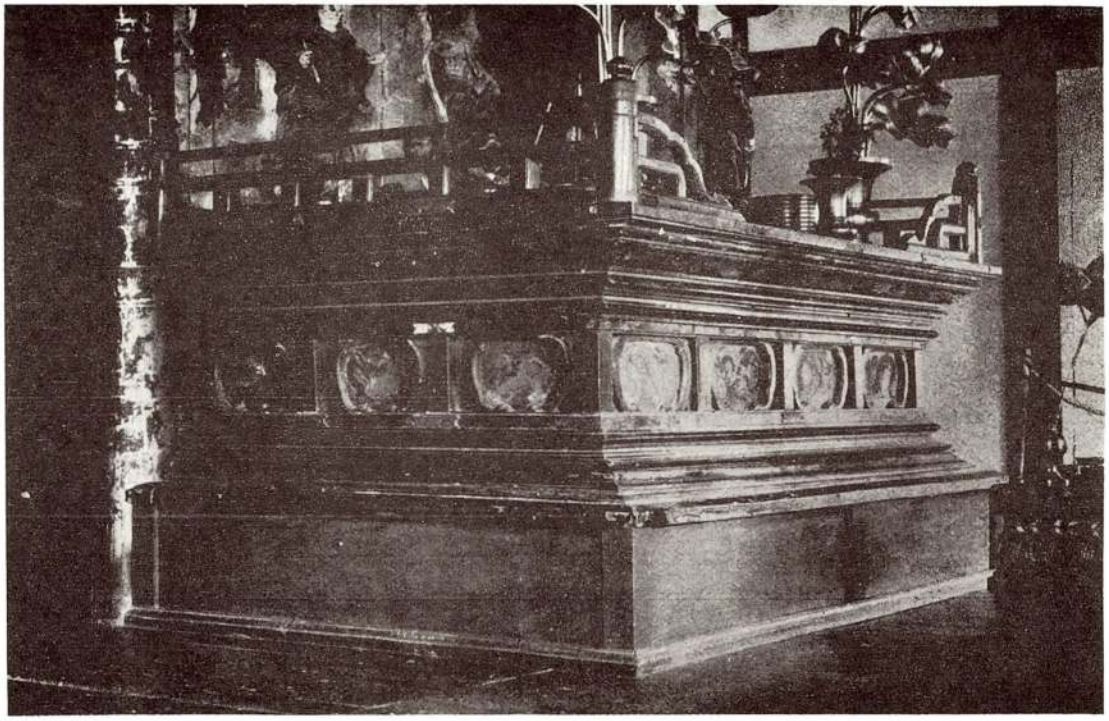
多寶塔の下層は四角な事は改めて述べる迄もないが，其周圍の椽に勾欄がある時とない時とある。あつても椽が四角だから勾欄も當然夫れに沿ひ四角に廻つてゐる。

然るに上層の軸部は圓形に柱がたつてゐるから，其周圍を廻つてゐる椽も圓い，從て勾欄も圓く，從て始めと終りがない。無始無終の勾欄は，夫れが圓く設けられた時に限る。

圓形の勾欄は多寶塔の上層に限つた事はない。圓い平面の建物に設けられた時は圓い。例へば單層の塔（第四十二・四十四・四十五・四十六圖）や經藏內輪藏の下部（一例は高野山奥院の夫れ。慶長四年）等にあるが，元來圓い平面の建物がさう澤山はないのだから，自然圓い勾欄も例が少ないことになつてくるのである。

枓栱は腰組のも柱の上のも，共に唐樣であるが，ただ夫れだけのことで，尾垂の形及び上層の垂の配列は依然として和樣である。ただ飛椽隅木の先を少しく下に曲げたところに其影響が現はれてゐる（寫眞の左右兩端中央部）。尙ほ夫れから長押も用ひてあるから，和樣の勝つた唐樣といふことが此寫眞からでも判るであらう。

以前上層枓栱間に佛像が一軀づつおいてあつたといふ事を土地の人からきいたので，充分に調べてみたが，どうも何らか間違らしく，其樣な形跡は見出せなかつた。



第四十二圖　性海寺本堂須彌壇（昭和七年一月三日）

性海寺では多寶塔一基だけが國寶に指定されて居り，其他のものは何でもないが，此須彌壇等は，稀れにみる珍らしい作品といふことができるのである。尤も此圖でみる如く下につぎたしの臺があるから，いつか大修理といふよりは，寧ろ大改造に出あつたといふことが直に判るが，幸ひなことにそれは單に臺をしただけで，壇其物には餘り手がついてゐない。

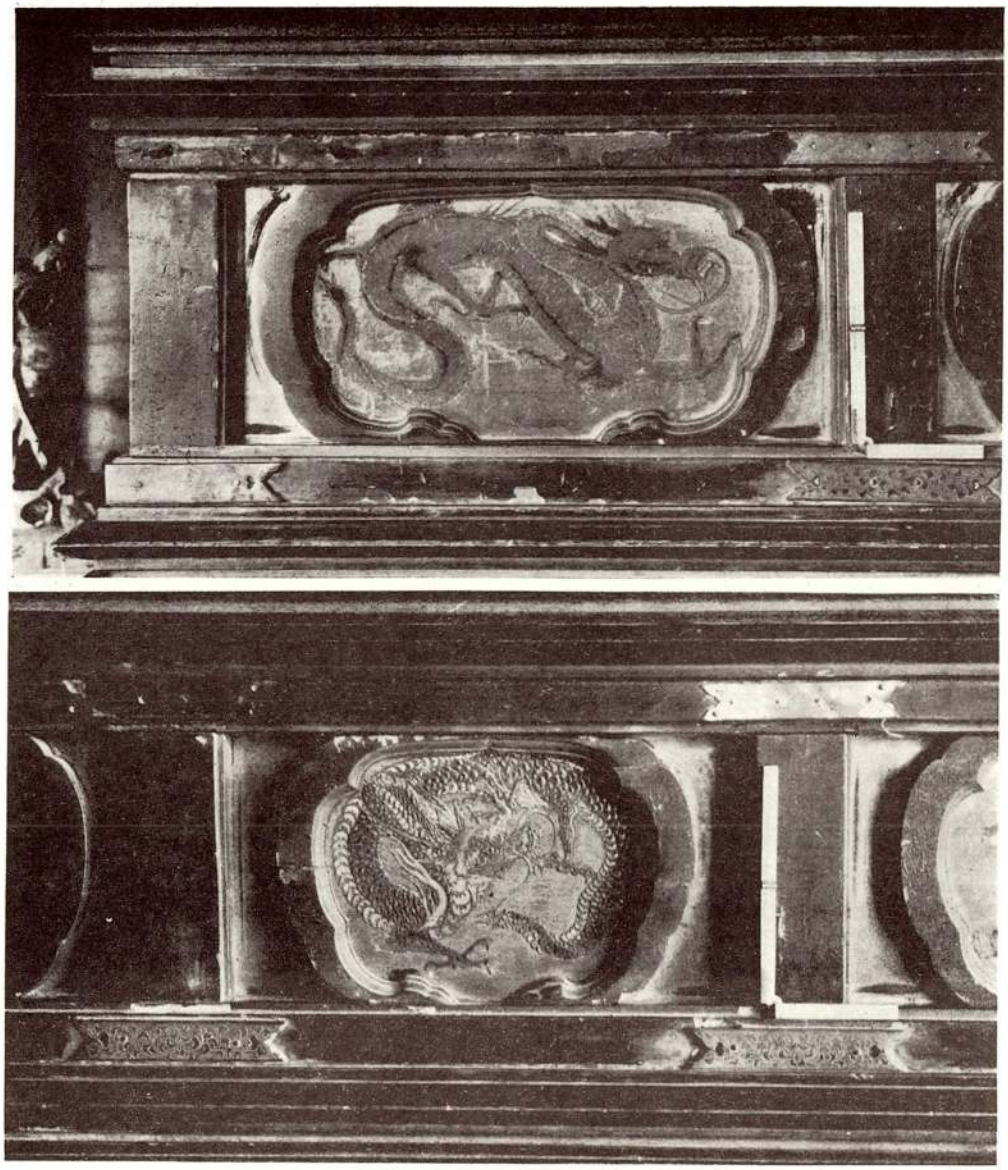
別段說明する迄のこともなく，寫眞でみる樣に上下に殆んど同じ繰形が反對についで居り，其間にはある間隔に束をたて，正面を四，側面を三に等分し，各區劃內に格狹間を入れてある。所が正面の各間と側面の各間とは，其間隔が異なり，前者の方が後者より少しく廣い。さうして其格狹間も，次頁の圖に明らかな樣に，木を刻んで其形にして嵌入してあるので，斯の如きは未だ他に私は見たことがない。

但し其內部に入れてある龍は何れも新しく，後世になつてから描いたものらしい。

勾欄も親柱は擬寶珠で，通栢は普通の枡になつてゐるが，正面の中央は第四十五圖でみる如く，架木の先きが蕨手ではないが，蟇股の脚の如くなり，間があいてゐるから，謂はゆる唐樣といへる。

*　　*　　*　　*　　*

要するに此は和樣唐樣折衷須彌壇で，鎌倉時代に決して珍らしくない形式のものである。



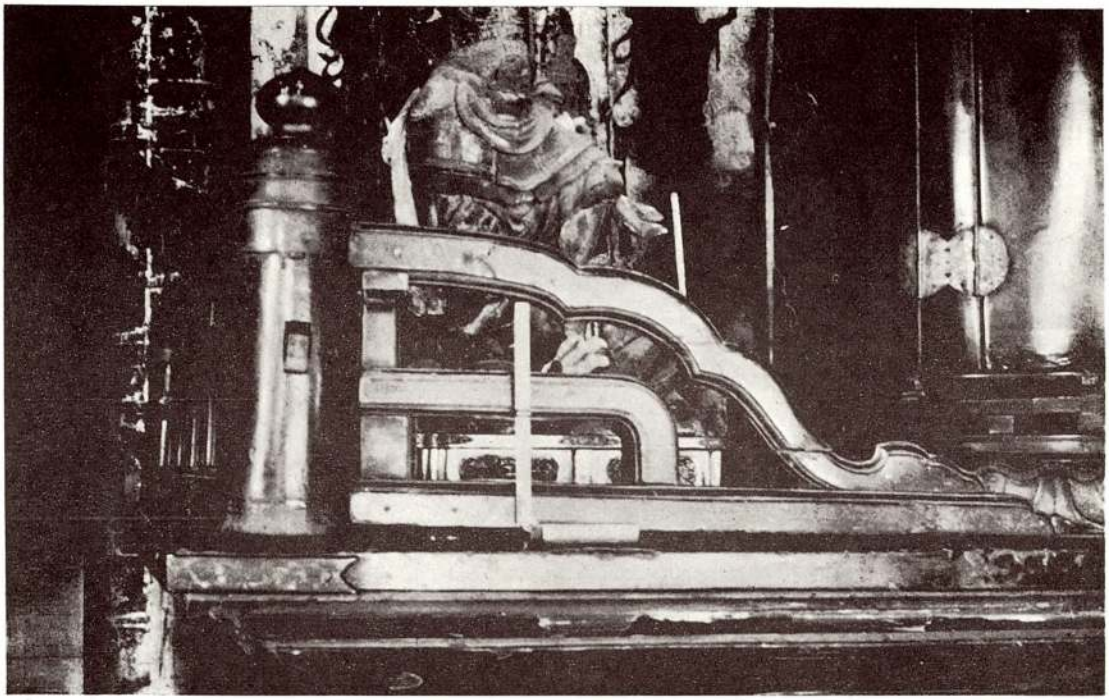
上。第四十三圖　同　正面格狹間詳細（昭和七年二月二十日）

下。第四十四圖　同　側面格狹間詳細　（同）

（上下圖共東に沿ひて立てるは曲尺の約五寸（六吋））

前圖にも小さいながら見えてゐるが，此格狹間は全く特殊で，別の木を格狹間形に刻んで，羽目板の前にくつつけた様になつてゐる。丁度蟇股を縦に中央から二分し，脚を反對にくつつけた様であるから面白い。さうして向ひ合つた脚の先等は，蟇股の夫れと全く差がないといへる。

惜しいことに飾金具に後補のものがある。また格狹間内の龍は新しい。夫れ等を除いては當初のままで，鎌倉のものとしては殆んど類例があるまい。



第四十五圖　性海寺本堂須彌壇勾欄及親柱　（昭和七年一月三日）

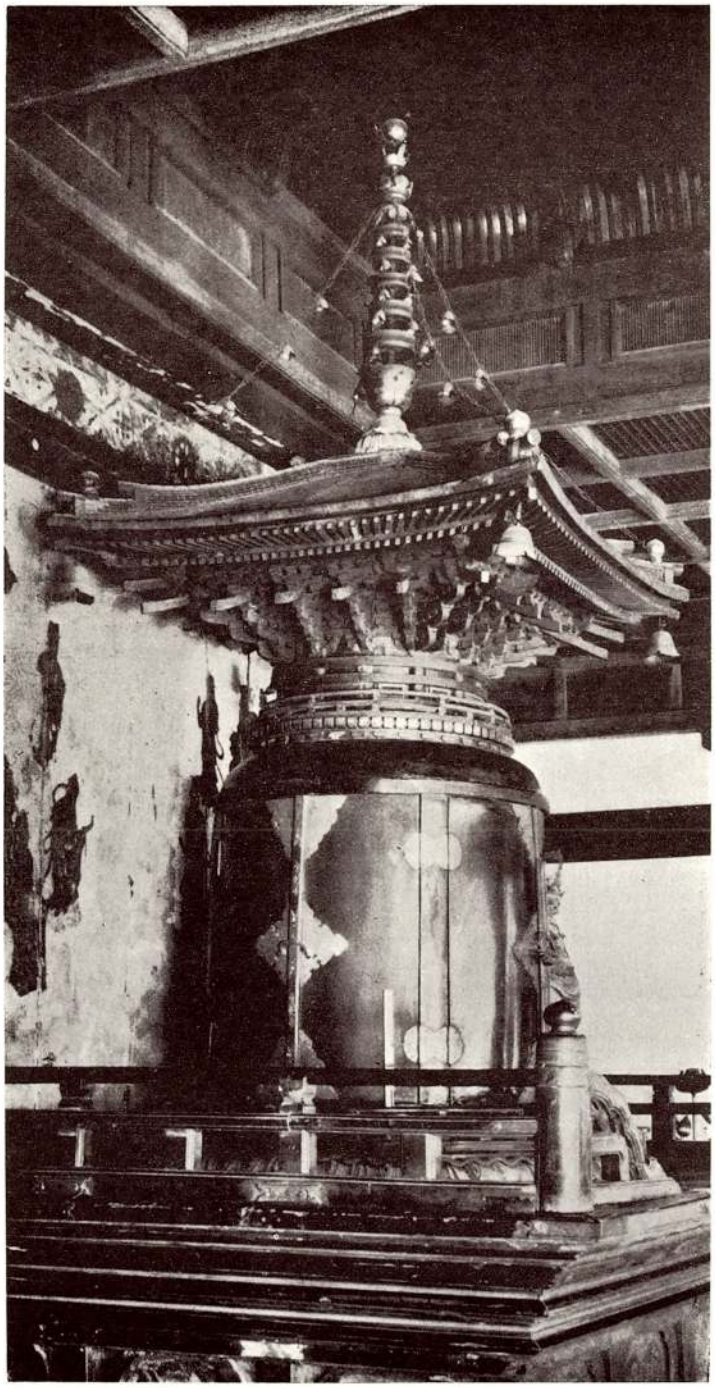
（前に立てるは曲尺の約五寸（六吋））

既に述べた様に須彌壇が折衷だから，勾欄も亦さうしたやうである。親柱は純和様とし，鎌倉に最も普通な様式の「擬寶珠」にして，さうして其下の節の間に，一面に唐草を毛彫にしたところの，頗る入念の作品で，恰好亦申分はない。

「擬寶珠」といふ名稱は，露西亞建築の屋根の如き葱花形をしたものの様な形で，小型のものにつけた名らしい。同じ様な形をしてゐても，塔婆の相輪の最上部や寶形造の建築の屋根の最上部にのれる此種のものは，「擬」の字をとつて了つて，ただ「寶珠」と呼んである。さうすると勾欄等に用ひた小型のは，屋根の上などにある少しく大型のをまがひといつたやうな意味らしくなる。此を語呂からであらうが「金帽子」又は「木帽子」等といつた時もある。

どこかで「銀帽子」といふのを見たやうだが，今思ひだせない。

架木は四角で脚の先蟇股と同じく，平桁を下に直角に曲げたのは最も珍らしく，地覆の先きに簡單な繰型をつけ，特殊勾欄を形造つてゐる　架木を四角にした結果であらうが，楯束の桟が隨分背が低くなり薄つぺらになり，甚だ拙いものになつて了つてゐる。



第四十六圖　性海寺本堂須彌壇上厨子（單層寶塔）　（下に立てるは曲尺の一尺・昭和七年二月二十日）

性海寺本堂をただ外部からみたゞけでは、まるで問題にならぬ。だから大概の人は多寶塔のあたりから瞥見しただけで輕蔑して歸つて了ふのだらう。無理もないことである。けれどもそれはいけない。一度は内部をみる事が必要である。内部でも須彌壇・厨子・其上の天井あたりは洵に大したもの。鎌倉氣分が横溢してゐる。【性海寺代譜】といふ記錄の中に、「古堂者建長四年所建也」といふ文句がある。遽に信ずることはできぬかも知れぬが、それにしても鎌倉は動くまい。折上小組格天井、其下の首横連子、何れもその時のものと考へられる。たゞ厨子の扉に打つてある散八双等の飾金具は、どうも江戸時代に入つてのものらしく思はれる。來迎柱間の壁畫に描かれた二十五菩薩來迎圖も亦頗る傑作である。

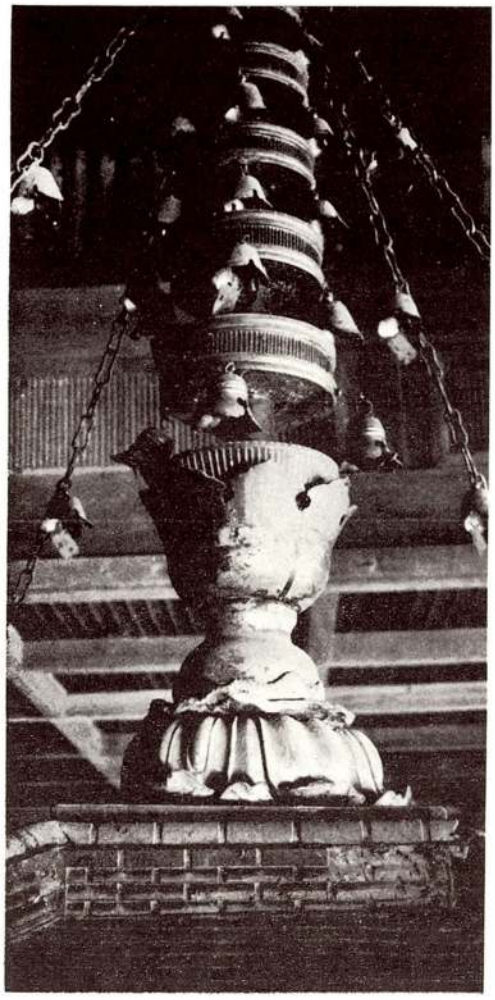
上。第四十七圖　性海寺本堂寶塔相輪

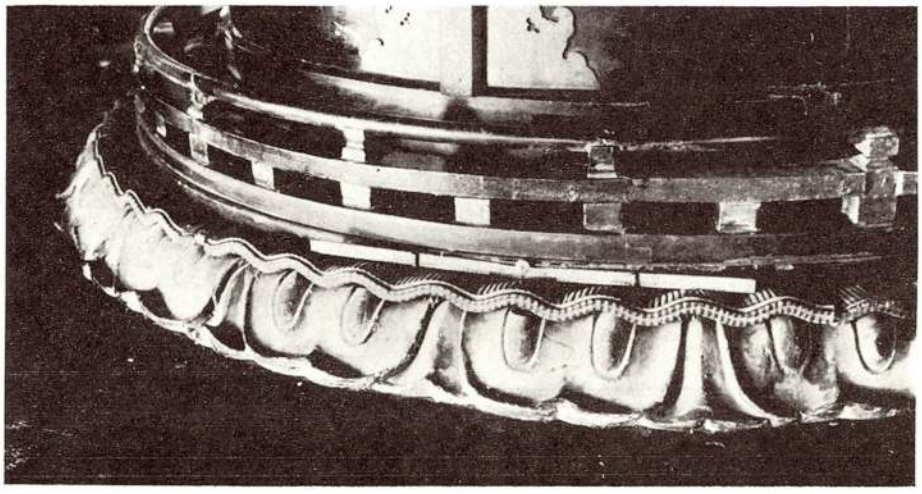
下。第四十八圖　同　臺座

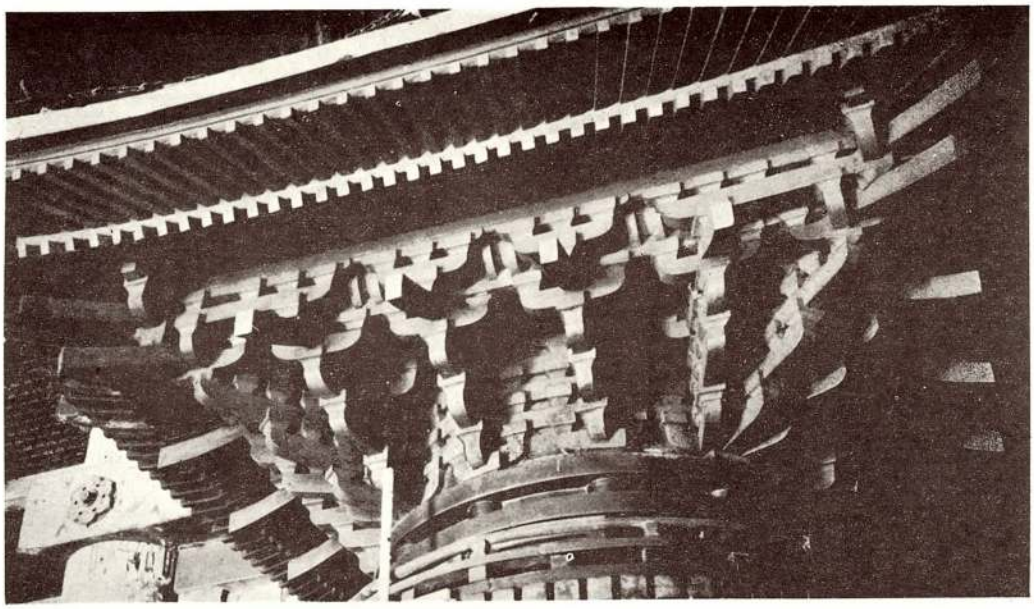
（昭和七年二月二十日）

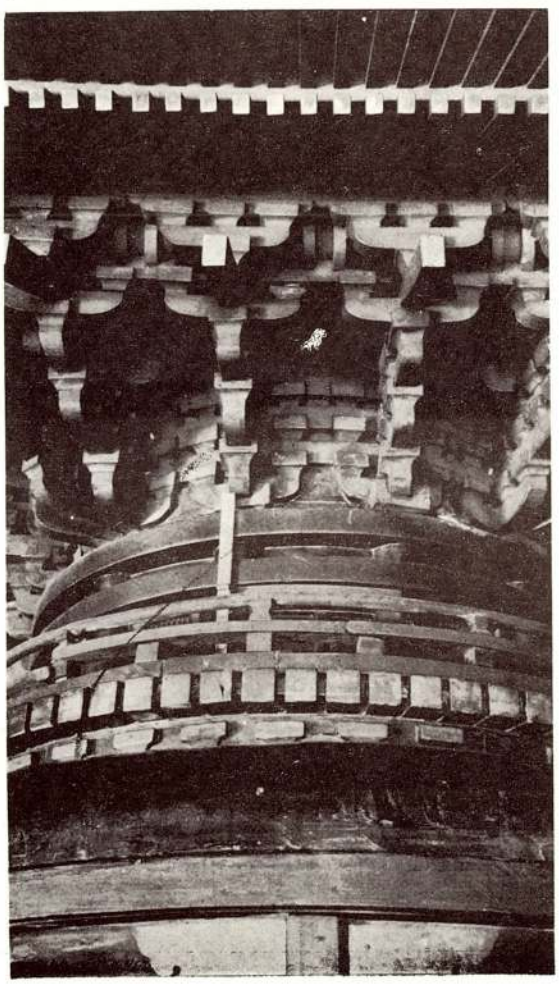
（上に平たくあるは曲尺の約一尺（一呎）・同）

上圖に於いて相輪下部がまことに面白くできてゐる。露盤は蓮花、伏鉢は蓮葉より成り、請花に雄蕊まで添へてあるところ、この寫眞でよく判るであらう。下圖は臺座で、平安鎌倉のある種の須彌壇の如く、また外國にある塔婆の如く、勿論我國のある塔婆の如く、下に蓮花があり、其上に雄蕊を浪形に並べてある。蓮座の色は綠、其上に圓形に勾欄を廻らす。其形はなはだよろし。









上。第四十九圖　同　軒廻（椽上に立てるは曲尺の約五寸（六吋））

下。第五十圖　同　枓栱詳細（同）

單層でも重層でも、とにかく圓い平面に四角な屋根をかけてある時は、枓栱は常に放射形に置かれる。此場合左右へだしてはお互にぶつかるから、自然前の方へばかりだす。この考をとり入れたのが興福寺北圓堂である、と考へることができる。

椽葛を受けるため、饅頭型の上に一つづつ枓を並べたのが目立つ。枓栱も尾垂も支輪も和樣であるが、隅木は唐樣とし、垂は扉にしてある。

（兩圖共昭和七年二月二十日）

上。第五十一圖　萬德寺塔婆　其一
下。第五十二圖　同　其二

（昭和七年一月三日）

此で多寶塔は三つ目だから、もう澤山だといふかも知れぬが、終りまでにはもう二つでてくる。事實此種の塔はまことに形がいいから、私等はいくつあつてもいいと思ふ。江戸時代のでも、他の層塔に比べて、此種は形が遙によろしい。日本全國の多寶塔を全部國寶にしたい様な氣がしてゐる。

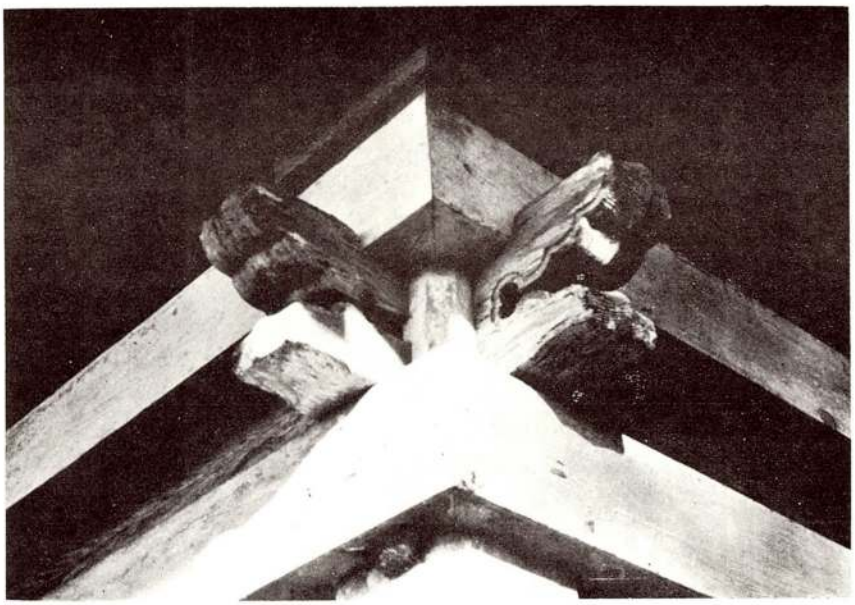
此塔は最近の修理を經てゐる。形は中中（下へ）





（上より）よろしい。福壽院のよりも性海寺のよりもよろしい。但し此塔に於いては、出入口が正面中の間一個所である事と、あとはすべて柱間に胴貫が一本入つてゐるだけで、連子窓も何もなく、板壁になつてゐる事とが可なり目立つ。

「德治二年十月十七日建塔　元祿八年修繕」と記錄にあるが、德治まではむつかしい。下層方柱方五寸二分、面見は七分、比例$\frac{1}{74}$。割合に面が大きい。



第五十三圖　萬德寺塔婆初重隅木鼻（昭和七年一月三日）

堂塔の隅は，木鼻がでてゐる場合は，殆んど總てこの様な取扱がしてある。例へば第二十九圖•三十九圖•六十七圖及百〇八圖の如くである。ただ木鼻が臺輪と長押との間に狹まれてゐるか，或はそこにいくらか餘裕があるか，又は臺輪が割合に厚く隅で「留」にしてあるか，臺輪が薄く先端が合缺きになつて直角に交り，一種の繰形に終つてゐるか，等によりて多少外觀に相違があるだけの事である。

此木鼻は第三十九圖に揭げた性海寺のと殆んど同じである。木鼻のみではない．長押と臺輪とに狹まれてゐるところも，軒に蛇腹枝輪のある所も全く同じである。時代が略ぼ似てゐることは，單にこの一點のみから觀察しても，容易に了解できる事と思ふ。

性海寺のも此も，共に天竺様のグリグリの木鼻から變化してきたものであるが，知立神社のは（第百〇九圖）唐様の木鼻がもとである。どうでもいい大した事件でもないが，少しばかり興味のあることである。前二者は形が可なりよろしいが，後者は餘り前の方に飛びだしてゐて少し長過る。

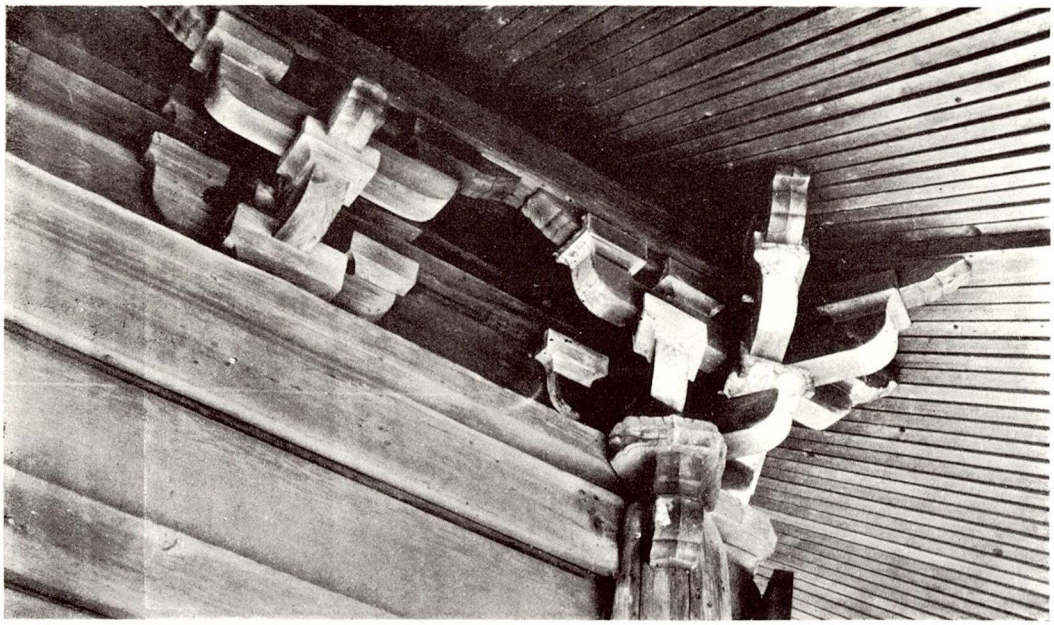


第五十四圖　長光寺地藏堂（昭和七年一月三日）

六角堂で外陣は吹き放しになつてゐる。外陣の柱は圓く，上は三枡で間は間枡束，一邊が二間づつ。內外陣境の柱も圓く，枡栱は出組の詰組なること次頁上圖の如し。さうして外陣は化粧屋根裏で，總て扇垂になつてゐる。中中美しい一種の珍らしい「ペリプテラル•テンプル」であるが，ただ屋根が全部後補で，棧瓦葺で，露盤と降棟の雁振瓦と獅子口とが氣に入らない。外陣の外に椽があり，擬寶珠勾欄を廻らしてゐるところは甚だよろしい。

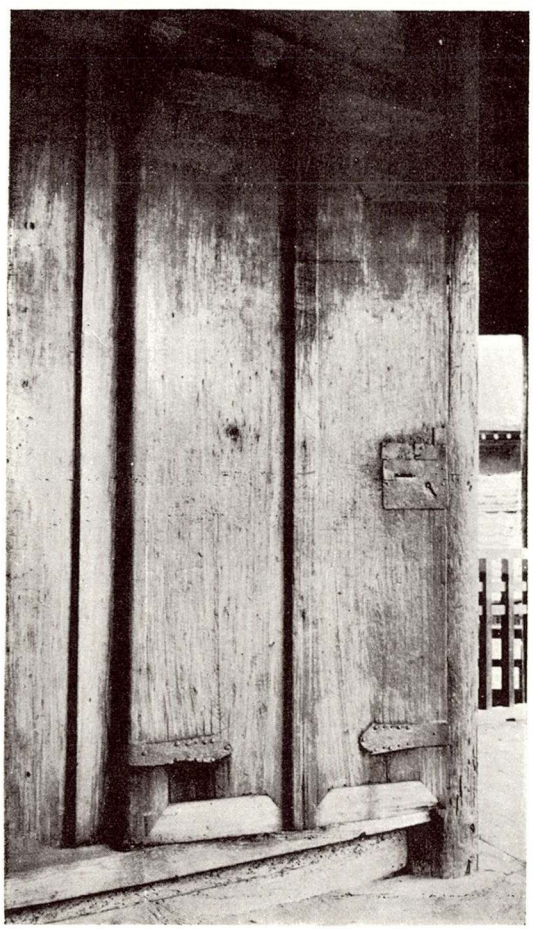
大正十四年四月，私は初めて福島縣の會津市へ行き，あの邊の國寶建築をみて歩いたとき，河沼郡日橋村の地藏，通稱「藤倉の二階堂」を見學したが，あれが建物の周圍に柱が廻つてゐて，たしかにこれも「ペリプテラル•テンプル」であたので，大分いい氣持になつた事をよく記憶してゐるが，あれといひこれといひ，澤山の柱が周圍に並んでゐるのはまことに美しいものである。

相變らず下の石壇が玉石を石垣積にしてあるのが氣になる。福壽院塔婆と妙興寺の鐘樓とこれで三つ。これも亦地方色の一つであらうが，こんなのはよくない。何れも後の仕事と思ふ。



上。第五十五圖　同　枡栱詳細　（昭和七年一月三日）
下。第五十六圖　同　片開板唐戸　（同）

上圖に於いて柱上部・枡栱及上の扇樞に注意せよ　隅に於いては、頭貫と同じ方向にでてきた肘木及其上の枓を菱形にしてあるが、其上のは普通の形である。下の枓と上の枓とは中心が一致してゐないが、それでゐて少しも變でない。氣がつかねばそれ迄である。下圖は板扉の一で、定木椽も八双もあるし、端喰も其左右で別にして、恰も兩開の如く見せかけ、其實片開のまことに珍らしいもので、これをみる迄この様な扉の存在を全く知らなかつた。

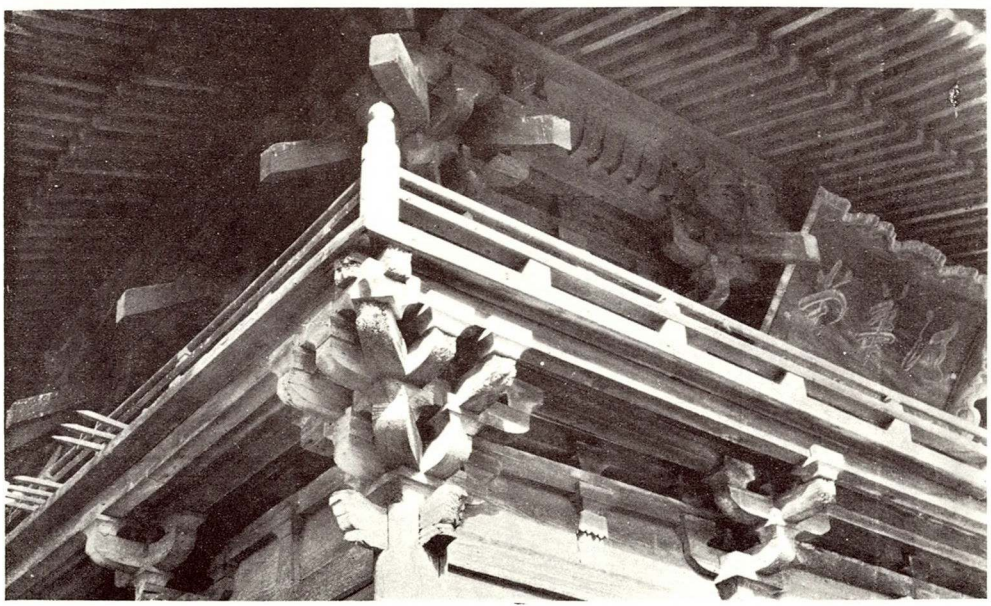


第五十七圖　本遠寺樓門正門



（昭和七年一月四日）

第五十八圖　同下層西南隅



（同月同日）

三間一戸棧瓦葺入母屋造の最も普通の形式の樓門で，上下層共枓栱二手先であるが，上層には尾棰を用ひてゐる。蟇股が少しばかり變つてゐて，正面と背面とは雲，中央のは雲に獅子の透彫，正面背面の裏は板蟇股の脚の先が若葉にしてある。これは中の間のことで，兩脇及側面は枓栱間すべて蓑束になつてゐる。柱下の礎盤の如きかひものが目立つ。これは古い樣である。

屋根大棟兩端の鯱は，「浪鯱」とでもいふのか總て浪でできてゐる。

本號執筆者紹介

（五十音順）

天沼俊一	工學博士、京都帝國大學教授「岐阜愛知濃縣下に於ける古建築解說」(上)の執筆者
落藤藤吉	工學士、東大建築學科卒業、建築技師、大阪府建築課に在勤せらる「市街地建築物法施行規則の內構造强度に關する改正條文に就いて」の執筆者
玉置豐次郎	工學士、東大建築學科卒業、地方技師、大阪府建築課に在勤せらる「市街地建築物法施行令改正に就いて」の執筆者
津田敏雄	工學士、本會監事、前大阪府建築課長、「市街地建築物法施行令並に同規則改正に就いて」の講演者
松井清之助	工學士、京大建築學科卒業、建築技師、大阪府建築課に在勤せらる「市街地建築物法施行規則改正に就いて」の執筆者
山崎英二	工學士、東大建築學科卒業、地方技師、兵庫縣建築課長、「市街地建築物法施行細則(兵庫縣)の改正に就いて」の執筆者
和田甲一	東京高等工業學校卒業、地方技師、京都府建築監督官、京都府建築工場課に在勤せらる「市街地建築物法施行細則(京都府)の改正に就いて」の執筆者

新刊紹介

コンドル博士遺作集

コンドル博士記念表彰會編　四六四倍判、絹裝和綴帖入、50枚　昭年六年十二月、非賣品

吾國洋風建築の開拓の恩人故ジョサイヤ・コンドル博士の遺作寫眞集。博士來朝明治十年以來在住實に四十四年、その間朝野に在つて腕を振はれた。載するところ皆博士の力作にて、博士の精神を窺ふべく一方に明治初期洋風の一斑が知り得る、その大半が旣に時世の推移に破毀せられたる今日、本書は眞に貴重な資料であらねばならぬ。本書は故博士記念表彰會の事業の一であつて編纂には十年を要してゐる。

埃及王統譜

德政金吾氏著　四六判、クロース裝、口繪地圖、本文198頁　昭和七年三月、價三圓、大阪カムト社發行

本協會と關係の深い德政氏がその多忙中閑を惜むで努力された近著、埃及の古代史である。聞くに本書は氏の獨創的新研究なる日本と埃及との密接な關係を論ぜられるものの緒論であると。本論の發表こそ刮目して待たれるべきものであらう。

建築文献抄錄集　1927—1931

四六倍判、背クロース裝、本文 428頁　昭和七年三月、價2.40、日本建築士會發行

海外諸雜誌に現はれた新論新說の忠實な飜譯集で、嘗て日本建築士會の雜誌に載せられたもの。建築士の職業に關する諸問題を初めとして各種の時評、計畫、意匠、裝飾及至都市計畫、交通、住居等の諸問題、更に建築管理、建築經濟其他材料、構造法、設備、施行に關する問題に及ぶ。極めて時宜に適するものであつて、獨り建築專門家にとつて貴重な資料なるのみならず、廣く建築愛好者に對しても興味あるものが尠くないであらう。（高橋）

窓

ローレンス・コーチヤ
アルバート・フレエ



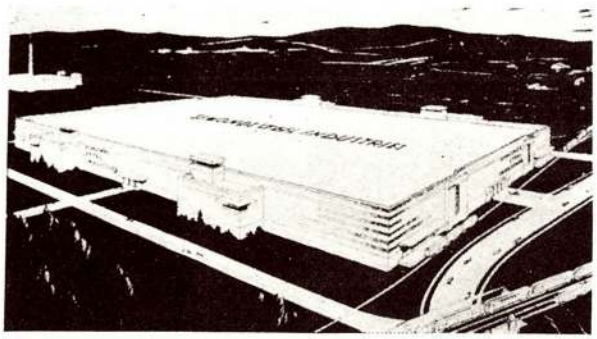
部屋は同一階に擴がつてゐるから、窓はそれに從つて水平に揃へる樣意匠すべきである。それは此のデーリー•ニユース•ビルの夜景の寫眞で明瞭になるであらう。正常な水平の動きが垂直の帶で妨げられてゐる、この種の垂直線は鐵骨構造で必ずしも必要としないものである。

窓の大きさや格好は必要なだけの日光を取り入れるに充分なものにすべきであつて、建物の全體の格好からばかりで定められるべきものではない。窓の本來の目的は建物の內部への採光と通風とではあるが、それと同時に室からの眺めの爲めでもある。それには窓面の竪子や枠等は構造上必要なだけにしておきたい、なるべくなら無い方が宜い。

醫者や照明學者は日光の價値に就て斷へず注意を喚起して居る。『しかし日光は現實に如何に作用するか、又如何にその利益が實際上にあるかは、吾々はこれから研究にとりかゝらうとするのである。』(Proceedings of the American Society of Civil Engineers, May, 1925, pp. 800-802.) 首府生命保險會社の調査報告書によると

四千萬人の記錄から死亡に關する統計をとつた結果、死亡率は薄暗い冬の期間は他の期間よりも斷然多い。そして最少死亡率は夏の期間である。(Regional Survey of New York and its Environs, vol VII p. 152)

窓は平等に明るい最大有効床面積を得る様に考へねばならぬ。又窓の大さや位置を決定する基をなすものはその室に要求される光線量である。この量は室の使用目的で種々異ふわけであるから、建築家はその專門學者の意見を徵して綿密な研究をせねばならぬ。顯微鏡を使ふ實驗室は、光線が反つて裝幀を害ふ圖書館の書庫等よりは遙かに多量の光線を要するは論を俟たない。普通の事務室での光度は机の上(床上三十吋)で約十呎燭光で充分である。經驗で解るが『見ることは明さが增む程進む。明るければ物を認知する速さ及正確さが增し、且目の疲勞も減ずる。』(Industrial Daylighting, p. 5.)



窓無建築 (目下工事中)、人工照明で一定不變に明くする試みである。無論機械的に換氣する。唯人工の諸狀態が自然のと等しいか否かゞ殘された問題である。

照明專門家の最近の意見によると、四周の壁を全部硝子にした部屋は、小さな一つの窓の部屋よりも、執務能率は上り目を疲らすこともない。即ち窓硝子が大きいほど執務狀態がよくなるといふのである。これは普通吾々も日々の經驗で證明されることである。三方打ち開いたポーチで物を讀むでも目を疲らすとは殆んどないが、薄暗い壁の而も小さい窓の部屋でタイプライターを打つたり、物を讀むだりするのは目の緊張を要すること甚しい。吾々は先づ部屋の內部を著しく明るい所や殊に暗い部分のない平等の明るさにするのが必要である。照明學者間の規則によると「建物內部の最も明い所は同一建物內の最も暗い所の明さの三倍以上に超えてはならない。」

明るい程よいといふても窓硝子面積を極度にまで擴げると、こゝに他の重大な問題に遭遇して來る。それは冬期建物內部の熱がその廣い硝子面から逃避することゝ、夏期外部の熱氣と、強い光線が這入つて來るといふこの二つである。冬の問題は、既に病院、溫室、工場等で解決されてゐる様に放熱器を增して調節すると左程困難な問題でもない。困るのは寧ろ夏期の溫度調節である。がこれも磨いた金屬板の小翼日除を使へば直射日光を遮り、而も通風と光線を得ることが出來る。普通の日除を使つても或る程度有効である。又人工換氣法でも、自然換氣法でも宜いから室內の空氣循還をよくすれば、部屋の溫度を下げ得る。

窓設計照査表

大さと形は必要な光線量で定められる
- 最大有効面積を得る様に
- 枠や竪子は出來るだけ小さく、少なく
- 建物の上階よりも下階になる程窓面積を多く
- 窓面積は少なくとも床面積の三〇%以上

充分な執務狀態を保つには室の奥行は窓の高さの二倍を越へぬこと

窓は成るべく高く天井に接して

日除で光線の調節をなし得る様な構造

夏期熱の調節設備

操作の簡單

掃除の便宜な構造

人工換氣が止まつた場合の換氣裝置

窓を開いた時障碍物を妨げられぬこと

盜風のない様に

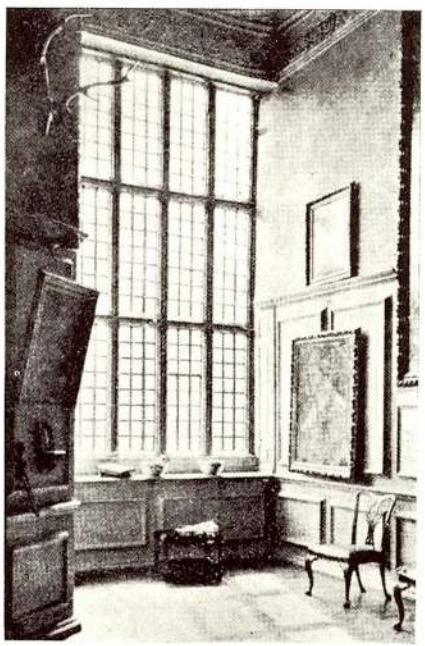
窓硝子に歪が來ぬ様に

三平方尺以上の天井採光、印刷工場、製造工場の總ての窓はワイヤー入硝子に

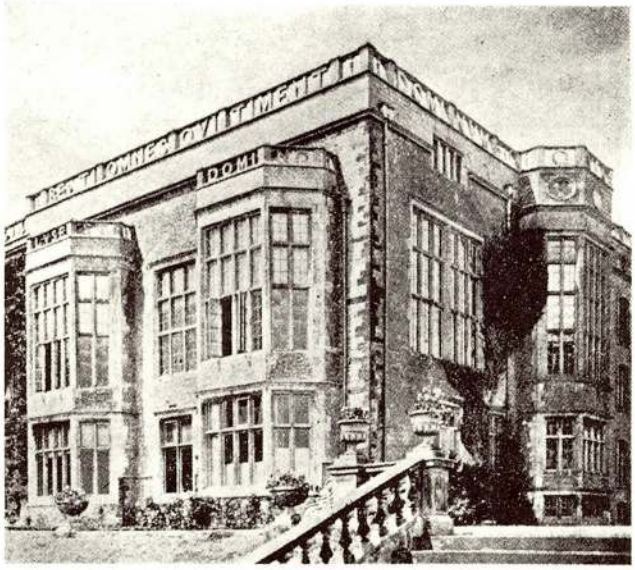
十二平方尺を越ゆるものは厚板硝子を

工場では屢々破損取換の起こる爲め硝子面を小さく仕切る

英國及北歐の窓の特徴 はその時代と目的とに適應する大なものである。高緯度の土地では光線量が少いから窓は思ひ切つて大きくする必要がある。又竪子は至つて細い。

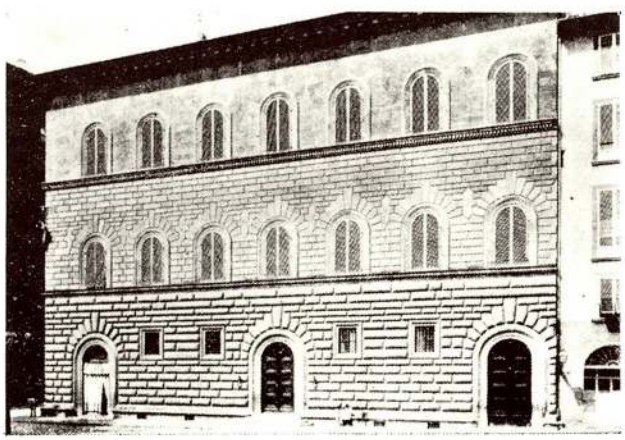


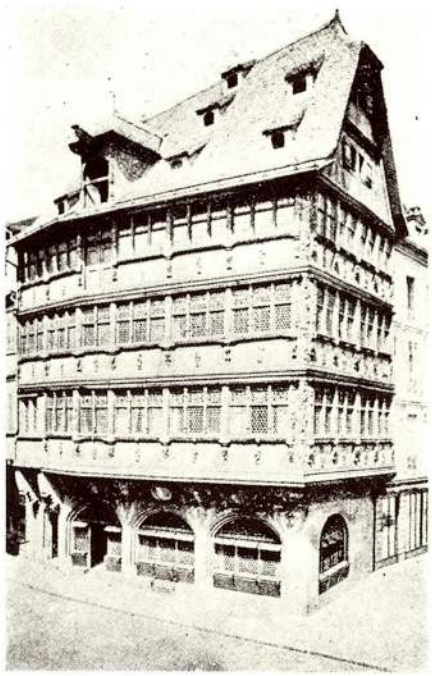
㊧ サンマーセット，ネツトルコンム・コートの談話室



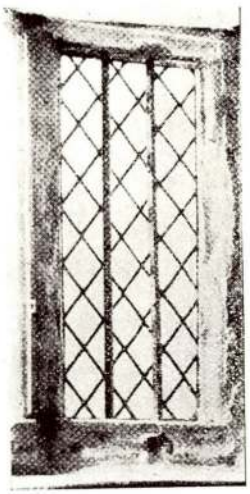
㊨ 英國 ノーサンプトンシヤイヤー，アツシュバイ城

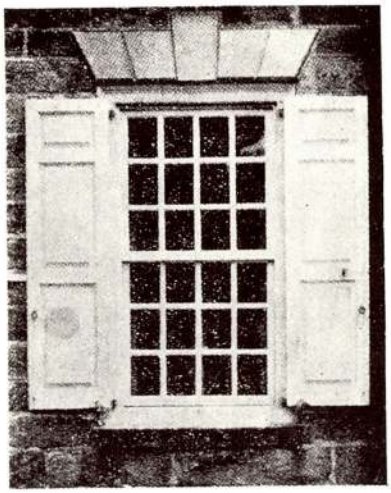
㊧ **伊太利に於ける典型的な家。** 太陽光線の激しい地方であるから餘り強い光と熱とを避ける樣に窓は小く、間隔も廣い。これでも部屋は充分明い。

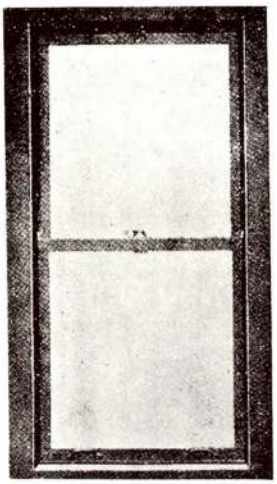




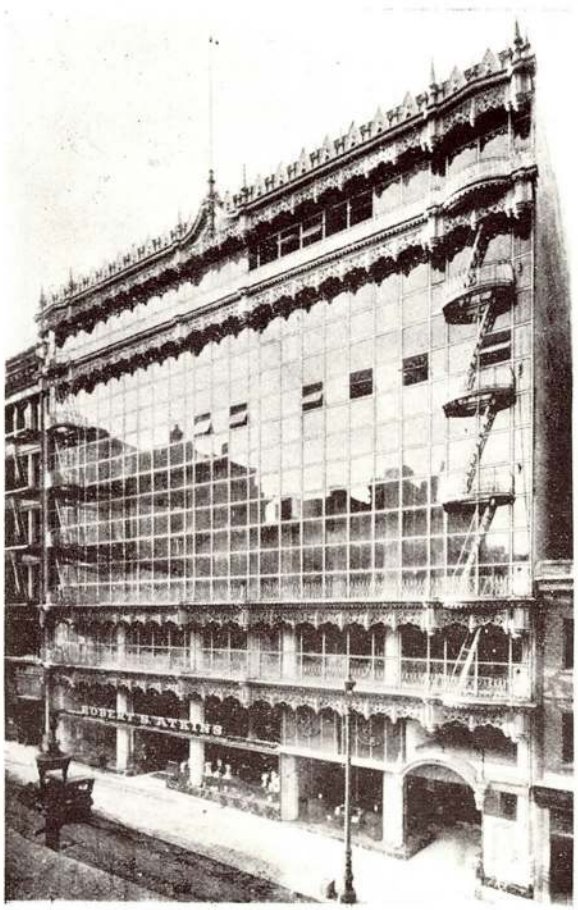
㊨ **各階に連續窓のある中世典型的な多層建物。** 此種の採光方法は甚だ有效であり且仕事場にも居室にも適應する。ストラースブルグ、カンメルツエル家。





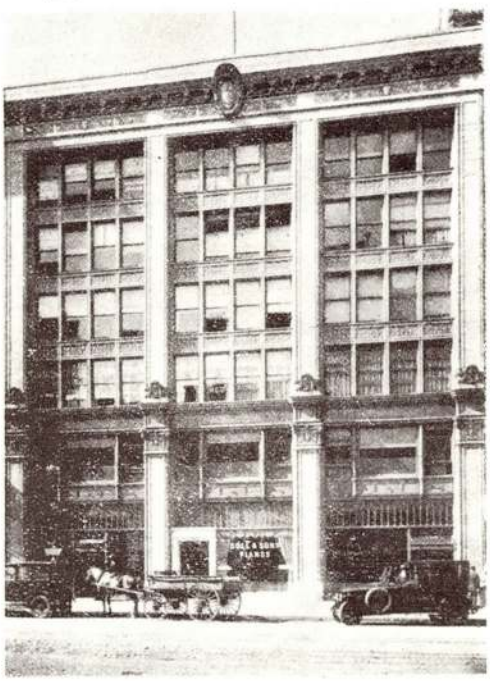


㊀ 各時代を通じて窓面の割方は硝子の製作の大さで定められたので、美的目的では決して無かつた。古い英蘭土の田舎家アメリカのコロニアルの住宅の窓は皆美はしい。だがあれは細く割られてあるからでもなく、一般の階調の爲めでもない、唯合理的であり獨創的であるからである。現今は大硝子板の製作が自由であり又光の方からも有效で其上經濟的でもあるので、ショーウインド、事務所、學校、住宅皆板面の大いのを使ふ。枠や竪子は最少限度まで巾狹くなつて來た。



㊁ 總硝子。物を陳列する爲めの建物といふのが一見して知れる。ゴシツク式の垂れ飾があるこれは目的に添はぬ。然し內部採用法には優れた解決をしてゐる。桑港、ハリヂイ・ビル、1918。

㊂ 古典的樣式で硝子面積を極大にした場合。建物の表面に附した裝飾部分は利用を增さずに費用のみ嵩むからこの遣方は最善とはいひ得ない。紐育ドル・エンド・サンス、1910。





⇧ 鐵格子窓は ルネイサンス時代から發達した。此の手法は仲々面白い。一見これは支壁構造の様に見へるが實は壁は鐵骨架構で支持されてゐる。紐育、ウオール街120。

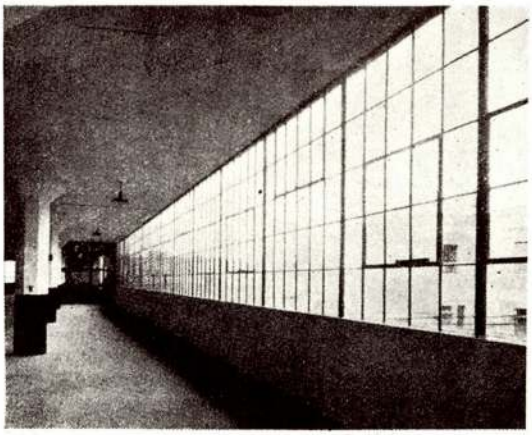


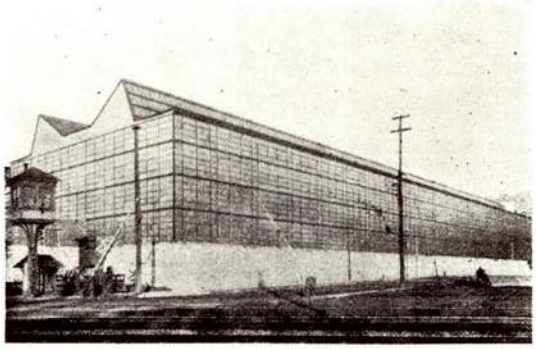
⇧ 或る事務室の内部。 薄暗い壁と間隔のある窓からの限られた光線の型を示すものである。窓からの距離と共に明さが急激に減ずるのに注目せよ明い後の例と比較對稱されんことを望む。



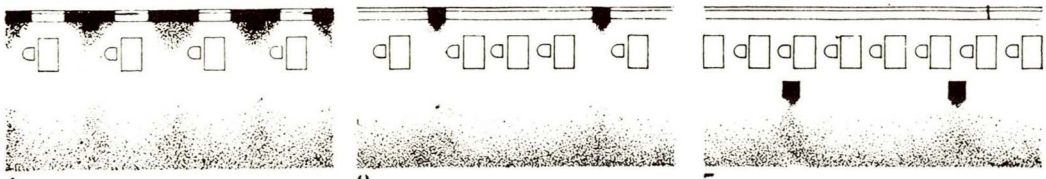
貸アパートの日光狀態。大衆は日光とを熱望する。
アパートでも事務所でも明るければ借賃は高い。建築家はこの要求をうまく導くべきである。

⇧ 最大極度の採光は連續窓からである。
此は跳出梁床構造でやると出來る。デトロイトのグラハム・ページ・サービス・ビル



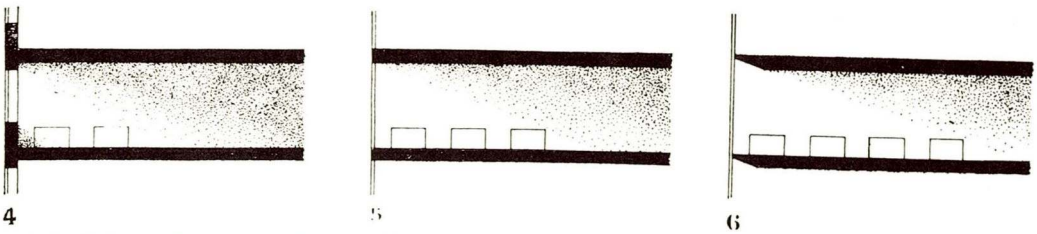


⇧ 工場。 一般的に云つて、建築樣式制限から自由である。明い工作場を作る爲に壁は言葉通りの硝子の壁になる。從來の例を見ると大抵の工場は事務所建築やアパート等より採光狀態は一般に可良である。



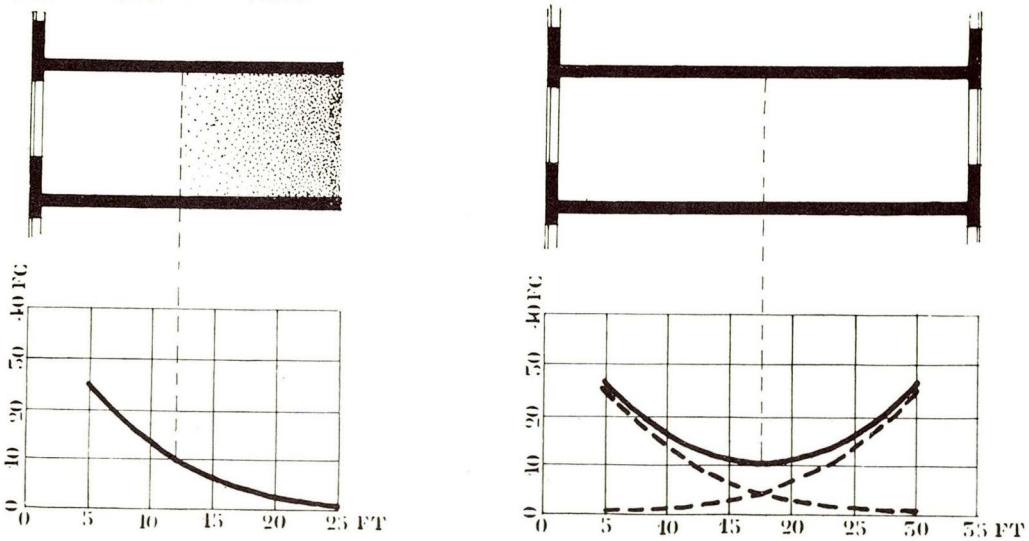
1　2　3

事務室の採光方法の平面圖　(1) 貧弱な窓の配例　(2) 外壁は柱のみ。採光面積は增した　(3) 柱を壁より引込め外壁を跳出梁床構造にする最大採光の例、



4　5　6

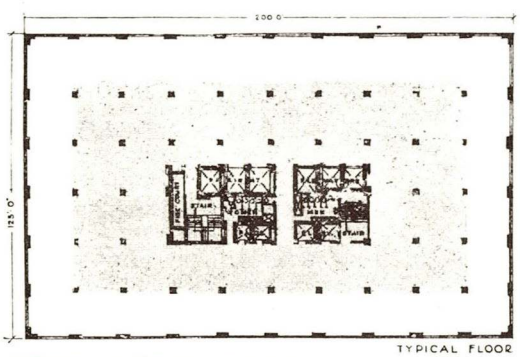
光線が達する程度を示す斷面圖　(4) 普通の窓の場合　(5) 床から天井まで硝子とせる場合　(6) 跳出梁構造で床の尖端を細めた執務室



窓より差し込む光線量

竪の窓は窓高の殆んど二倍の距離まで明い。

相對する兩面か採光した部屋は各壁面から窓高の三倍の所まで明い。



高層建築の標準平面　日光到達面積を示す，斜線部は人工照明を要する部分である。

所要光線量（最小限度吸燭光單位）

	15年前	8年前	現今
(1) アイル・昇降器、倉庫	0.5～1	3～6	5 以上
(2) 寺院、集會室	1～3	2～4	3～8
(3) 百貨店	3～7	7～10	10 以上
(4) 飾窓	5～40	10～70	15 以上
(5) 粗大物工場	2～4	3～6	6 以上
(6) 事務室	3～8	5～12	10 以上
(7) 精密物工場	4～8	6～12	10 以上
(8) 一般製圖室	5～10	10～15	15 以上

(Industrial Daylighting, p. 5.)

しかし筆を持つて、縦なり横なりの筋を引つぱつてゐると、無念無想といふ程でもないが、とにかく邪念から解放されることは事實だ

この『書』といふ奴は、單なる文字ではない。昔から一つの藝術として觀賞され來つてゐるだけに一點一劃と構成にも、藝術製作と同じ苦心を拂はないと氣に入るのが出來ないわけだが、色々工夫してやつてゐると、自分が建築屋だからかも知れないが、全く建築のスタデイーでも乃至はフリーデザインでもやつてゐる様な氣持で、色々な感じの建築が出來上る。

千字文の一字一字が、メンデルゾーンになつたり、ベーレンスになつたり、グロピウスになつたりして獨りで嬉しくなることがある。

こんなことを考へてゐるのは僕だけかと思つたら、支那は流石に『書』の家元だけに、『書を作る屋を造るが如し』なんて既に道破してゐるから偉い

しかし毛唐の云ひ草だが『建築は凍れる音樂で音樂は流るゝ建築だ』などと、音樂と建築との共通を感ずるのさへあるんだから、建築と『書』などは共通するのが當り前かも知れない。

（そ　の　二）

書幅を懸けて觀賞する。

しかし漢文の素養の貧弱な悲しさ、支那の連中のものなど殊に讀めない字がきつと二つや三つはある。ひどいのは何の詩だか何を云つてゐるのだか譯の分らないのがある。

けれどそんなものでも懸けて眺めてゐると、藝術的な興奮を覺えて來る。

丁度墨畵を觀てゐるのと通ずるものがある。たしかに『書』の技巧の中には、『畵』に通ずるものがある。或ひは『畵』の方の用墨用筆と全く共通するものがある樣だ。

支那の畵論、謝赫の六法なんかで書畵一致を說いてゐるところがあるが首肯出來る。

詩文の內容がまるで分らなくつても、字の形だけで筆者の性格なり精神なりが十分感ぜられる。

それだけで『書』の藝術は成立つわけだ。

近頃の建築家は、建築の姿を出來るだけ藝術的にしやうとして骨を折る。

これは昔の建築家でも同じことだつたと思ふが、昔の樣な所謂裝飾の厚化粧は近代人の美的感覺が承知しないからなほさら苦しむ。

建築といふものは使用目的を持つてゐる。それを滿足させなければならない。しかもそれだけでは困る。原始人ならいざ知らず美的文化人はその上藝術を要求する。

こふいふ建築を作つてゆかなければならない近代の建築家は『書』をやつて見たら如何だらう。

『書』の持つ合目的性と無目的性。

この間の微妙な關係や交涉やが建築の持つ機能と藝術との間に見付かるんではあるまいか。

世相とレコード

X　Y　生

近頃の流行意識の一つにレコードを作るといふやつがある。世界一はアメリカ人の病氣の一つであるが、警察無能、ギヤング跳梁世界一などは餘り自慢にもなるまい。建築にもいろいろのレコードがあるにはある。工期の短かいことの、坪當り工費の高いことの、安く落札したことの、故障の多かつたことの、等々々、自慢になるもあり、自慢にならぬもあり。近頃、安い工費のレコードでは事務所建築、鐵筋コンクリート造坪當り八拾圓也といふ噂があつた。但し眞疑內容の程は不明。

恐ろしい世の中になつたものではある

建築倶樂部は目下着々創立準備中らしいですが先づ談話室だけが一足先きに紙上で開かれました。會員の皆樣の談話室です。御暇の時に話を御寄せ願ひます。建築論結構、感想結構、協會改革案結構、社會世相感結構、ゴシップ、和歌俳句、漫畵、漫文一切大歡迎いたします。が餘り長いと他の皆樣は迷惑されますから手頃な所でストーブを圍んで茶を飮みながらの氣分のものを御願ひいたします。

（編輯子）

談　話　室

洗面器と輕便レンヂ

叙　汀　生

家はボロ借家である。無論柱は曲つてゐる敷居鴨居は歪んでゐる建具は圓滑に動かない、所々雨漏りがする、襖は破れてゐる、塗りはハゲてゐる、疊はブカブカで所々腸を出してゐる。書けば際限がない、要するにボロ借家である。それが私の住い家で、私は影薄い乍ら一個の建築家である。仕事として人様の家を建てさせて戴いて細々とした煙を上げて生活してゐる。建てる人様の家は皆立派だ、或る意味で理想的ともいへよう。紙の上で鉛筆の下で、線が交錯してゐるが、その設計圖に私の心は、その中で生活してゐる、寢起きする、食事をする、客との應待もする、讀書もする、私は建築家だからそれでその空想で滿足して生活して行ける。だが私の家族は即ち家内、子供、女中は二六時中現實の弊屋生活の艱難さをなめさゝれてゐるのである。

そこで苦しい思ひで借金をした。廊下の一隅にL 69 の洗面器を取り附けることにした。貧弱ながら棚――といつても僅か五寸巾程の板一枚であるが――を渡した、石鹸やら齒楊子を置いた。家内が顏を洗ふ、子供が手を、私が頭をと、洗面器を中心の暮らしが始まる。皆の顏が嬉しさうに輝くのである。蓋し瓢を枕にして弊屋に伏して顏面をしのぐ。

次で瓦斯會社で輕便レンヂ――恐らく日本の瓦斯會社の新考案であらう、七輪と瓦斯竈とを一緒にした低い足の付いたものである、輕便といふ文字通りの倭人レンヂ――クローム鍍金した立派なものである、吾々の生活にとつては餘り立派すぎるものである、それを台所に嚴然据へた。斷然光る、家内も女中も嬉々として煮焚する。

生活は竈と洗面で全部であると誰かゞ言つたかも知れぬ、又云はなかつたかも知れないが私の宅ではレンヂと洗面器中心の生活がなごやかに始まつた。貧しいからの樂しさ。

衛生工事やは言へ――家庭和樂は洗面器を中心に、瓦斯會社は宣傳せよ――樂しい生活は輕便レンヂより……

こうして春が來た　隣の庭の櫻の花が巾三尺の私の庭に吹き込む。

風致と建築

M　N　生

これはむづかしい問題ではあるが、國立公園の設定が目前に迫り、深山幽谷、人猿稀なりとツィ先年まで旅行案内書にも記されてゐた程の名勝地までが、交通機關――殊に自動車路線の普遍化につれて、都會人にデヴユウするために湯の宿がホテルに、ステージだ、ダンスホールだ、水洗便所だと客の吸引策から新建築を起す時勢である。

石を載せた柿板葺の山の家に圍まれて、ブレーメン號の上層建築を見るやうな白堊のホテルが都歸りの庄屋どんの御子息然と誇らかに四方を威壓するといつた景色が、そこゝゝに現はれそうでならぬ。

畵龍點睛、建築を點じて風致を一だん引き立てるといふことは至難中の難事でせうが、自然と人工の調和位の考慮はもつて貰ひたいものだ。

私が見落したのか、國立公園委員の顏觸れに建築家が無かつたと思ふ。どうしたことか……

『書』と建築

石川純一郎

（そ　の　一）

僕は近頃『書』をやつてゐる。と云ふと馬鹿に立派に聞えるが、本當は中學以來殆んど持つことをしなかつた毛筆を持つてのお手習ひを復活して、寺小屋のハナタレ小僧になつたに過ぎないのだ。

「建築と社會」定價表

毎月1回1日發行

冊數	定價	郵稅
1冊	50錢	2錢
12冊	6圓	24錢

廣告掲載料金

普通	1頁	1回	15.00
普通	½頁	1回	8.00
普通（前附第1頁）	1頁	1回	45.00
普通（前附第1頁）	1頁	1回	40.00
普通（後附第1及最終頁）	1頁	1回	25.00
アート（中挿）	½頁	1回	20.00
表紙2	1頁	1回	60.00
表紙3	1頁	1回	45.00
表紙4	1頁	1回	80.00
建築事務所錄	1欄	1回	1.50
（建築關係業者案内）	1欄	1回	5.00
紹介欄	1欄	1回	0.50

御注文

御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

昭和7年4月27日印刷
昭和7年5月1日發行　（第15輯第5號）

發行・編輯
印刷人　鷹取陽
兵庫縣武庫郡今津町浦風56番地

印刷所　大阪活版所
大阪市東區內淡路町1丁目7番地

發行所　財團法人 日本建築協會
大阪市西區土佐堀通1ノ1大同ビル
電話土佐堀 4265番
振替口座大阪39975番

特約販賣店　柳々堂書店
大阪市西區京町堀羽子板橋北
電話土佐堀 2440番
振替口座大阪 22084番

禁轉載

本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

編輯後記

◇建築界不振のうちに春も逝つてしまひました邊境は未だ納まつたといへませぬが、已に曙光は明に見へて居ります、やがて諸氏皷腹の秋も近づいて參りませう。

◇本誌特輯の建築法規號は細則が出揃ひませぬ爲め可成り難産でありました。兎に角今皆樣の机上まで送り得る樣になりました。大阪の細則の解說は次號なり或は便宜の方法で發表することにいたします。

◇法則の解說說明は所謂其の道の權威者に御願しましたゝ夫々多忙の中に起稿頒つたもの、皆樣の好指導であり好參考となるは信じて疑はぬところであります。

◇特別附錄に天沼博士の玉稿を頂戴いたしました。例によつて立派なもので、先生自撮の優秀な寫眞に權威ある說明を以てせられてあります

◇建築法令集は本號と共に出版の豫定でありましたが前述の樣な理由で暫く保留されて居ります、何と申しましても他の類書と比較にならぬ程傑出したものであり加ふるに極めて廉價でありますから、初めの期待に背かず、申込は既に千部を超過いたしまして尙續々申込みがあります。尙追加注文を御待ちして居ります。

◇當協會最近出版物中「世界最新建築圖集」「日本趣味を基調とする最近建築懸賞圖集」「學校建築圖表」は皆多少の殘部がありますが、賣切れは近いことであります、御希望の向は此際至急御申込を願ひます。

◇本協會第十五週年紀念事業は準備委員で頻に調査中でありますが、その內に大出版計畫もある樣であります、目覺しい大出版こそ紀念として相應しいでしやう。

◇協會も五月七日に朝日ビルに移轉します。建築クラブもいよいよ創立されませう。協會の活動も本調子になつたと言へませう。

轉勤轉居

會員

川口　一二君　住吉區阿部野橋筋2ノ2府舍宅
岡部　眞則君　住吉區旭町2ノ5(村上建築事務所)
森定松之祐君　天王寺區上汐町5ノ36
黑田　茂君　住吉區田邊西ノ町7ノ10
岡野　金作君　府下三島郡千里村片山45
田中　留男君　西成區千本通4ノ17
松井清之助君　京都市中京區河原町通二條下ル1ノ船入町537ノ1
鈴木忠五郎君　住吉區田邊東ノ町6ノ25
祐安　薰信君　神戸市灘區德井町38
五十嵐芳雄君　兵庫縣武庫郡御影町郡家字庄田234
高井　久治君　東區平野町5 大阪瓦斯會社工事場大林平野町出張所
藤井　茂美君　西成區田端通2ノ21藤井組工務店
平島　末吉君　住吉區阿部野筋4ノ28
松浦　基二君　東淀川區元今里町南通3ノ40ノ7
高田　昌平君　府下三島郡吹田町旭町1325
河野　半七君　天王寺區筆ヶ崎町赤十字病院分病舍建築場安藤組出張所

會員(地方在住)

小野八右衛門君　高松市西ノ丸町2
杉浦喜三郎君　宇部市宇部新川沖ノ山宇部第二發電所建築場竹中工務店出張所
岩淵　文治君　廣島市大須賀町581
糟谷　謙三君　東京市牛込區矢來町56
松井　宗一君　東京市麻布區本村町146

終身賛助員

湯淺　乙吉君　千葉縣本銚子町清水町

特別賛助員

戸田　賢一君　大阪市外守口町土居473
大須賀　巖君　千葉市寒川袖ケ浦小路

普通賛助員

古川　東一君　福島縣本宮町郡是製糸株式會社本宮乾燥場建築事務所
山崎　敏雄君　北區北同心町1ノ12岸本方(中村建築事務所)
山管喜美男君　京都市上京區小山花ノ木町65ノ28
角野　孝君　堺市大町西2丁9
小川　光一君　津市丸ノ內南本町　岡村方
筑紫　太郎君　小倉市下到津1140ノ2
林　健雄君　臺北市樺山町32
足立清一郎君　港區八條通1ノ1
森　泰治君　東京府下荻井町上荻窪488

圖書

圖書購入

American Architect
American City
Architectural Forum
Architectural Review
Building & Building Management
Bauingenieur
California arts & Architecture
City Planning
Der Baumeister
Das Werk
Die Wohnung
L'Architect
Mobilier et Decoration
Moderne Bauformen
New York Times "Mid Week Pictorial"
Neue Frankfurt
Town Planning Review
Wasmuth's Monatshefte fur Baukunst und Stadtebau

轉居先不明者御尋ね

下記の協會員の住所或は勤務先御存じの方は事務所へ御一報下さる樣御願いたします

會員(地方在住)福　永　收　三君
同　朝　香　茂君
普通賛助員　小西松太郎君

1 午後1時一同ライオン食堂に集合、少憩の後先づ南日東町の市營住宅工事場に到り、同現場主任川端氏の詳細なる説明を聞きたる後、桃ノ木、下寺町の順序にて見學をなす

1 右見學後、大阪織物株式會社工場に到り、同工場長の厚意に依り職員諸氏の案内にて同工場内、男女寄宿舍各社宅等殘すところ無く見學し大いに得るところありたり

1 見學終了後南海高島屋グリルに於て晩餐を共にしつゝ各員意見の交換をなし且感想等を述べ散會せり

例會

三月例會

時　3月26日午後1時30分—同4時

所　住友製鋼所見學

出席者　91名

記事

1 住友製鋼所に於ける鑄鋼作業及目下組立中の金庫ステイール・ライニングに付見學をなしたり

1 當日快晴にして定刻午後1時30分には參加會員70餘名の來場あり、同所通用門に受附を設け之より一同入所大講堂に至る、同講堂に於ては茶果及パンフレットを備へ隨意に休憩する樣設備しありたり

1 少憩後見學開始に當り同所常務取締役荒木宏氏より一同に挨拶並見學の梗概に付ての説明あり　副會長武田博士は會員一同を代表して本日の見學に付謝辭を述べ夫れより數班に分れ、各班は説明者に案内されつゝ午後4時全部の見學を終り散解せり

會員動靜

入會者

會員

安藤　一雄君　北區東梅田町25(大原建築事務所)

小川兵一郎君　兵庫縣武庫郡良元村仁川

喜多　利德君　京都市上京區下立賣通千本西入清水組京都支店

中島　活石君　東區高麗橋野村ビル(安井建築事務所)

永島　敬通君　北區曾根崎上3丁目2

西村　安彦君　兵庫縣武庫郡住吉村字梅ノ木849ノ1(大倉土木株式會社大阪出張所)

姫野　義正君　東淀川區十三西之町2丁目27(木下工務所)

藤原　義一君　京都市左京區黒谷町1田中氏方(京都市帝國大學講師囑托)

政岡　基次君　西區土佐堀3丁目16(松村組)

會員(地方在住)

篠田　和雄君　廣島市南千田町1057(神村組)

竹内　六藏君　東京市外澁谷町金王58(鹿島組)

守谷　茂君　廣島市鐵砲町76(竹中工務店)

普通賛助員

大原　弘君　堺市北安井町18大原勝太郎方(中村建築事務所)

小松　四郎君　天王寺區北山町40(東洋リノリユーム株式會社)

鹽崎　俊一君　京都市左京區聖護院中ノ町1(竹中工務店)

中村　英夫君　東淀川區蒲島町43(竹中工務店)

藤島　幸滿君　南區鹽町1ノ1(中村建築事務所)

退會者

會員　角田　政一君、山中宗三郎君、湯淺十三二君

會員(地方在住)　川本榮治郎君

特別賛助員　小森市太郎君

普通賛助員　長田義廣君、日置忠君、光永悟君

會長消息

片岡會長より下記の通通信がありましたから御披露いたします

池田副會長宛

3月26日　カイロにて　片岡安

本日ピラミツトの見學をしました明日は當地の博物館を見て直に乘船伊太利へ向ひます

遙かに貴下の健康を祈ります役員諸賢に宜しく

協會宛

4月1日　ローマにて　片岡安

途中無事本日ネープルよりローマへ着、七八日頃ジユネーブに到着の豫定です途中に會員諸君の健康を祈ります

池田副會長宛

4月4日　フローレンスにて　片岡安

ナポリへ上陸途中ローマを經當地へ立寄りました

會員各位へ宜しく

協會宛

4月4日　ヴェニスにて　片岡安

途中無事本日こちらへ着きました愈々明日出發、ミランを經てジユネーブへ行きます、遙かに諸君の御健康を祝します

1 建築競技執行規準草案(日本建築士會作成に係る)を通讀し其の概念を得たる後二三意見を交換して散會せり

教化委員會

時　4月2日午後5時30分—同7時30分
所　本協會事務室
出席者　幹事　芝田　　委員　伴野、山本
記事
1 本夕は出席者少なき爲協議を進むること能はず依つて幹事に於て講演會講師を内選の上適當なる日時を選び委員會を開催することとす
1 松本委員より前回申合せに依る講演會に關し武田博士との交涉の結果を左の通報告せられたり
講師の件　京都の土地故なるべく京都以外の人を選定する方宜しからんと
場所　日ノ出會館を適當と思ふ
期日　4月末乃至5月中旬頃が適當と思ふ　以上

資料委員會並見學會

時　4月7日午後2時30分—同5時30分
見學　大阪窯業セメント株式會社工場
出席者　委員長　松室　　幹事　須川
委員　阪井、白石、平野、福田、山中
記事
1 午後2時30分 協會事務室に集合し同會社員の案内にて木津川工場に至り工務課長渡邊勝二氏の各材料並製造法に付詳細なる說明を受けたる後社員の案内にて工場を視察し午後5時歸所せり
1 午後5時30分よりライオン食堂に於て定例委員會を開催し前回に引續き各分科に於て調査研究をなしたり

災害强度委員見學會並座談會

時　3月25日午後1時30分—同7時30分
見學　伊藤萬商店新築工事場　　十合新築工事場
記事
1 先づ伊藤萬商店新築工事場に於て小笠原氏より今回ケーソンに依る潛函工事を着手するに至りたる動機より着手後に於ける種々なる狀況及工事の概略等說明あり後見學に移りたり
1 右見學後直ちに十合現場に到り數班に分れ同所の潛函工事に付是亦詳細なる說明を聞きつゝ見學をなしたり
1 見學終了後十合食堂に於て大倉土木株式會社建築部技師長武富英一氏始め大阪出張所主任籠田定憲氏其他同職員の人々と共に同社より晩餐の饗應を受け潛函工事に對する種々なる意見及將來に對する希望等を交換し有益なる時を過して散會せり

災害强度委員會

時　4月12日午後7時—同9時30分
所　純清倶樂部
出席者　幹事　落藤、青柳
主査　黒田、矢田
委員　大澤、川勝、篠原、
谷　、中島、堀田、
三浦、山田
記事
1 防火建築振興奬勵に關する陳情書に付協議の結果別紙の通可決せり(別紙略)
1 委員會規程改正委員會に提議すべき災害强度の部を左の通決定す
災害强度委員會は一般構造强度、材料の利用及施行等に關する研究をなし且建築物に及ぼす一切の災害を調査し之が對策を考究するものとす
1 鎔接研究會電弧鎔接標準示方書を全員に配布し次回迄に研究し置くことを申合せたり
1 混凝土合理調合法の解說に付各員に謄寫刷を配布し落藤幹事より說明をなし右に付ては次回に意見の交換をなすことゝせり
1 來る5月1日龜ノ瀨トンネルを見學することを豫定せり

住宅委員會

時　3月28日午後6時30分—同8時
所　ライオン食堂
出席者　委員長　葛野　　幹事　淺野、增山
第1分科 委員　赤松、中村、森元、渡邊(金)
第2分科 主査　南　　委員　河盛、小林
記事
1 6時半開會先づ委員長より、近く編輯に於て「實用小住宅號」發行の計畫の下に本委員會に對し原稿執筆方依頼ありたる旨を述べ極力其の希望に添ふ樣に致し度しとて大體委員長外十五氏を選定せり
1 5月中旬頃建築に關する座談會を開催することを計畫し追て其の人選等に付協議することを申合せたり

住宅委員見學會

時　4月16日午後1時—同8時
見學　大阪市營住宅(南日東町、桃ノ木、下寺町)
大阪織物株式會社(工場、寄宿舍、社宅)
出席者　幹事　淺野
委員　赤松、河盛、小林、篠崎、南、森元、
渡邊(金)
記事

會　報

役　員　會

常　務　會

時　昭和7年3月22日(火)午後5時
所　ライオン食堂(大同ビル地階)
出席者　理事　池田、武田　　監事　小笠原
　　主記　小川、鳥井、富士岡
　　主計　岡部、松井、呼子　　編輯　森本
議事
1 春季大會に關する件
1 評議員會開催につき打合せの件
1 會費滯納者並行衛不明者除名に關する件
1 會員入會勸誘（事務所移轉に關聯して特に增收を計る爲）の件
1 賞牌に關する件
1 定款改正委員會委員二名增員の件
1 日本ポルトランドセメント技術會發行報告書と會誌と交換の件
報告
1 2月分會計報告
1 會費一時金納入額に關する件
1 雜誌印刷入札の件

常　務　會

時　昭和7年4月4日午後6時—同9時
所　ライオン食堂
出席者　理事 池田　主記 伊東、小川、大原、鳥井、富士岡
　　主計　松井　　編輯　高橋、中山
議事
1 創立滿15年記念事業調査委員會設置の件
1 建築工事現場主任者の資格に關する件
1 事務所移轉に付準備の件
1 建築俱樂部設立の件
1 雇辭職の件
1「市街地建築物法令」發行の件
1 防空問題の件
1 鄉土建築資料編纂の件
1 住宅設計懸賞圖案總大觀編纂の件
1 會員詮衡
報告
1 雜誌4、5、6月の特輯題目の件
1「メートル」法に依る實用安價小住宅設計圖案懸賞募集締切日延期の件

常　務　會

時　昭和7年4月15日(金)午後5時(定例日繰上)
所　朝日クラブ
出席者　理事　池田
　　主記　伊東、大原、富士岡
　　主計　松井
　　編輯　增田
議事
1 日本土木建築請負業者聯合會より照會に係る都市防火建築の振興奬勵に關する陳情の件に對する回答案
1 全國都市問題會議に提出問題の件
1 資源局長官より照會の件
1「市街地建築物法令」刊行の件
1 不用版木處分の件
1 職員採用の件
1 會員詮衡
報告
1 春季大會に關する件
1 春季大會委員一名追加の件
1 事務所移轉に關する件
1 紋章圖案應募の件
1 三月分會計報告

委　員　會

法制委員會特別分科會

時　3月25日午後6時—同8時30分
所　ライオン食堂
出席者　玉置、新名、吉田、楠瀨、內藤、小川
記事
1「耐火構造家屋の諸稅率に關する意見書」全國都市問題會議に提出すべき原稿として玉置委員より提出に付協議し委員長席に付委員長閱讀の上常務會に回答することに決定
1「建築物內空氣の汚染狀態に關する意見書」に就ては諸材料出揃ひたれば今月中に草案作製し委員長の手許へ提出することに決定す

法制委員會特別分科會

時　4月13日午後6時30分—同8時30分
所　ライオン食堂
出席者　石川、吉田
記事

日本建築協會役員及委員

（昭和七年）

社團法人

役員

會長　安實一　銅雄　郎吉知信一則助正治郎清吉實郎衛吉郎知則吉郎郎安二一良郎男重夫二次一治吾信雄郎三一郎郎忠助八清三吾吉二平正吾

副會長　片池武小津伊小大鳥富岡松呼高中增森池伊岩小小大岡落河河片加小小酒白芝新清末武高德鳥中中伴富藤堀牧松松增三村森八山呼渡

副會長　岡田五笠田東川原井士部井子橋山田本田東尾川川原部藤合盛岡藤寺西井石田名水澤田橋政井村山野士本田野井本田木野本木田子部

監事　敏太陽芳重顯之榮太藤太保陽一芳顯藤一太誠彌一三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

監事　宗安敏藤貞益岡誠彌一三喜勇登名水澤田橋政井義太榮岡賢獻清井本田野本木木田子部

主事　保原太宗太原敏太陽芳重顯之榮太藤太保陽一芳顯藤一太誠彌一三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　陽一芳顯藤一太誠彌一三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　一芳顯藤一太誠彌一三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　顯藤一太誠彌一三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　藤一太誠彌一三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　太誠彌一三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　誠彌一三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　彌一三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　一三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　三喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　喜知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　知種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　種榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　榮周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　周五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　五榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　榮金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　金義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　義太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　太貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　貞重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　重太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　太次之儀來藤藤盛亟圭

主事　次之儀來藤藤盛亟圭

主事　之儀來藤藤盛亟圭

主事　儀來藤藤盛亟圭

主事　來藤藤盛亟圭

主事　藤藤盛亟圭

主事　藤盛亟圭

主事　盛亟圭

主事　亟圭

主事　圭

委員

會員委員制法

長　今一郎　吉介夫生夫市治吾平武

委員　林彦太郎

第一分科

主事　加北伊作新椎古村山吉善之和出種兵正藤亟信

幹事　藤垣間名原塚野田田

委員　藤熊日種兵正藤亟信

委員　藤熊日種兵正藤亟信

委員　藤熊日種兵正藤亟信

建築と社會第15輯第5號

廣告索引

ア 有山組……8
安藤組大阪支店……8
旭硝子株式會社……39
淺野スレート株式會社……20
淺海商店……26
阿部鐵工所……46
イ 池田建築事務所……5
池田谷建築事務所……5
池田組……8
伊藤建築事務所……5
エ 榮進社……19
英進商會建材部……55
オ オキナ商店……36
大阪製鎖所エレベーター部……9
大阪窯業セメント株式會社……國際ウラ
大阪伊丹商店……16
大阪橋本組……9
大林組……9
大野製作所……1
大倉土木株式會社大阪出張所……8
小笠原建築事務所……5
奥村重兵衛商店……28
岡部建築事務所……5
岡本工務店……9
置鹽建築事務所……5
カ 葛野建築事務所……5
龜谷開作商店……10
關西ステンドグラス製作所……56
キ 木下謹三商店……16
桐田商會……35
ク 國枝工務所……5
工藤電氣工務所……47
國藤工務所……47
熊取谷熊次郎商店……10
久保田組……10
コ 鴻池組……10
金剛商會大阪支店……42
サ 佐藤四郎建築事務所……6
佐伯組……11
佐久間パブコ工業株式會社……14
三機工業株式會社……表紙2
笹岡家具裝飾店……22
三共株式會社……51
阪本商會大阪出張所……25
三稜社……33
シ 清水榮二建築事務所……6
清水組大阪支店……11
城口研究所大阪支店……41
設樂建築事務所……6
島貿易株式會社建材部……43
ス 須賀商會……31
セ 清光社……44
ゼ 錢高組……11
ソ 宗建築事務所……6
タ 竹中工務店……11
多田建築事務所……6
田村商店……45
田中昌司商店……22
ダ ダンロップ護謨株式會社……國際ウラ
大鐵電車……34
大和工業株式會社……57
ト 朝永建築事務所……6
東洋工業株式會社……55
東洋陶器株式會社……48
ナ ナンコク商事株式會社……21
中村建築事務所……6
中村グラニット商會……13
中川辰藏店……12
內外土木建築材料合資會社……40
南滿鑛業株式會社……30
ニ 日本ペイント株式會社……27
日本ドアーチエック製作所……52
日本建築紙工株式會社大阪支店……33
日本石綿盤製造株式會社……24
日本鋼製建具株式會社……37
日本建鐵株式會社……34
西原衛生工業所大阪支店……23
西孫南店建築金物部……25
新田ベニヤ製造所……49
ノ 野村建築事務所……6
野澤幸三郎商店……32
ハ 橋本建築事務所……7
原科建築事務所……7
原商事株式會社……54
ヒ 平松釣戶車製造所……44
フ 藤木工務店……12
藤田商會……18
マ 增田建築事務所……7
眞水三橋建築事務所……7
マルエス工業株式會社……15
ミ 宮島康夫商店……53
ミナト製作所……30
三井物產株式會社……17
三宅茂雄商店……50
ム 村上建築事務所……7
モ 森本建築社……12
ヤ 安井建築事務所……7
八木工務所……12
矢橋大理石商店……18
山本東作商店……42
山本窯業商店……53
ヨ 横河工務所……7
横河橋梁製作所……29
米田製藥所……50
米本商店……38
レ 玲光社(木內眞太郎)……38